22. 学習の方法（情報・資料収集）

Summary

すべての学部において、インターネットの無料サイト（ウィキペディアや質問サイトなど）を最も参考にして情報収集している学生が一定数おり、特に初年次の割合が最も高いことが明らかとなった。

Q17. あなたは授業でレポートの課題がでた場合、どのような手段を参考にして、情報や資料を集めますか。作成するにあたり、もっとも参考にしたものに、１つだけ◯をつけてください。

1　インターネットの無料サイト（ウィキペディアや質問サイトなど）を参考にする
2　インターネット上にある関連論文・図書・新聞記事を参考にする
3　図書館が提供する Web データベースで関連図書・論文・新聞記事を参考にする
4　図書館に行って、関連論文・図書を参考にする
5　先生に話を聞きに行って、参考にする
6　友人や先輩に話を聞きに行って、参考にする

大学生にとって、学習活動に取り組むための情報収集は必須能力である。ここでは、（１）学部と（２）学年の観点から学生がどのようにして学習活動のための情報を収集しているのかを分析する。

近年のインターネット環境の発展により、レポート課題等に取り組む際に無料サイト（ウィキペディアや質問サイト）を最も参考にして学習活動に必要な情報収集を行う学生が一定数いることが明らかになった。本来ならば無料サイト（ウィキペディアや質問サイト）にある情報はレポート課題等に用いることができるものではないが、（１）全ての学部において一定数の学生が無料サイトの情報を参考にしていた。具体的には、理工学部が32.6％と最も多く、次いで人間福祉学部が30.5％であった。最も数値が低かったのは国際学部の5.6％で、それ以外の学部は約10％～20％であった。「インターネット上にある関連論文・図書・新聞記事を参考にする」割合がそれより高い学部が多いが、インターネット上にある情報の利用に関する教育の充実が必要になると考えられる。

インターネット上にある関連論文・図書・新聞記事の参考と図書館が提供する Web データベースでどちらをより利用するのかを比較した場合、目立った違いは見られなかった。Google Scholar や CiNii などの学術論文検索サイトが充実していることもあり、図書館の Web データベースを使わなくても検索できる情報はあることがわかる。

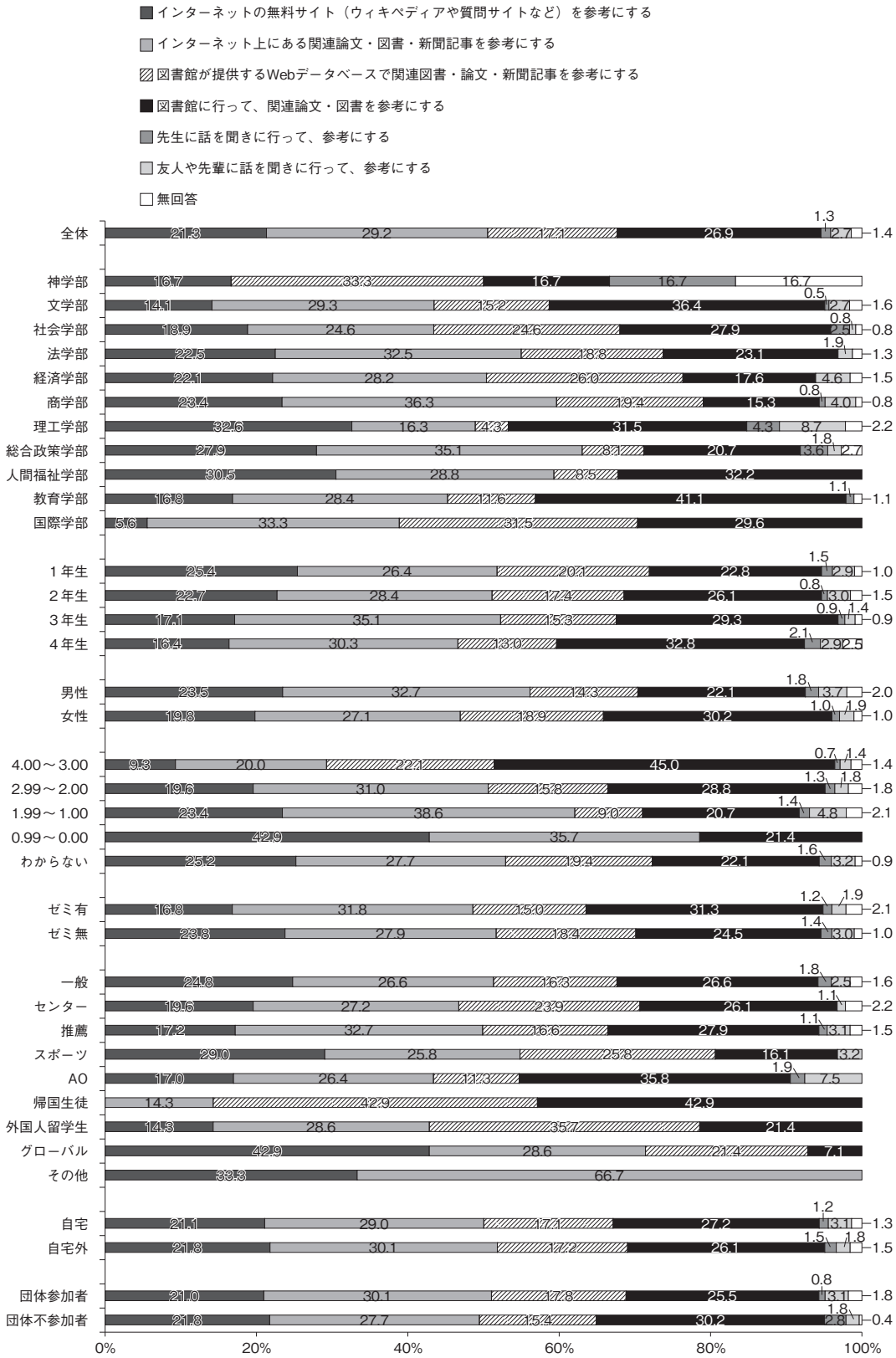
レポート課題等に取り組む際、最も「図書館に行って、関連論文・図書を参考にする」割合は、最も「インターネットの無料サイトを参考にする」割合と比べて大きな差は無い。つまり、図書館で文献を使って情報収集するよりもインターネットの無料サイトを使って情報収集をし、レポート課題を完成させる学生がいるということになる。図書館で行う本を使った情報収集とインターネットを使った情報収集では、情報の量や質に大きな違いがある。インターネットで時間をかけずに入手する情報と、じっくり課題の質を高めるために用いる情報を区別し、インターネットと図書館を活用することのできる力を育成する必要があると言える。

（２）学年別で比較すると、インターネットの無料サイト（ウィキペディアや質問サイト）を最も参考にする学生の割合は１年生が最も高く、上位年次になればなるほど少なくなっていく。具体的には、１年生が25.4％、２年生が22.7％、３年生が17.1％、４年生が16.4％となっている。一方で、図書館で関連論文や図書を参照する割合は、学年が上がるにつれて高くなる。１年生で22.8％だった図書館利用の割合は２年生で26.1％、３年生で29.3％、４年生で32.8％となる。このことから、入学初

期の段階から情報収集等に関するアカデミックスキルの教育を充実させ、大学生活４年間の学習に活かすことができるようにする必要があると言える。

課題レポートは、基本的に学生が自力で取り組むものであるため、教員に直接話を聞きに行って参考にする方法を最も取る学生の割合が全体的に低いことは、良い傾向だと考えられる（法学部、経済学部、人間福祉学部、国際学部は０％）。しかし、自力でやる際に収集する主な情報源がインターネットの無料サイトでは、良いレポートを書くことができない。また、そういった方法を取ることに初年次の段階から慣れてしまうと、それ以降の学習活動に大きな影響を与える可能性がある。今後は、アカデミックスキルに関する学習の場を充実させ、学生が適切な情報を適切な方法で収集することができるよう促すことが必要になると考えられる。

図Ⅱ-22　学習の方法（情報・資料収集）



23. 図書館の利用設備の満足度

Summary

大学図書館内の閲覧机と椅子については、全体として80%前後が「満足している」と「やや満足している」と回答している。しかし、館内に備え付けているパソコンの台数に関しては、全体の半数以上が「満足していない」と「あまり満足していない」と回答しており、特に上ケ原キャンパスの学部に在籍している学生の満足度が低い。

Q18. 図書館の施設・設備環境について、どの程度満足していますか。
A～Cについてそれぞれ0（利用したことがない）から4（満足している）までの数字を選んで○をつけてください。
A　閲覧机（利用のしやすさ、充電環境など）
B　椅子（快適性など）
C　パソコン（台数など）

西宮上ケ原キャンパス大学図書館は、1997年のグランドオープン以来、館内の施設や設備については大きな変更を行っていない。そのため、アクティブラーニングなどの学修スタイルの変化に施設・設備が対応できていないことが考えられ、今後のリニューアル計画策定の参考にするためこの質問を設けた。

A　閲覧机

全体では、「満足している」と「やや満足している」を合わせて81.8%が現状に特に不満を持っていない。しかし、学年ごとでは、1年生が85.2%であるのに対して、3年生は74.8%に減少している。一方、「満足していない」は1年生2.2%に対して3年生は6.3%である。ただし、4年生は「満足している」と「やや満足している」を合わせると1年生に次いで多い83.6%を占めているため、「学年が上がるにつれて満足度が下がる」とは一概に言えない。

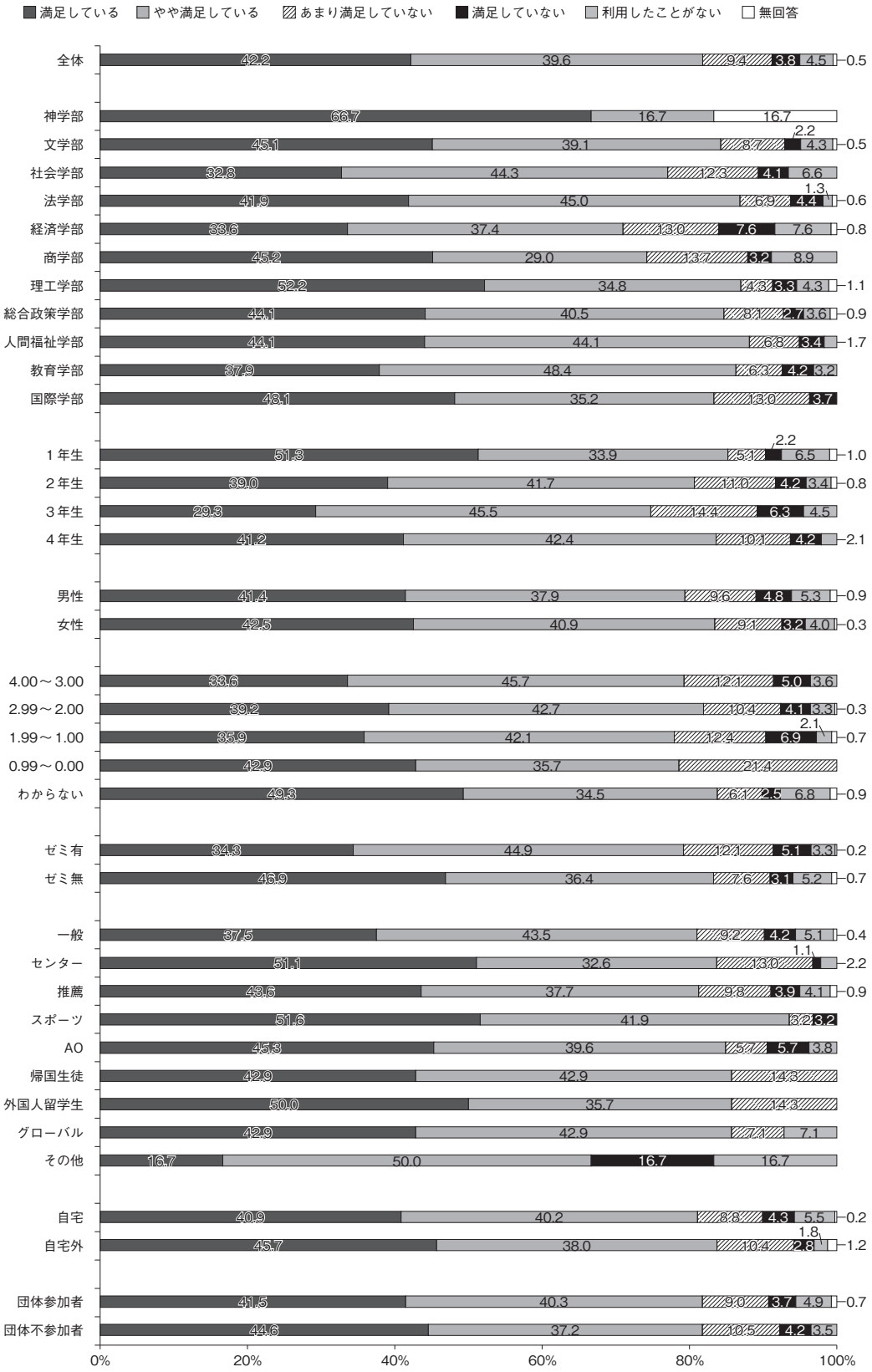
B　椅子

全体では、「満足している」と「やや満足している」を合わせて76.1%が肯定的な回答をしている。しかし、「満足していない」と回答した学生が全体で6.2%おり、学年が上がるほどその割合は大きくなり、1年生5.3%に対して4年生は8.4%になっている。おそらく高学年ほど演習・専門科目の学習や、就職活動、資格試験の準備などで大学図書館での滞在時間が長くなるため、椅子の快適性に不満を感じるようになると考えられる。

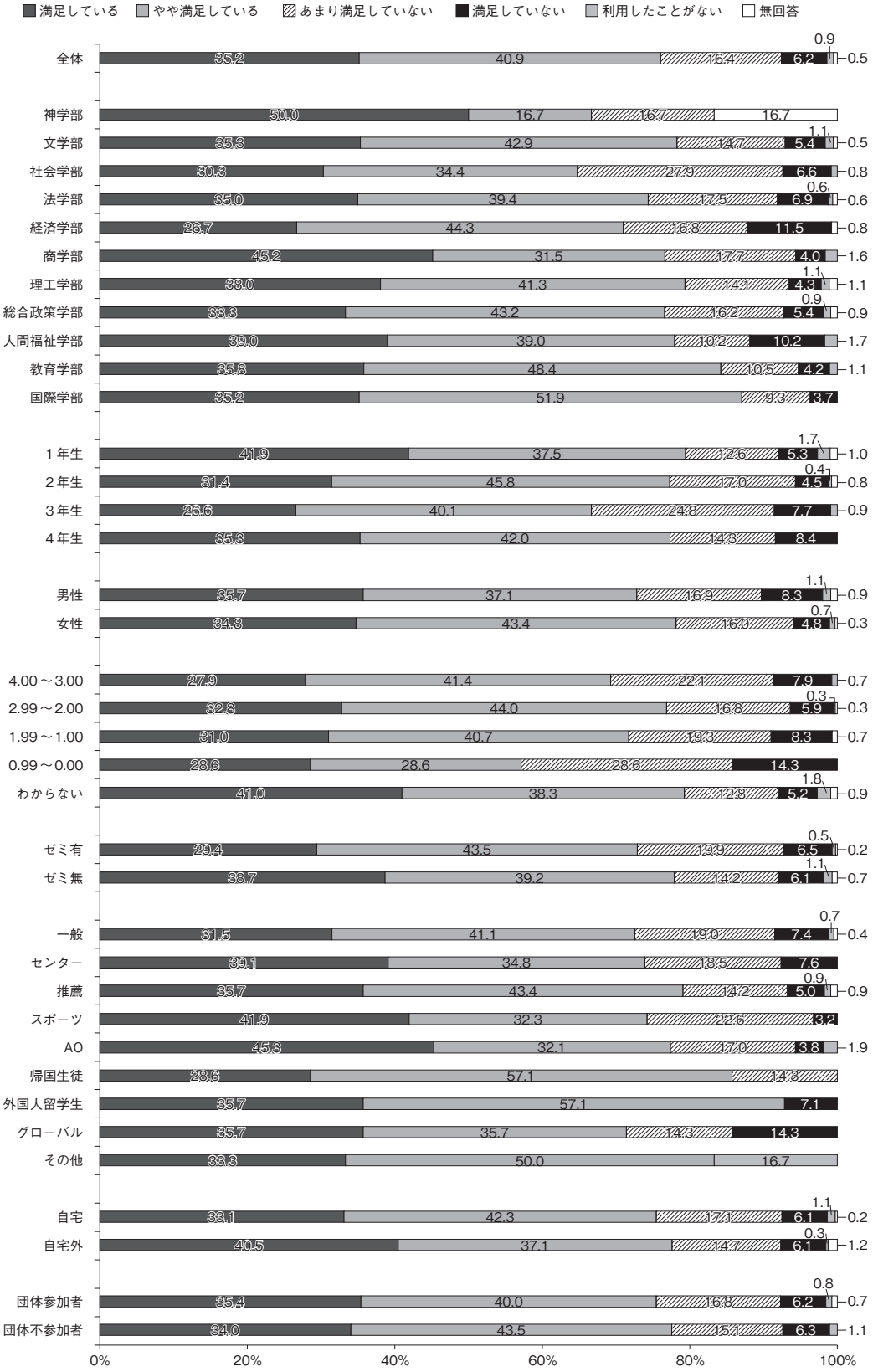
C　パソコン

閲覧机や椅子とは対照的に学生の満足度は低い結果となった。全体では、「満足していない」と「あまり満足していない」を合わせると56.6%が館内のパソコン台数などに不満を感じている。その傾向は上ケ原キャンパスの学部に所属する学生に顕著である。一方、館内にメディアフォーラムを併設している神戸三田キャンパス図書メディア館を日常的に利用している理工学部と総合政策学部の回答では、「満足している」と「やや満足している」を合わせた割合が50%以上となっている。

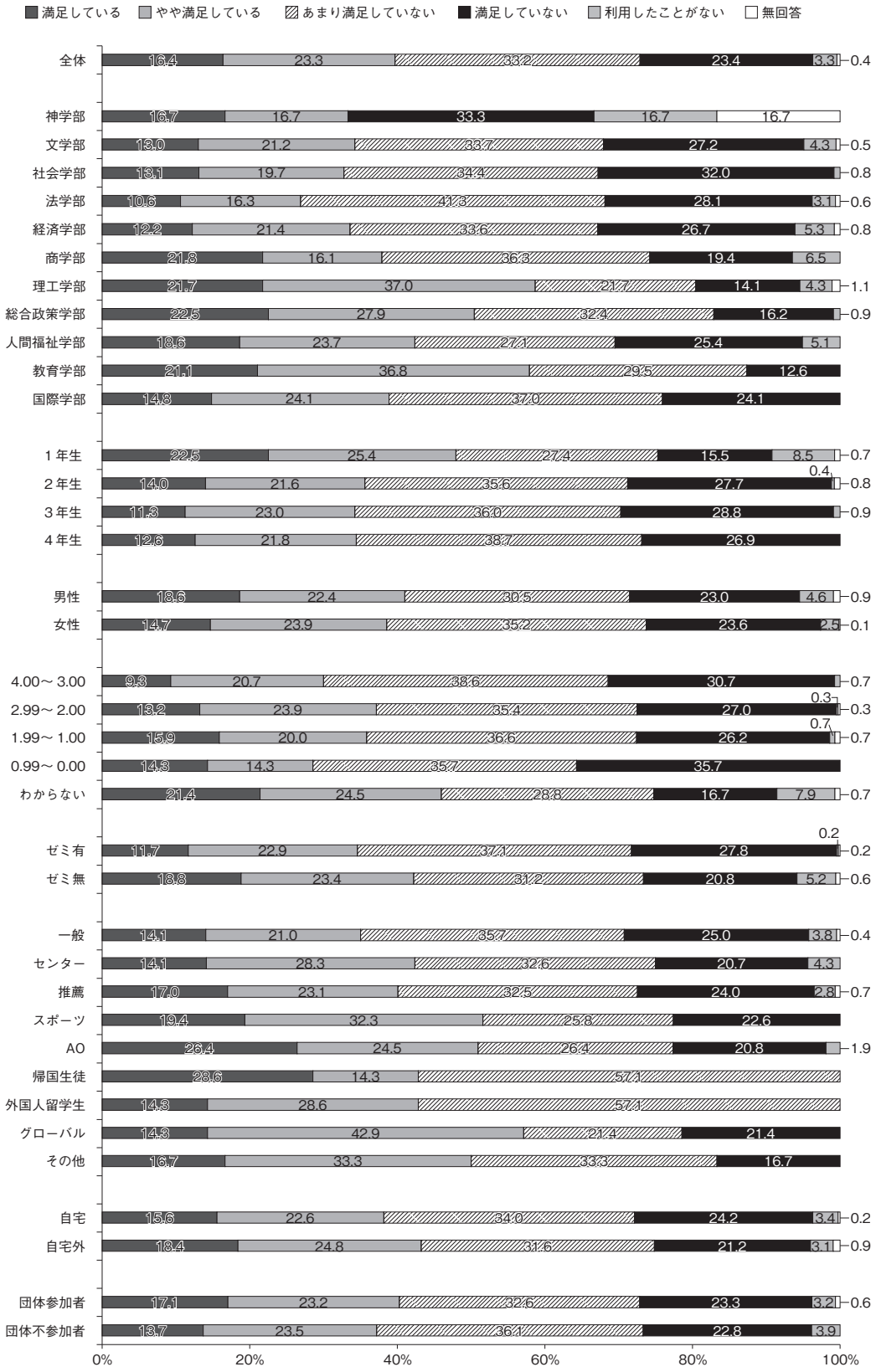
図Ⅱ-23-1　図書館の利用設備の満足度　A 閲覧机（利用のしやすさ、充電環境など）



図Ⅱ-23-2　図書館の利用設備の満足度　B 椅子（快適性など）



図Ⅱ-23-3　図書館の利用設備の満足度　C パソコン（台数など）



24. 図書館の資料やサービスの満足度

Summary

大学図書館の資料やサービスの満足度は概ね高いが、一方で「サービスを知らない、利用したことがない」という回答は１、２年生で多い。

Q19. 図書館の資料やサービスについて、どの程度満足していますか。
A～Fについてそれぞれ０（サービスを知らない／利用したことがない）から４（満足している）までの数字を選んで○をつけてください。
A　所蔵資料（図書・雑誌など）の充実度
B　所蔵資料（図書・雑誌など）の配置・探しやすさ
C　電子情報（Webデータベース・電子ジャーナルなど）の充実度
D　カウンターサービス（貸出返却カウンター）
E　カウンターサービス（レファレンスカウンター）
F　OPACオンラインサービス（予約・取り寄せなど）

A　所蔵資料の充実度

全体では「満足している」は46.3%であるが、学部ごとに差異がある。回答数が少ない神学部を除くと、法学部54.4%、人間福祉学部54.2%、国際学部53.7%が半数を超えているが、総合政策学部34.2%と理工学部34.8%が低い。学年ごとでは、満足度にそれほど変化はないが、「利用したことがない」は１年生11.1%から学年が上がるにつれて下がっている。

B　所蔵資料の配置・探しやすさ

全体では「満足している」が38.7%で、上記のA（所蔵資料の充実度）とは異なり、上ケ原と三田で満足度には差異はない。「利用したことがない」の結果や傾向はAと同じである。

C　電子情報の充実度

Webデータベースなどの電子情報は物理的に見える存在ではないため、大学図書館では講習会などを通じてその存在と利便性を学生に知らせる努力をしてきた。それでも、「サービスを知らない／利用したことがない」が１年生で16.5%という結果になった。ただ、学年が上がるごとに電子情報の存在が認知され利用されているようで、４年生で9.2%に減少している。また、利用したことがある学生はその利便性を評価しているようで、全体で「満足していない」と「あまり満足していない」は合わせてわずか7.6%にすぎない。

D　カウンターサービス（貸出返却カウンター）

全体では「満足している」と「やや満足している」を合わせた値が83.9%と高い結果となった。学部ごと、学年ごとで特に傾向は見られない。

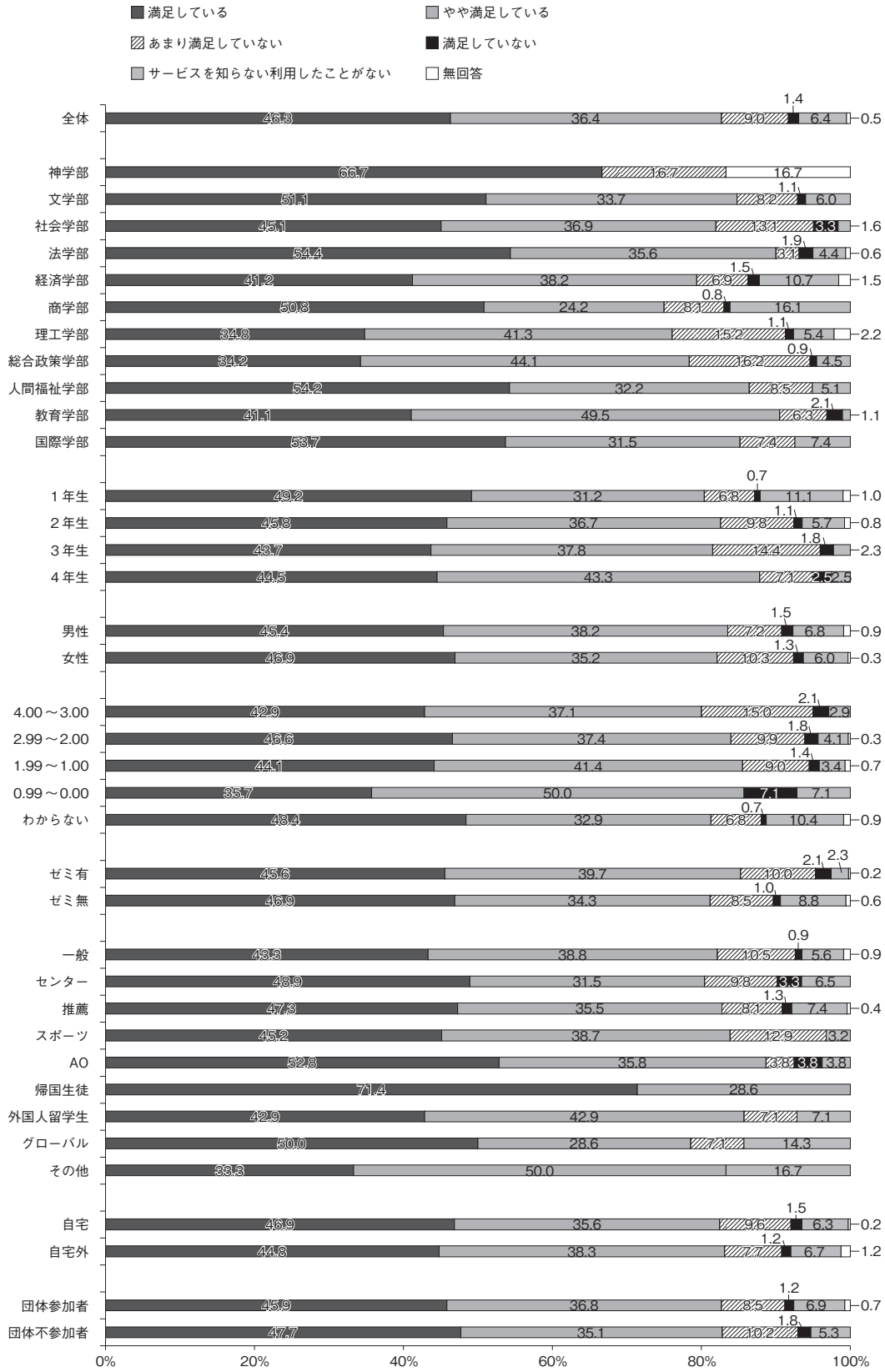
E　カウンターサービス（レファレンスカウンター）

相談窓口であるレファレンスカウンターは「サービスを知らない／利用したことがない」が全体で25.9%となり、認知度と利用経験が低いという結果になった。しかし、「満足している」と「やや満足している」が合わせて67.4%なので、利用した学生の満足度は概ね高い。

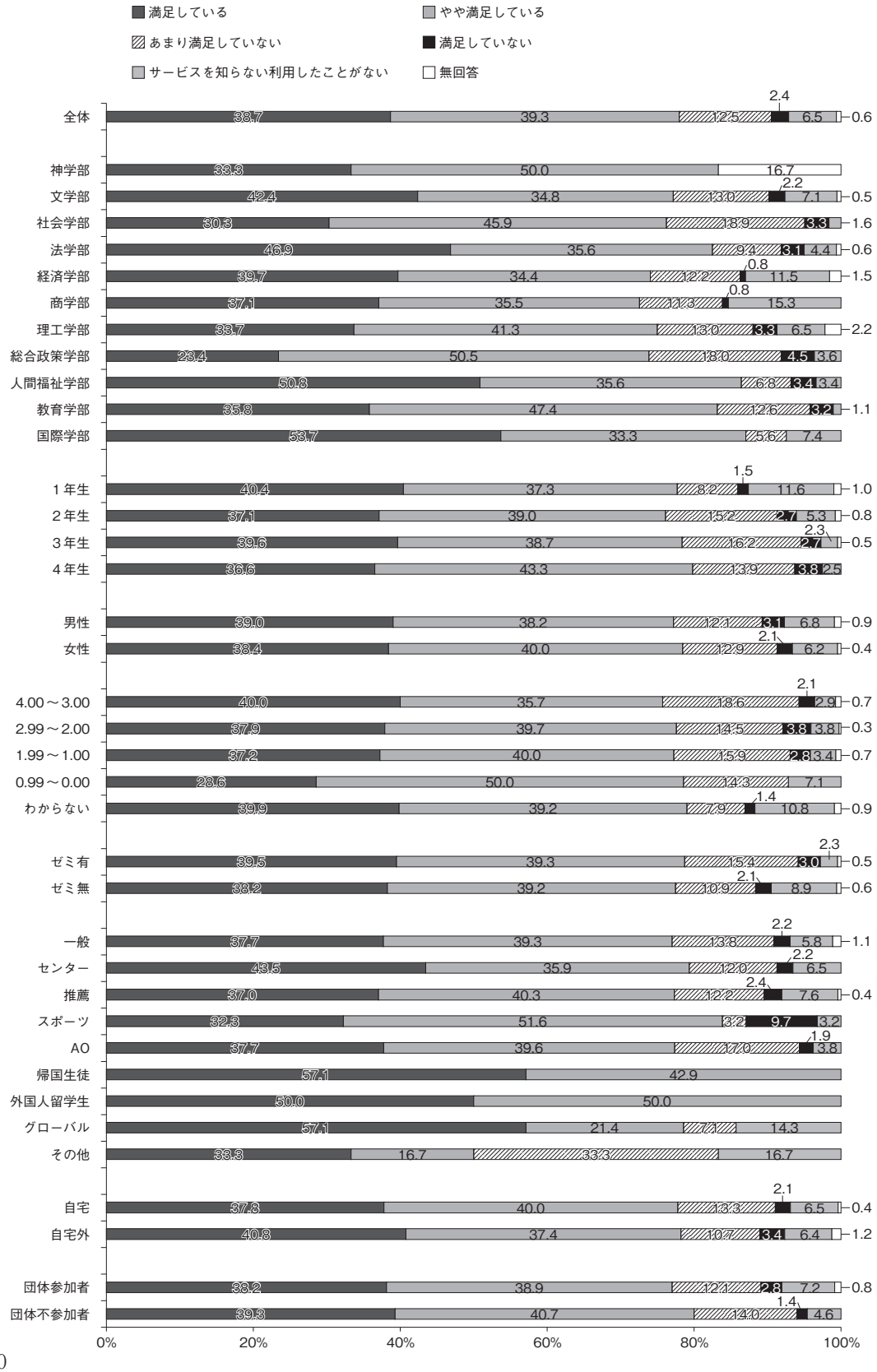
F　OPACオンラインサービス

「満足している」と「やや満足している」を合わせて全体で69.2%である一方で、「利用したことがない」が24.7%を占めている。この傾向はE（カウンターサービス（レファレンスカウンター））と同じである。

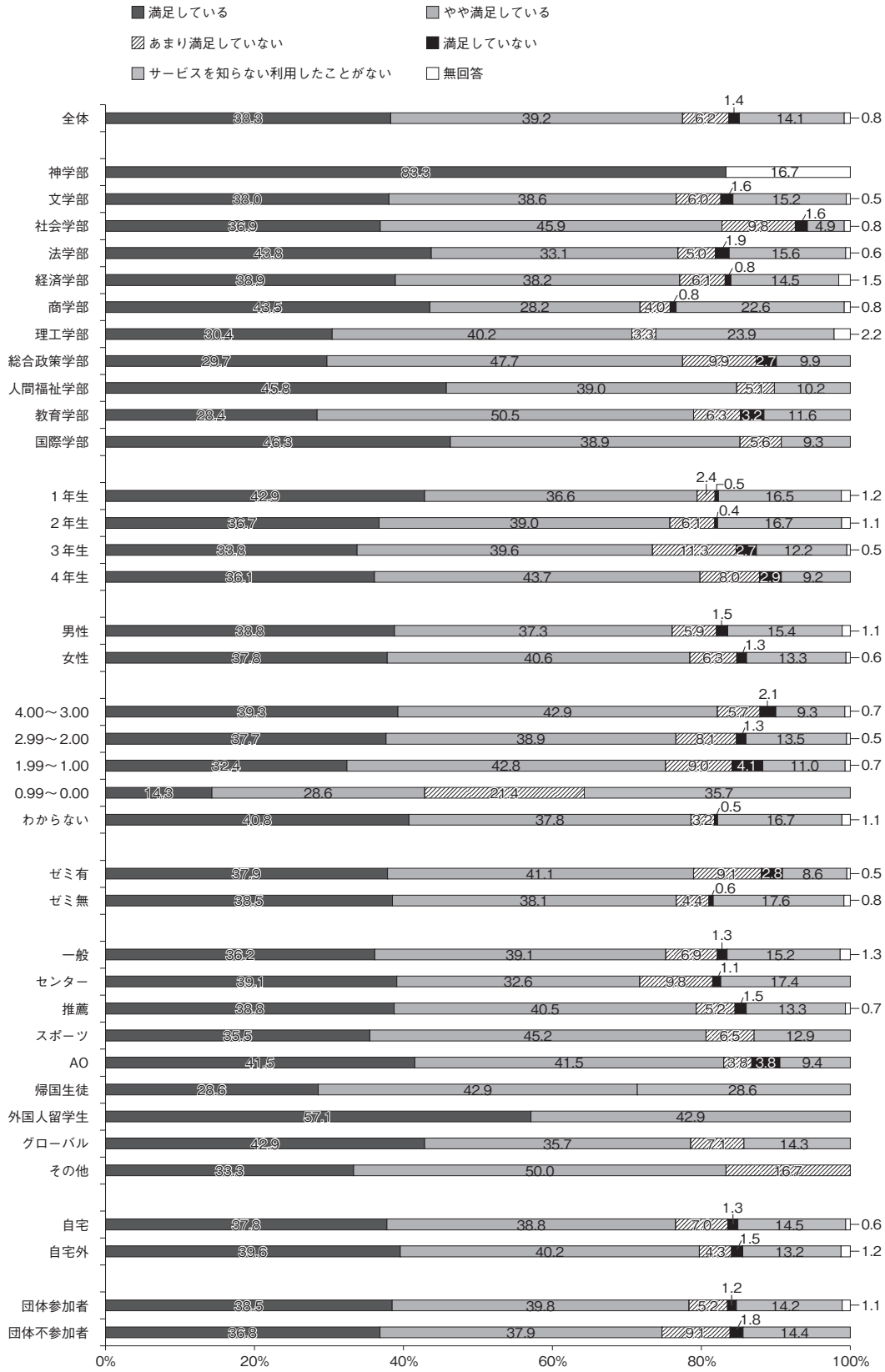
図Ⅱ-24-1　図書館の資料やサービスの満足度　A 所蔵資料（図書・雑誌など）の充実度



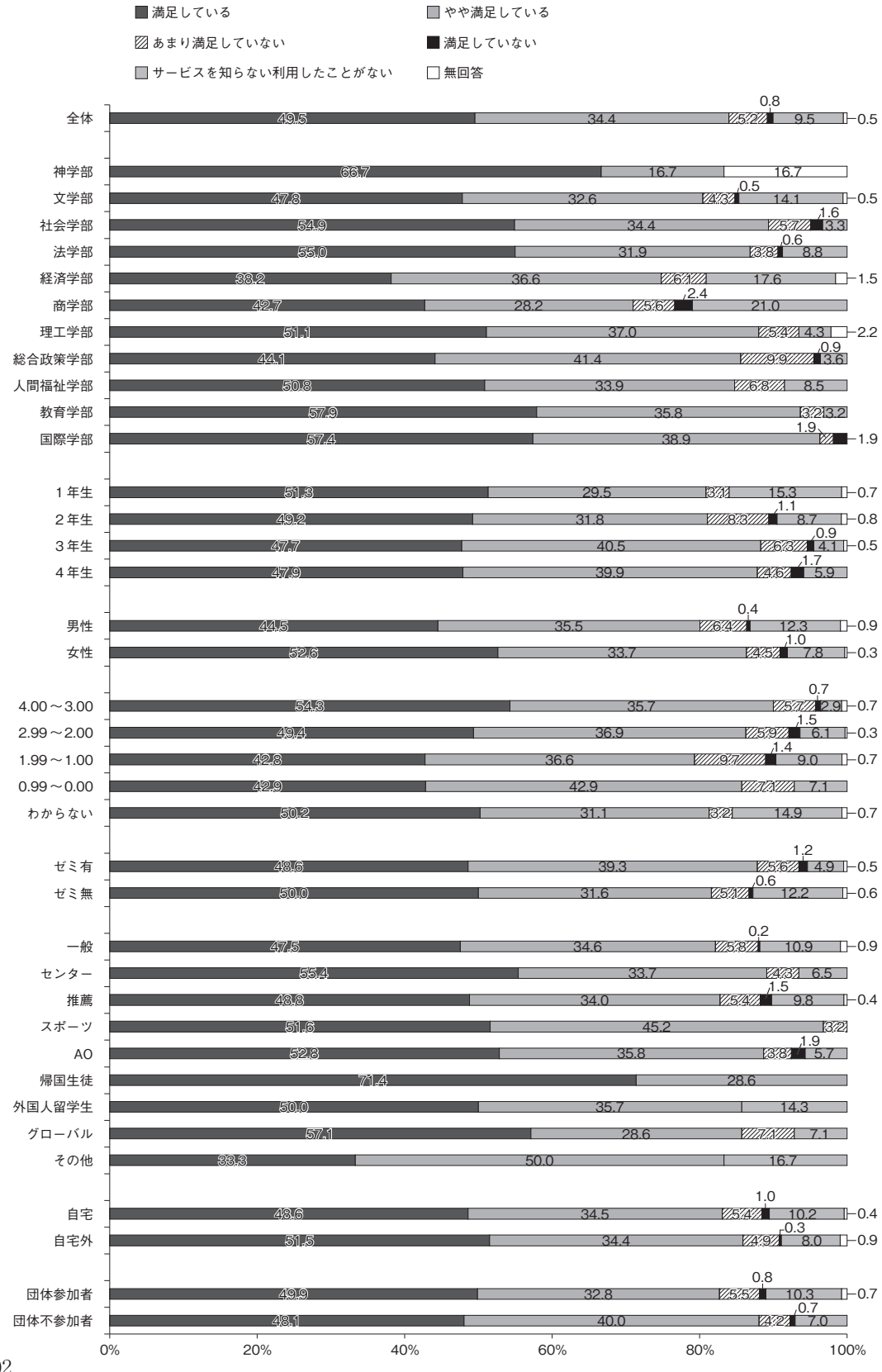
図Ⅱ-24-2　図書館の資料やサービスの満足度　B 所蔵資料（図書・雑誌など）の配置・探しやすさ



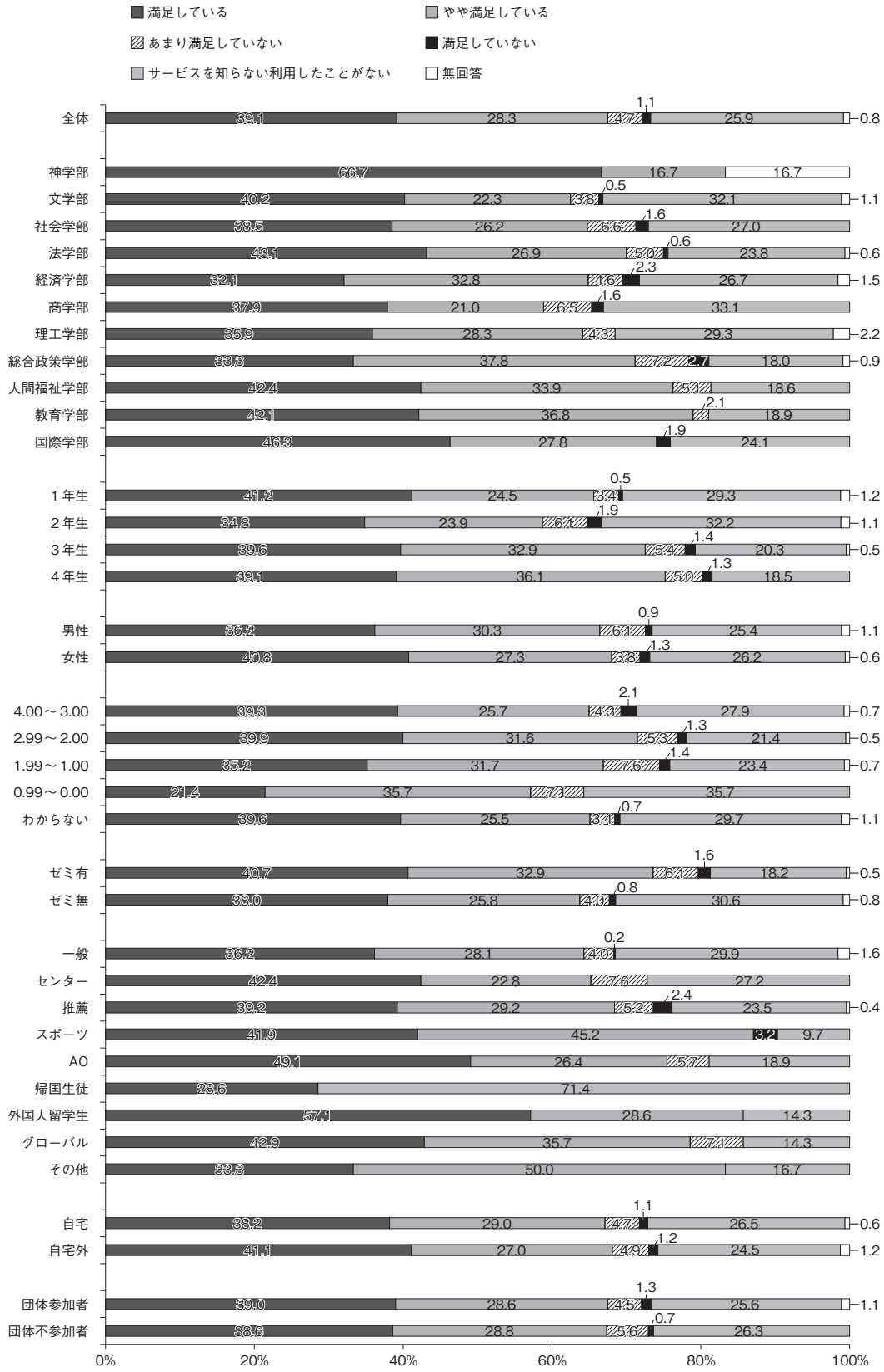
図Ⅱ-24-3　図書館の資料やサービスの満足度　C 電子情報（Web データベース・電子ジャーナルなど）の充実度



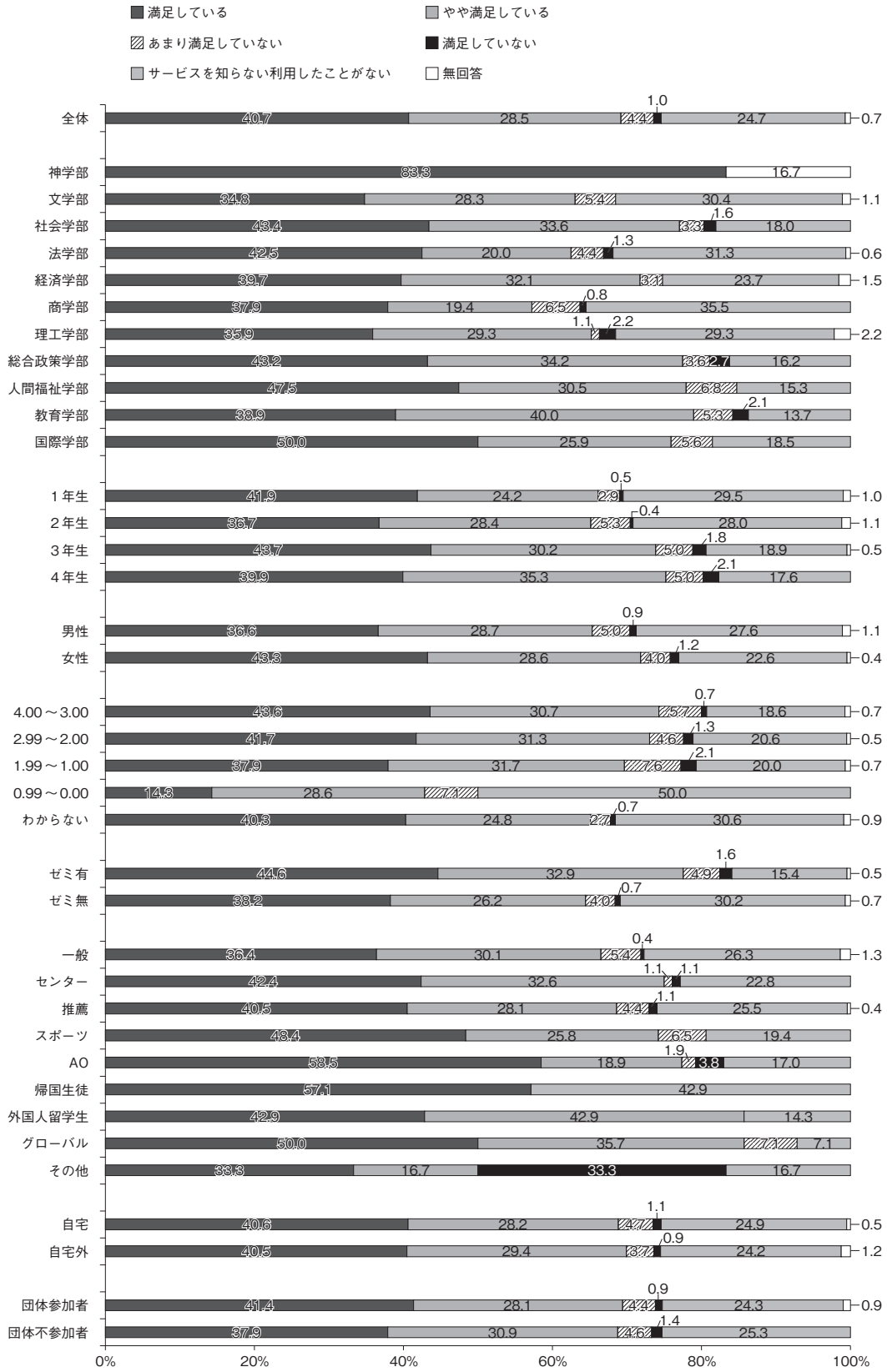
図Ⅱ-24-4　図書館の資料やサービスの満足度　D カウンターサービス（貸出返却カウンター）



図Ⅱ-24-5　図書館の資料やサービスの満足度　E カウンターサービス（レファレンスカウンター）



図Ⅱ-24-6　図書館の資料やサービスの満足度　F　OPAC オンラインサービス（予約・取り寄せなど）



25. コモンズの利用頻度と利用目的

Summary

コモンズの利用頻度は、神戸三田キャンパスでは約半数（47%）の学生が「週２、３日」以上利用しており、「全く利用しない」学生は10%程度。一方、西宮上ケ原キャンパスでは、「週２、３日」以上利用する学生が17%、「全く利用しない」学生が36%と、キャンパスにより利用状況が大きく異なる結果となった。また、「ゼミなどでグループ学習をする」「個人で勉強する」といった利用目的は、所属学部で異なり、授業に関する学習や資格取得等の学生の学習ニーズの違いが明らかになった。

Q20-1. あなたはラーニングコモンズ（上ケ原）やアカデミックコモンズ（三田）をどの程度利用しますか。

1　ほぼ毎日　　2　週に２、３日　　3　月に数回
4　学期に数回　　5　全く利用しない／利用したことがない

Q20-2. Q20-1で１から４と答えた方にお尋ねします。利用するときの主な目的は何ですか。

1　ゼミなどでグループ学習をするため　　2　個人で勉強するため
3　サークル活動を行うため　　4　友人と話すため
5　その他

神戸三田キャンパスのアカデミックコモンズは2013年に、西宮上ケ原キャンパスのラーニングコモンズは2014年に開設されたことを受け、今回初めて「コモンズ」の利用実態について調査を行った。

１．利用頻度

結果として、西宮上ケ原キャンパスと神戸三田キャンパスでその利用頻度に明らかな差があることがわかった。特に理工学部は、「ほぼ毎日」利用する学生が約30%、「週２、３日」利用する学生を含めると55%を超える利用状況であった。また、総合政策学部も、「ほぼ毎日」「週２、３日」で40%を超えており、「月に数回」利用する学生を含めると70%を超える学生が何らかの形でアカデミックコモンズを利用していることがわかった。

一方、Ｇ号館が主な活動場所となっている人間福祉学部、国際学部は他の学部に比べて明らかに利用頻度が低く、まだコモンズが設置されていない教育学部は70%を超える学生が利用したことがないということがわかった。

また、西宮上ケ原キャンパスの人間福祉学部、国際学部を除く学部の利用状況は、「ほぼ毎日」「週２、３日」利用する学生が平均17%、「月に数回」利用する学生を含めると平均40%の学生が何らかの形でラーニングコモンズを利用していることがわかった。

西宮上ケ原キャンパスの各学部管理建物では独自の学習スペースの整備がすでに行われていること、Ｇ号館では２階に大規模なラウンジスペースも整備されていることから、学生は授業の空き時間や利用時間帯、利用ニーズに応じて、活動場所を適宜使い分けていると推測される。

学年別の利用状況では、１年生の「全く利用しない／利用したことがない」割合が50%を超えており、認知度の低さがうかがえた。基礎ゼミ担当の先生方への周知を含め、今後何らかの対策が必要と思われる。

なお、GPA の数値による利用状況では、GPA の数値が1.00を下回る学生で「全く利用しない／利用したことがない」割合が57%と突出して高い数値となった。

２．利用目的

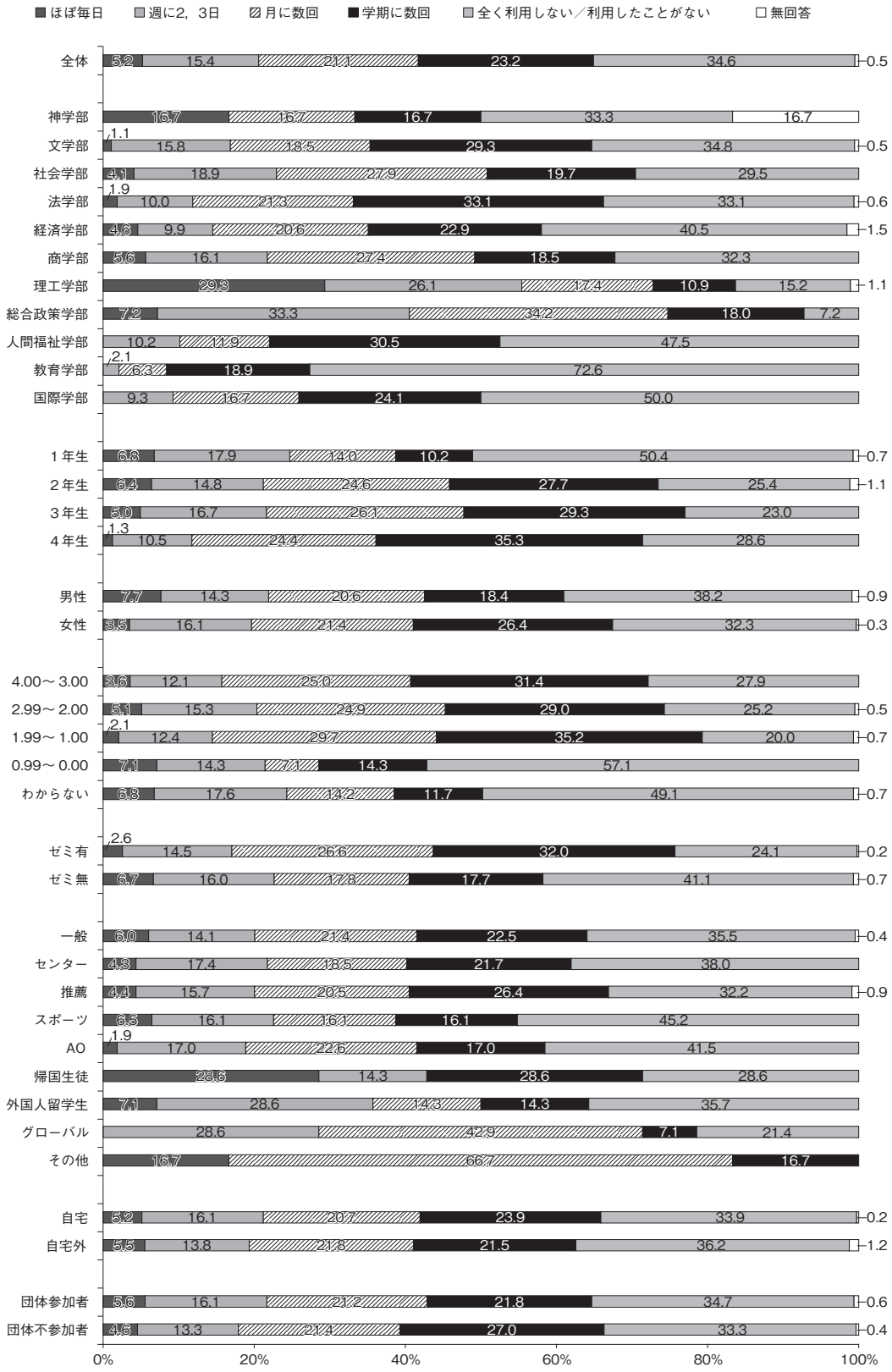
次に利用目的に関する調査では、所属学部によって、授業の課題やレポート作成、ゼミでのグループ活動の作業、資格取得に向けた勉強など利用目的の傾向が異なることがわかった。経済学部、商学部は、「ゼミなどでグループ学習する」目的での利用が多く、文学部、社会学部、法学部、理工学部などは「個人で勉強する」目的での利用が多かった。なお、「ゼミなどでグループ学習する」目的で利用する学生の GPA は相対的に高い傾向があることも本調査から読み取ることができる。

３．クロス集計結果

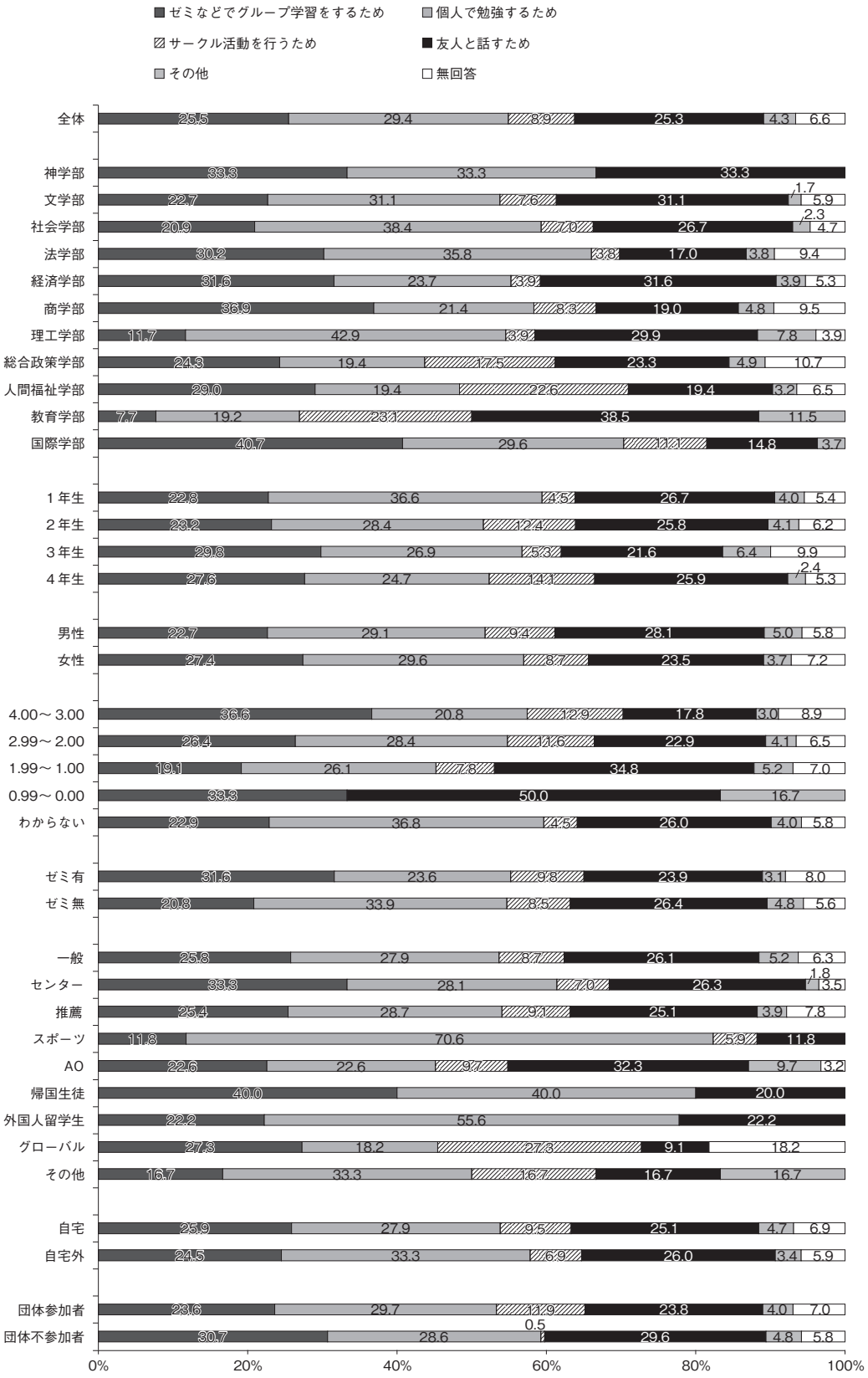
Q20-1（利用頻度）とQ3-2（１週間に授業関連の学習に費やす時間）とのクロス集計結果で見た場合、「ほぼ毎日」の学生は「週６～10時間」以上学習している割合が45％、「週に２、３日」の学生は28％という結果となり、コモンズの利用頻度と授業関連の学習に費やす時間は密接に関係していることがわかった。次にQ3-6（１週間に授業時間以外で大学に滞在する時間）とのクロス集計結果で見た場合、「ほぼ毎日」の学生が「週６時間～10時間」以上滞在している割合が71％、「週に２、３日」の学生が「週６時間～10時間」以上滞在している割合が42％という結果となったが、コモンズを「全く利用したことがない」学生が「週６時間～10時間」以上滞在している割合も39％となっており、課外活動等で長時間学内に滞在する学生も相当数存在するため、コモンズの利用頻度と大学に滞在する時間は必ずしも相関していないこともわかった。

また、Q20-1（利用頻度）とQ20-2（利用目的）とのクロス集計結果で見た場合、「ほぼ毎日」利用する学生の53％、「週に２、３日」利用する学生の42％が「個人で勉強する」目的で利用していることがわかった。Q20-1（利用頻度）とQ-27F（コモンズの快適さ）とのクロス集計結果で見た場合、利用頻度が高いほど快適と感じる学生が多いという結果となったが、コモンズという目的や必要性に応じて比較的自由に学ぶ場があることが、学生の学ぶ意欲を後押しすることにもつながっていることが推測される。

図Ⅱ-25-1　コモンズの利用頻度



図Ⅱ-25-2　コモンズの利用目的



26. 留学生や外国人教職員との接触度

Summary

42.1%の学生が日常的、もしくはたまに留学生や外国人教職員と接していると回答している。所属学部や、性別、GPA で接触頻度に差異がみられた。

Q21. あなたは留学生や外国人教職員と接する機会はありますか。
最もあてはまるものに、1つだけ○をつけてください。

1　日常的に接している　　2　たまに接している
3　ほとんど接していない　　4　全く接していない

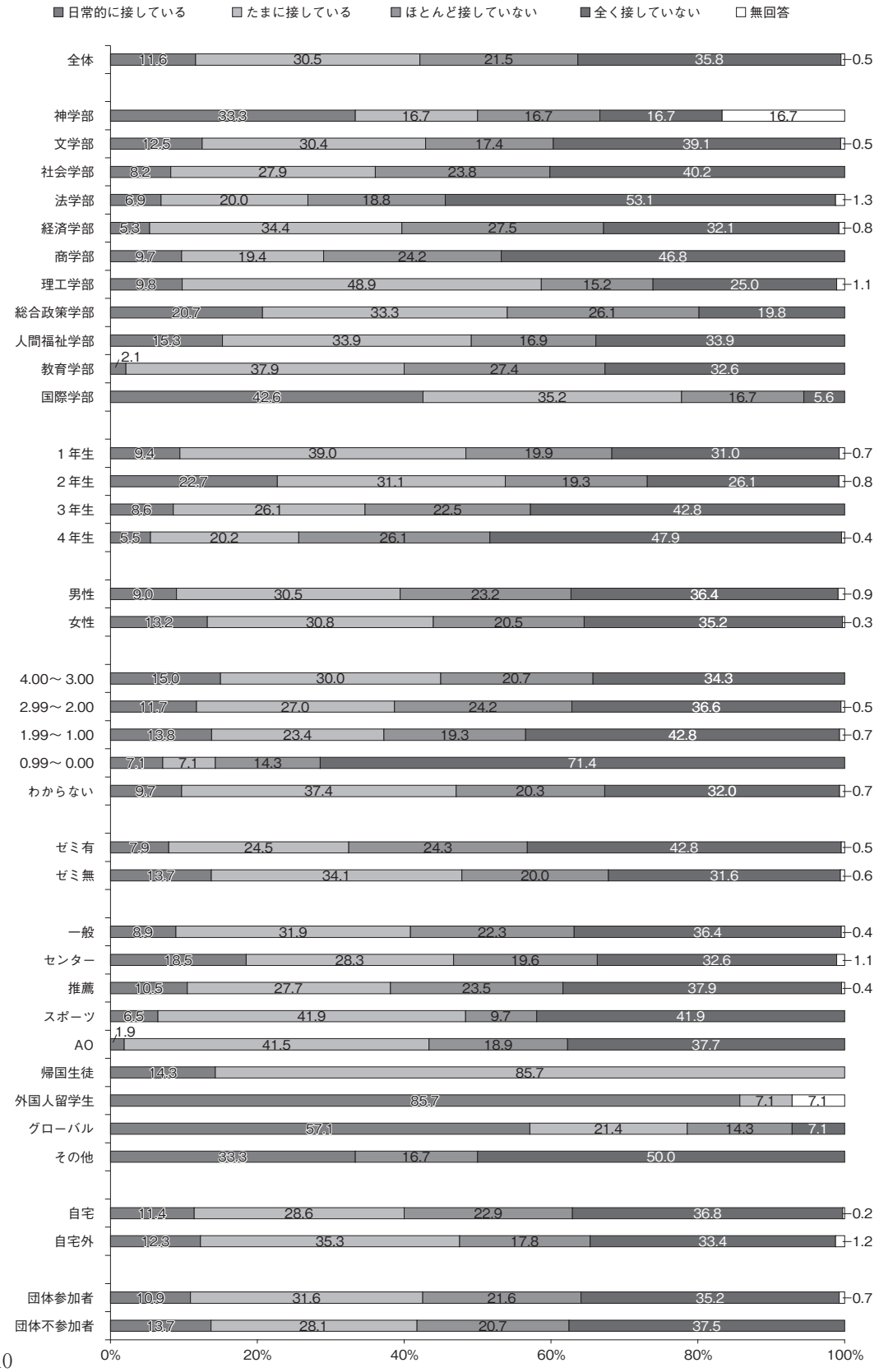
全体として、「日常的に接している」が11.6%、「たまに接している」が30.5%、「ほとんど接していない」が21.5%、「全く接していない」が35.8%と答えており、キャンパス内のグローバル化が進んでいるとは言い難い結果であった。所属学部別の特筆すべき点として、国際学部では「日常的に接している」、「たまに接している」を合わせて77.8%が外国人と接していると回答している。これは①週4回のネイティブ教員による英語が必修であること、②留学必須のため、普段から外国語話者と接しようという意識が高いこと、③「英語話者」の学生がいるため、友人として近くにいるといった理由が考えられる。インテンシブや英語コミュニケーション等の、外国人教員が行っている英語必修授業が提供されている理工学部と総合政策学部についても「日常的に接している」、「たまに接している」を合わせて50%を超える回答があり、授業は外国人との接点として大きな比率を占めている可能性がある。関連して、学年別では年次が上がるごとに「ほとんど接していない」、「全く接していない」の比率が上がっている。この数値は英語での授業の履修率に関連があると思われる。

男女別にみると外国人と「日常的に接している」女性は13.2%、男性は9.0%と女性の方が高い比率となっている。これは留学志向や英語授業の履修率が関係していると考えられる。

GPA という観点からは値が高いほど留学志向が高い学生が多く、外国人との接触を求めて留学生との交流イベントへの参加や英語での授業を履修し、積極的に外国人と接しようとしていると考えられる。

入試区分別ではグローバル入学試験で入学した学生の57.1%が「日常的に接している」と回答しており、アドミッションポリシーに沿った学生が入学していると評価できる。今後、幅広い学生層への交流機会提供に向けて正課内外での外国人教員や留学生を交えたフュージョンプログラムを推進しキャンパス内のグローバル化を広げる必要がある。

図Ⅱ-26　留学生や外国人教職員との接触度



27. 海外プログラムへの参加

Summary

71.8%の学生は、海外プログラムに参加したことが「ない」と回答している。

海外プログラムの参加を考える際に重視するのは、①「カリキュラム・研修内容」33.5%、②「参加費」24.9%、③「留学・研修を実施する国の安全性（治安）」10.8%、④「参加時に求められる外国語運用能力」6.5%、⑤「実施時期」4.5%、⑥「奨学金の有無」2.2%となっている。13.8%は「海外プログラムへの参加に興味がない」と回答している。

Q22-1. あなたは海外プログラム（留学・外国語研修など）に参加したことがありますか。
一度でも参加したことがある場合は、「1　ある」としてください。

1　ある　　2　計画している　　3　ない

Q22-2. 海外プログラム（留学・外国語研修など）の参加を考える際に重視することは何ですか。
最もあてはまるものに、1つだけ○をつけてください。

1　カリキュラム・研修内容　　2　実施時期
3　留学・研修を実施する国の安全性（治安）　　4　参加費
5　奨学金の有無
6　参加時に求められる外国語運用能力　　7　その他
8　海外プログラムへの参加に興味がない

Q22-1（海外プログラムの参加）では、15.2%が「ある」と回答し、71.8%が「ない」、12.6%が「計画している」と回答している。「ある」を学部別に見ると、国際学部がトップの46.3%で、続いて社会学部18.0%、商学部16.9%、文学部16.8%、神学部16.7%、人間福祉学部13.6%、総合政策学部13.5%、法学部11.9%、経済学部10.7%、教育学部10.5%、理工学部8.7%となっている。在学中の留学を卒業要件の1つとして設定している国際学部では、「ある」の比率が高い。他方、実験等で大学を離れられない理工学部や教員免許状などの資格取得が関係する教育学部では留学参加の比率が低くなっている。教育学部のある西宮聖和キャンパスには、国際教育・協力センター（CIEC）事務室がないことや、理工学部、総合政策学部では、アカデミックコモンズ内のCIEC事務室の認知度が低く、十分な海外プログラムの広報ができていないことも、「ある」の割合が低い要因の1つとして考えられる。

学年別では、学年が上がるごとに海外プログラムに参加したことが「ある」の比率が高くなり、「計画している」の比率が低くなっている。1年生では「計画している」が17.4%、2年生では20.8%であるのに対し、3年生では6.3%、4年生では1.3%と、極端に数値が減少している。これは、学年が上がるに伴い留学経験者が増えてくることに加え、3年生～4年生では学業や就職活動等との兼ね合いにより、留学を検討しにくくなっていることが要因であろう。

男女別では、海外プログラムに参加したことが、「ある」の比率が、女性の方が高く、女性が18.6%に対して男性が10.3%となっている。

GPA別では、GPA4.00～3.00では、「ある」が27.1%、続いてGPA2.99～2.00が18.6%、GPA1.99～1.00が13.1%、GPA0.99～0.00が7.1%となっており、GPAが高い方が、海外プログラムに参加したことが「ある」比率が高く、低い方がその割合は低くなっている。これはGPA上位者の方が、単位修得状況も良いため、留学後の学習計画が立てやすいことが要因と考えられる。一方、

GPA 下位者の場合、単位修得状況等により、留学を断念せざるを得ないケースや、そもそも留学に興味のない学生の割合が高いことが、要因であるといえよう。

自宅、自宅外では大きな差がない。

団体別では、「団体不参加者」の17.5%に対して、「団体参加者」14.5%となっている。これは、クラブ活動での練習や試合等で海外プログラムに参加する時間が取れないことが原因の１つに考えられる。

Q22-2 （海外プログラムの参加を考える際に重視すること）については、今回の調査で新たに追加した項目である。全体では、①「カリキュラム・研修内容」が最も多く33.5%、②「参加費」24.9%、③「留学・研修を実施する国の安全性（治安）」10.8%、④「参加時に求められる外国語運用能力」6.5%、⑤「実施時期」4.5%、⑥「奨学金の有無」2.2%の順であった。「海外プログラムへの参加に興味がない」は13.8%であり、全体では３番目に高い値となっている。

「カリキュラム・研修内容」を最も重視すると答えた学生が、33.5%と一番高い値であったことは、本学が提供する多岐にわたる海外プログラムにおいて、自身の能力や目的に沿ったものを選定したいと考えている学生が多いことを裏付けているといえる。本学では、外国語を学ぶ「外国語研修・中期留学」をはじめ、専門分野を学ぶ「交換留学・ダブルディグリー留学」、その他「インターンシップ」、「セミナー」、「国際ボランティア」等多岐にわたるプログラムを提供している。これらのプログラムに目的意識を持って参加するため、「カリキュラム・研修内容」が最も高い値となっている。なお、この項目を学部別に見ると、留学を必須とする国際学部が、63.0%と最も高い値となっている。

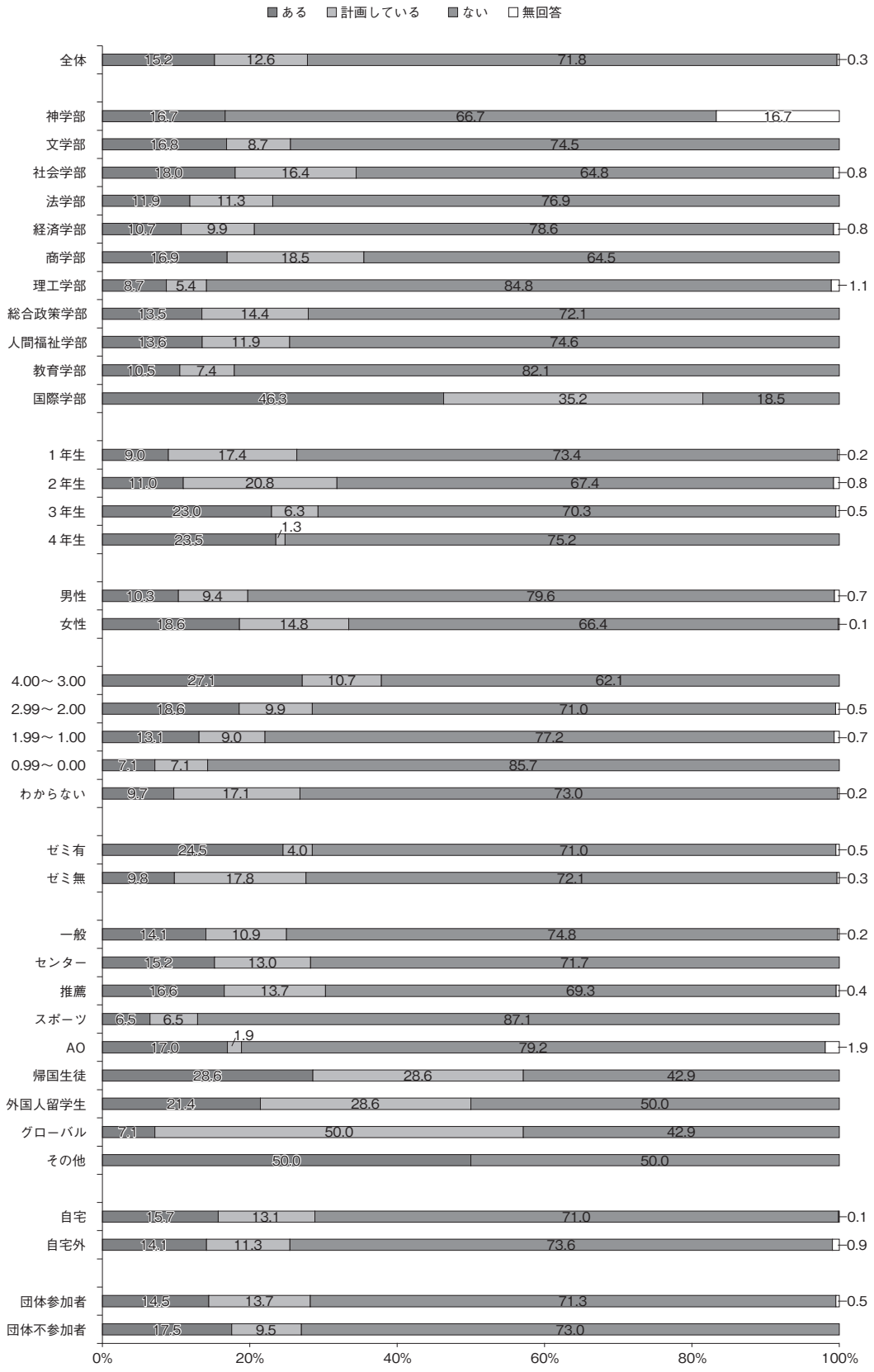
次に高い値であったのは、「参加費」であり、24.9%であった。参加費に関連する「奨学金の有無」についても、2.2%の学生が重視すると回答しており、「参加費」と「奨学金の有無」を合わせると27.1%の学生が、経済的な項目を重要項目として回答している。実際、2015年度春季外国語研修より、マレーシア大学において安価なプログラムを開発したところ、定員以上の応募者があった。今後も継続して安価なプログラム開発を進めていく必要があるといえる。

３番目は、「留学・研修を実施する国の安全性（治安）」であり10.8%であった。近年世界情勢は不安定であり、フランスやバングラデシュ等のテロをはじめとする海外への不安が高まっている。この不安は学生のみならず、保証人も同様であり、今後、留学や留学先を決定する際に重要な項目の１つとなっていくことが想定される。

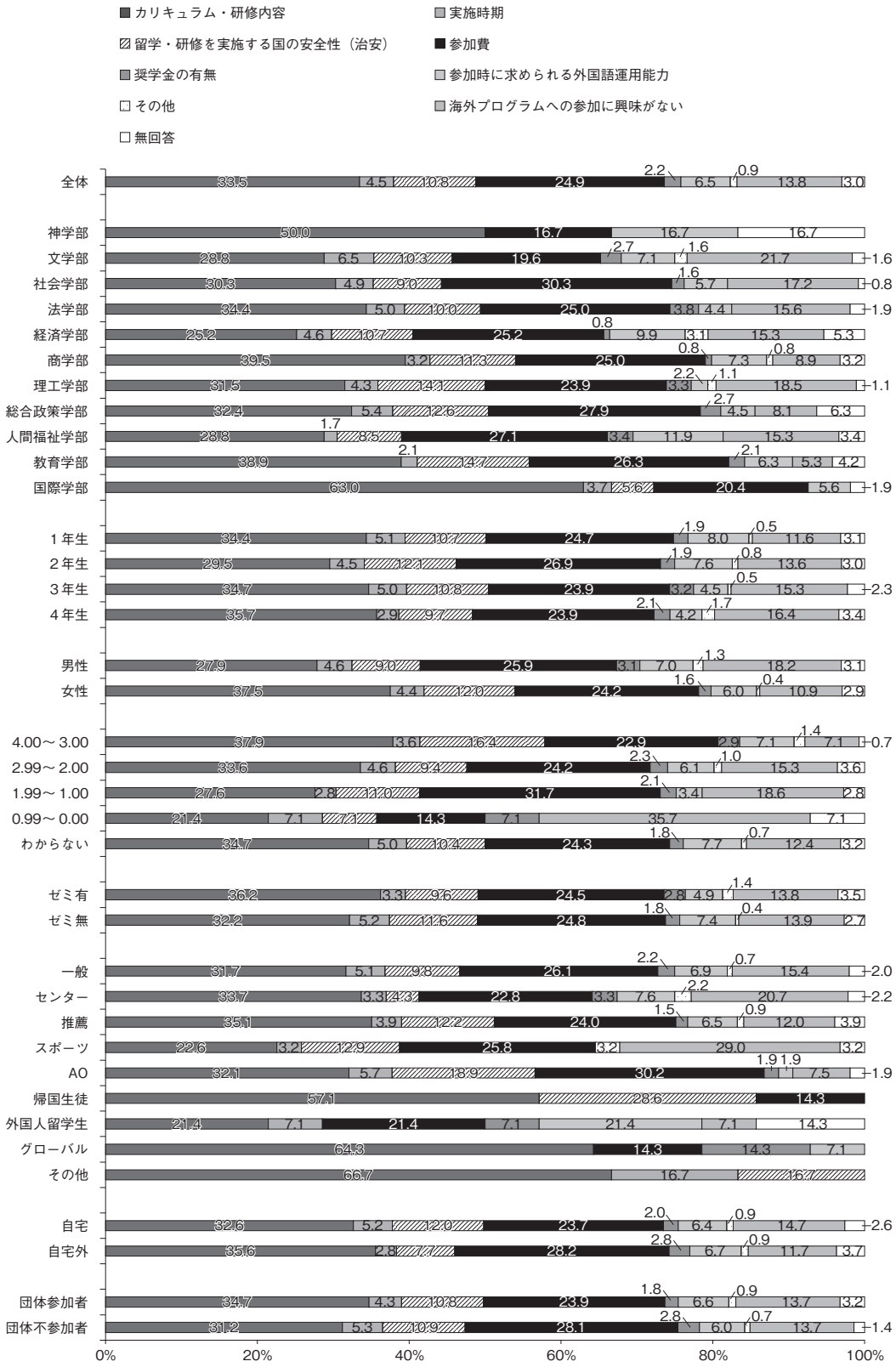
「参加時に求められる外国語運用能力」と回答した学生は6.5%であった。本学の海外プログラムにおいては、英語中期留学や交換留学など、一定の外国語運用能力を条件として定めるプログラムがあり、その条件を満たすことができない学生は留学を断念するか、条件のないプログラムへ計画変更するケースがある。現在、スーパーグローバル大学創成支援事業の施策の一つとして進められている英語教育の飛躍的拡充のための取り組みに期待したい。

他方、「海外プログラムへの参加に興味がない」と回答した学生は13.8%であった。Q23-2（海外プログラムに参加するための環境で不足しているもの：自由記述）において、「海外プログラムに関心を持ったことがない」、「授業が忙しいので、参加しようと思ったことがない」といった回答があることからも、海外プログラムに「興味のない学生」、「授業等で参加できない」学生が一定数いるといえよう。

図Ⅱ-27-1　海外プログラムへの参加度



図Ⅱ-27-2　海外プログラムへの参加する理由



28. 留学環境の整備状況

Summary

59.4%の学生は、海外プログラムに参加できる環境が「整っている」と回答した。不足しているものとしては、①情報、②留学資金、③外国語運用能力に大別される。海外プログラムに興味がない者も一定数いる。

Q23-1. 本学は、学生が海外プログラム（留学・外国語研修など）に参加できる環境を整えていると思いますか。最もあてはまるものに、1つだけ○をつけてください。
1　整っている　　2　どちらともいえない　　3　整っていない

Q23-2. 海外プログラムへ参加するための環境について、関西学院大学では何が不足していると思いますか。

Q23-1（海外プログラムに参加できる環境を整備しているか）は、全体では59.4%が「整っている」と答えており、「どちらともいえない」が35.6%、「整っていない」が4.3%となっている。

海外プログラムをサポートする組織として、西宮上ケ原キャンパスおよび神戸三田キャンパスに国際教育・協力センター（CIEC）がある。CIEC では、学生の様々なプログラムのニーズに対応できるように、全学部生が参加できるプログラムの開発に取り組んでいる。また、留学についての相談を随時受け付けるとともに、募集説明会、留学フェア、各種報告会の開催等、様々なイベントを通して、留学についての情報を広く学生に提供している。これらのサービスを通して、海外プログラムに参加できる環境は、59.4%の学生が「整っている」と回答しているため、一定の評価を得ているといえる。しかし、「整っている」の回答率について学部別に見ると、神学部83.3%、国際学部79.6%、人間福祉学部64.4%、文学部62.5%、商学部62.1%、理工学部59.8%、法学部59.4%、経済学部55.7%、総合政策学部55.0%、社会学部53.3%、教育学部50.5%となっており、学部によって差が出ている。国際学部、人間福祉学部で高い値となっているのは、両学部事務室のある G 号館に CIEC 事務室があり、留学について知る機会が多いことが要因と考えられる。逆に、CIEC の事務室がない西宮聖和キャンパスの教育学部では、留学について相談をすることや、留学説明会を行う機会が少ないため、全学部で最も低い50.5%となっている。また、神戸三田キャンパスでは、CIEC の事務室はあるものの、認知度が低い。なお、西宮上ケ原キャンパスにおいて、社会学部では53.3%と「整っている」と答えた割合が低く、G 号館以外での情報発信が課題であろう。

GPA 別では、「整っている」との回答が、GPA4.00～3.00は60.7%、2.99～2.00は54.5%、1.99～1.00は55.9%、0.99～0.00は21.4%となっており、GPA が高いほど「整っている」と答えた割合が高く、GPA が低い方がその割合が低くなっている。特筆すべき点は、GPA4.00～3.00、GPA2.99～2.00、GPA1.99～1.00が「どちらともいえない」と答えた割合がそれぞれ、32.1%、38.7%、38.6%であるのに対し、GPA0.99～0.00が71.4%と大きく上回っていることである。これはQ22-1 からも分かるように GPA が高いほど、海外プログラムに参加したことがある、または計画している割合が高く、GPA が低いほど参加したことがある、または計画している割合は低く、GPA 下位者（GPA0.99～0.00）は、海外プログラムに参加できる環境が整っているのかどうかの判断がつかないと考えられる。

入試形態別では、「整っている」との回答が、グローバル入学試験71.4%、推薦入学試験61.4%、スポーツ選抜入学試験61.3%の順に平均値（59.4%）を超えており、以下センター利用入学試験

58.7%、一般入学試験58.0%、AO 入学試験54.7%、外国人留学生入学試験50.0%、帰国生徒入学試験42.9%の順となっている。

性別、居住形態での違いでは大きな差は見られない。

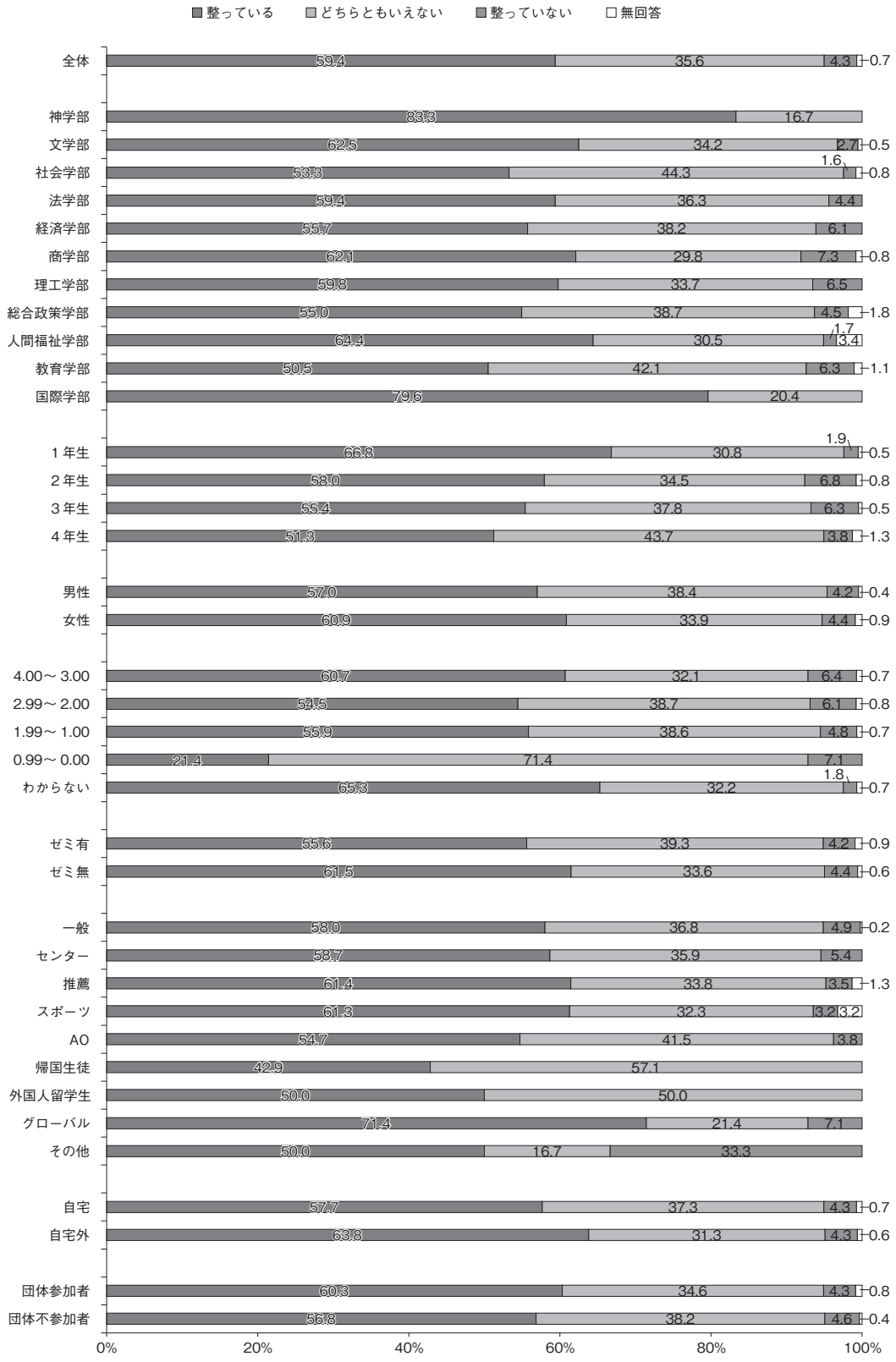
Q23-2（海外プログラムに参加するための環境で不足しているもの）では、海外プログラムへ参加するための環境について、本学で不足している項目についての自由記述である。大別すると、①情報、②留学資金、③外国語運用能力に分けられる。なお、海外プログラムに興味がない者も一定数いる。「情報」については、「どこで情報が得られるのかが分からない」、「もっと情報発信して欲しい」、「敷居が高く感じている学生もいるので周知や宣伝が不足している」、「知らない間に申込時期が終わっていた」といった広報の不足について記載されている内容が一番多い。また、西宮聖和キャンパスの学生からは、「上ケ原キャンパスと比べて情報が少ない」、「聖和キャンパスでは申し込みができない」といったキャンパス間の情報格差を指摘する声も複数あった。大学では、留学フェア、募集説明会、各種イベント等、学生への広報を実施しており、これらのイベントを留学ガイド（年１回３月発行）、募集要項（年２回、３月および９月発行）、ウェブサイト、メールマガジン（週１回配信）、Facebook、掲示、教学 Web サービス等をとおして学生へ発信しているが、これらの情報そのものが学生にうまく届いていないという問題点が自由記述項目から明らかになった。

「留学資金」では、「参加費がもう少し安ければ参加できる」、「全体的に参加費用が高く参加をためらう」といったプログラム費が高いといった声や、「奨学金制度の額や種類の拡大」といった経済的な補助を求める声があった。Q22-2（海外プログラムの参加を考える際に重視すること）の回答においても、「参加費」が全体の24.9%であったことからも、留学費用の補助を求める声は多いといえる。2015年度に設置された短期留学奨学金（アジア３万円、その他の地域５万円）について知らない学生もいるため、本学で設置している奨学金制度の周知方法についても検討する必要があろう。

「外国語運用能力」では、「交換留学の TOEFL 基準が高い」、「英語が苦手な人にも参加できるプログラムを増やしてほしい」、「成績が良くないと交換留学にいけない」等、交換留学の出願条件や協定校先の必要要件を満たすことができない学生からの不満や要望があった。

なお、「海外プログラムに関心を持ったことがない」、「授業が忙しいので、参加しようと思ったことがない」といった回答があることから、海外プログラムに「興味のない学生」、「授業等で参加できない」学生が一定数おり、これらの学生に対しての対策が必要であると考えられる。

図Ⅱ-28　留学環境の整備状況



29. 通学の最寄り駅について

Summary

本項目では、公共交通機関を利用して通学する学生の最寄り駅を調査した。各キャンパスとも約８割の学生が公共交通機関を利用した通学形態をとっており、利用している最寄り駅の割合は前年度調査からほぼ変わらない。しかし、神戸三田キャンパスについては、理工学部の学科増設等の影響からか、キャンパス周辺の最寄り路線であるＪＲ線の利用割合が減少している。

Q24-1. 通学についてお尋ねします。
あなたが利用する大学最寄り駅はどれですか。最も利用する駅に、１つだけ○をつけてください。

1　阪急甲東園駅	2　阪急仁川駅	3　阪急門戸厄神駅
4　ＪＲ西宮駅	5　ＪＲ三田駅	6　ＪＲ新三田駅
7　その他	8　公共交通機関は利用しない	

公共交通機関利用学生の割合をキャンパスごとにみると、西宮上ケ原キャンパス、神戸三田キャンパス、西宮聖和キャンパスいずれも約80％の学生が公共交通機関を利用している。この数字は昨年度の同調査ともほぼかわらない数字となっている。

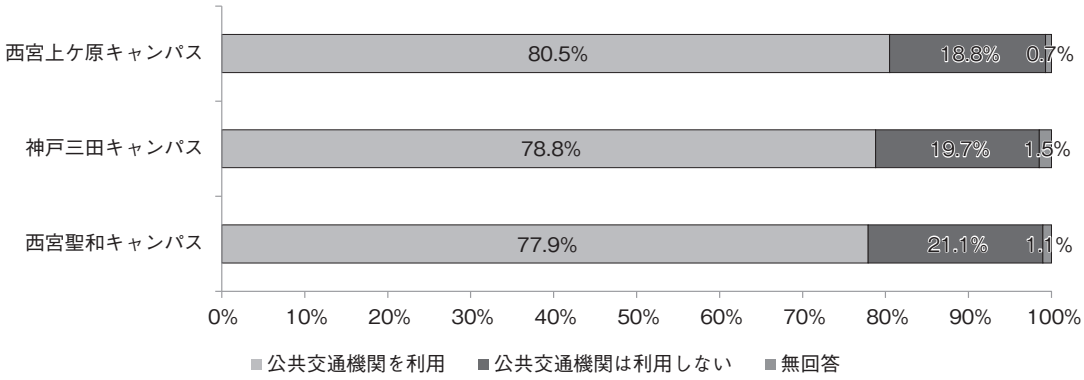
キャンパス別に利用最寄り駅を見てみると、西宮上ケ原キャンパスでは阪急門戸厄神駅、甲東園駅、仁川駅の利用が全体の94.7％を占め、ＪＲ西宮駅の利用者は4.0％で前回調査から1.0ポイント減少している。西宮上ケ原キャンパスに通う学生の大半が阪急電鉄を利用している、という傾向は変わらないことがうかがえる。

西宮聖和キャンパスの学生については、公共交通機関利用者の97.3％が阪急電鉄を利用しており、89.2％が門戸厄神駅を最寄り駅として利用している。このため、西宮聖和キャンパスへの通学生は基本的には駅から徒歩で通学しているものと考えられる。

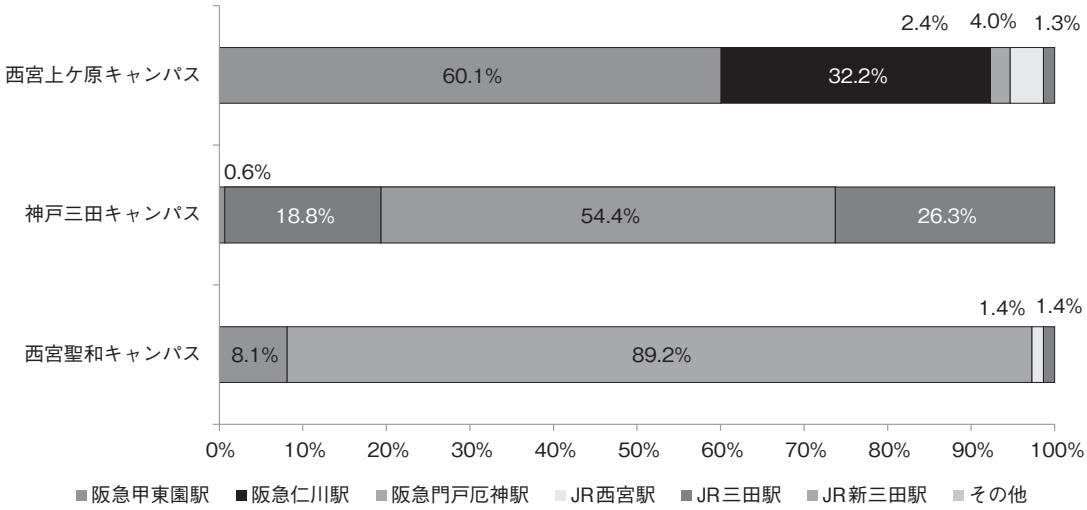
以上の状況から、西宮上ケ原キャンパス・西宮聖和キャンパスでは、通学経路はほぼ固定化されており、学生委員会で報告されているとおり、通学への苦情に対する大学での指導・啓発活動の限界等の実事情も踏まえると、通学時における近隣住民との摩擦は、なんらかの対策を講じなければ不可避であると推察できる。

神戸三田キャンパスに目を向けると、基本的な利用路線はＪＲであり、ＪＲ三田駅、新三田駅を最寄り駅として利用する学生数は、公共交通機関利用者の73.2％である。新三田駅利用者は前回調査60.8％から6.4ポイント減少し、三田駅利用者は前回調査時の21.5％から2.7ポイント減少しており、ＪＲ利用者が減少している。その他を選択している学生については、三宮からの高速バスもしくはキャンパス間をつなぐシャトルバスの利用者であると思われる。神戸三田キャンパス通学生の中にはわずかながら阪急甲東園駅を最寄り駅と回答した学生がいるが、これはシャトルバス利用者であると推測される。

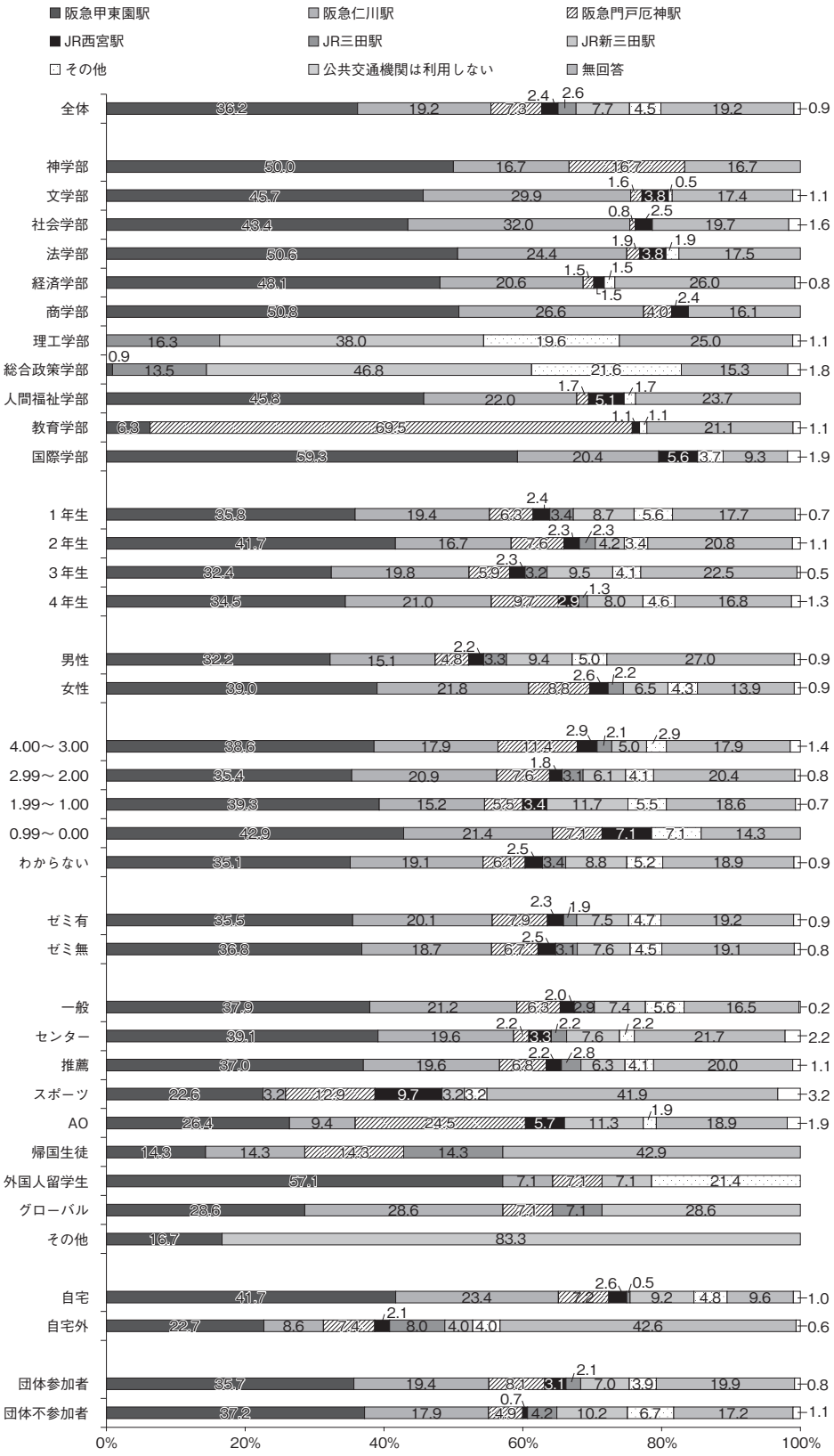
図Ⅱ-29-1　キャンパスごとの通学形態



図Ⅱ-29-2　キャンパスごとの通学の最寄り駅について（無回答者を除く）



図Ⅱ-29-3　通学の最寄り駅について



30. 通学手段ならびに自転車・バイクの駐輪場所

Summary

西宮上ケ原キャンパス・西宮聖和キャンパスともに徒歩が60%を超えており、神戸三田キャンパスではバス通学者が70%を超えている。これらは、各キャンパス立地の特徴を反映した回答結果である、と考えられる。

特に西宮上ケ原キャンパス・西宮聖和キャンパスに目を向けると、前年度に比べて原付バイク通学は両キャンパスとも0.5ポイント程度の増加、自転車通学は西宮上ケ原キャンパスでは1.9ポイント減少したが、西宮聖和キャンパスで4.4ポイント増加しており、トータルでは増加傾向にあり、駐輪施設の狭隘化の原因と考えられる。こうした状況で、学外に駐輪場を借りて通学する学生がいる一方で、不法駐輪していると回答する学生もいるなど、地域連携や地域共生が大学に求められている中で、逆行するような事態に陥っているとの危惧があり、全学的な学生指導体制を構築しなければ不名誉な評価ばかりが取り沙汰される恐れもある。

Q24-2. 大学最寄り駅から大学までの通学手段、または、公共交通機関を利用しない場合の自宅から大学までの通学手段はどれですか。最も利用するものに、1つだけ○をつけてください。

1 徒歩　2 バス　3 自転車
4 50 cc 以下のバイク　5 その他

Q24-3. 大学最寄り駅から自転車、バイクで通学するとき、自転車・バイクを最寄り駅付近のどこに置いていますか。最もあてはまるものに、1つだけ○をつけてください。

1 駐輪場を借りている　2 一時預かりの駐輪場に置いている
3 友人宅に置いている　4 不法駐輪している
5 その他　6 最寄り駅から自転車・バイクを利用していない

西宮上ケ原キャンパスでは徒歩通学者が62.9%と前回調査より4.3ポイント増加している。一方で、自転車通学者は12.3%で前回調査から1.9ポイント減少している。トータルでは、西宮上ケ原キャンパスへ通学する学生が、通学路を徒歩または自転車で移動する割合は前回調査から2.4ポイント増加した。原付（総排気量50 cc 未満の）バイクでの通学については、西宮上ケ原キャンパスでは自粛としているにもかかわらず、前回調査5.8%から今回は6.5%と微増した。

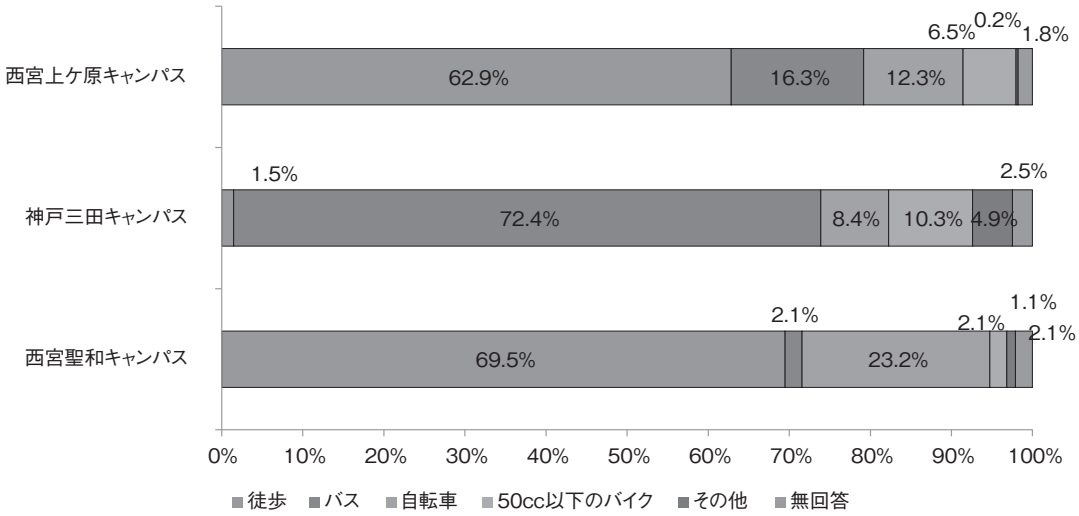
西宮聖和キャンパスへの通学手段では、徒歩通学者の割合が前回調査65.9から今回調査では69.5%と3.6ポイント増加し、自転車通学者の割合は18.8%から23.2%へと4.4ポイント増加した。西宮聖和キャンパスの立地的には甲東園駅から阪急バスを利用する者もいると思われるが、その数は少なく、「29. 通学の最寄り駅について」にみられるとおり、ＪＲ西宮駅を利用する学生も少ないため、バス通学者の割合は4.7%から2.1%へと2.6ポイント減少している。西宮聖和キャンパスでは禁止されている原付バイクの利用者については2.4%から2.1%へと微減ながらほぼ横ばいに推移している。

西宮上ケ原キャンパス・西宮聖和キャンパスへの通学者は基本的に徒歩移動もしくは自転車での移動であるが、原付バイクでの通学者の割合は前回調査からほぼ横ばいで推移している。その中には「不法駐輪している」と回答する学生がおり、大学に寄せられる不法駐輪・危険運転等の苦情と併せて考えても、現行のルールでは統制が取れない部分が見えてきている。

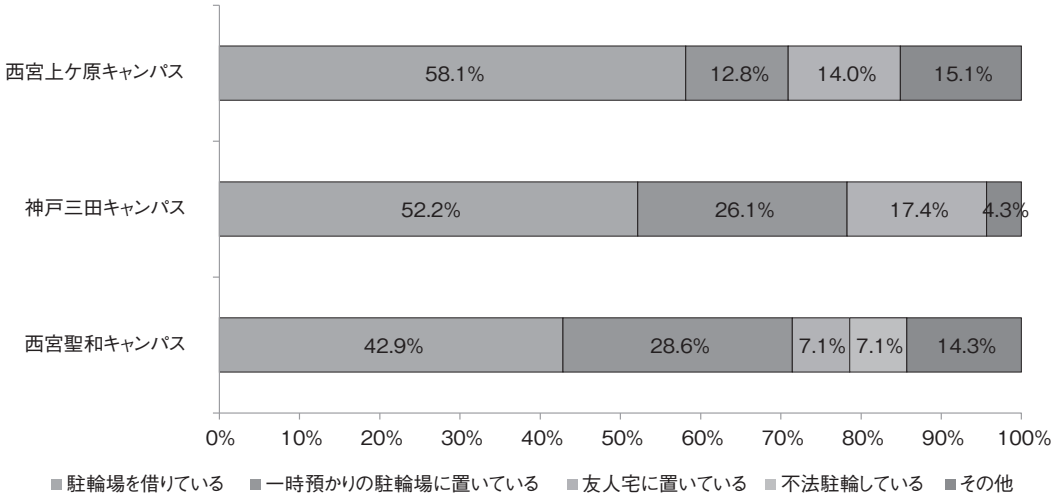
神戸三田キャンパスでは、立地的に、キャンパスへの最終アクセス手段は、基本的にはバスまたは自転車・バイク・自動車となる。その中でも最も多いと考えられるバスのルートは、ＪＲ三田駅また

は新三田駅からの路線バス、三宮からの高速バス、西宮上ケ原キャンパスと神戸三田キャンパスを結ぶシャトルバスである。今回調査ではこれらの割合が72.4%となり前回調査から2.3ポイント減少しているが、誤差の範囲内と言える。

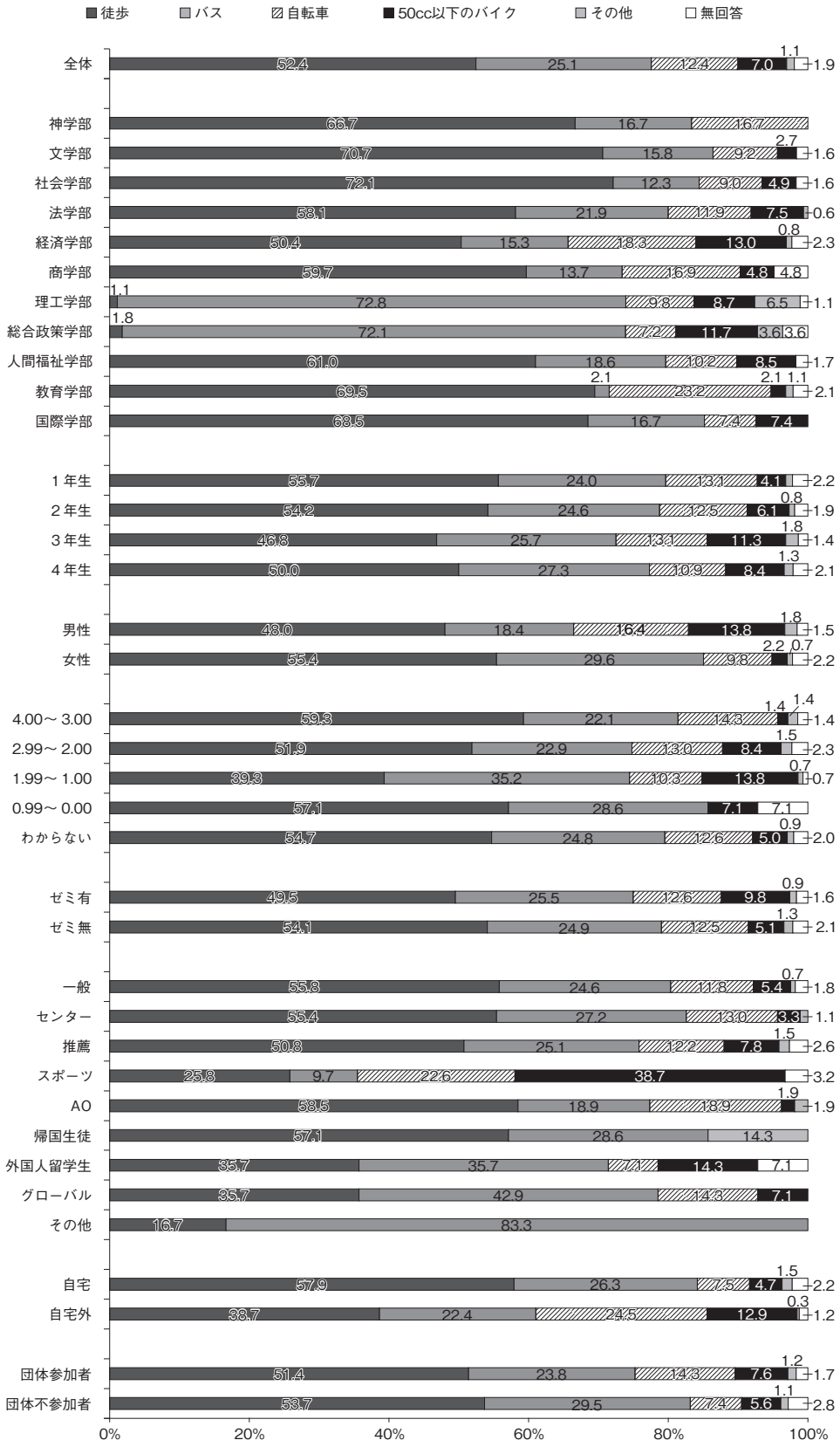
図Ⅱ-30-1　通学手段（キャンパス別）



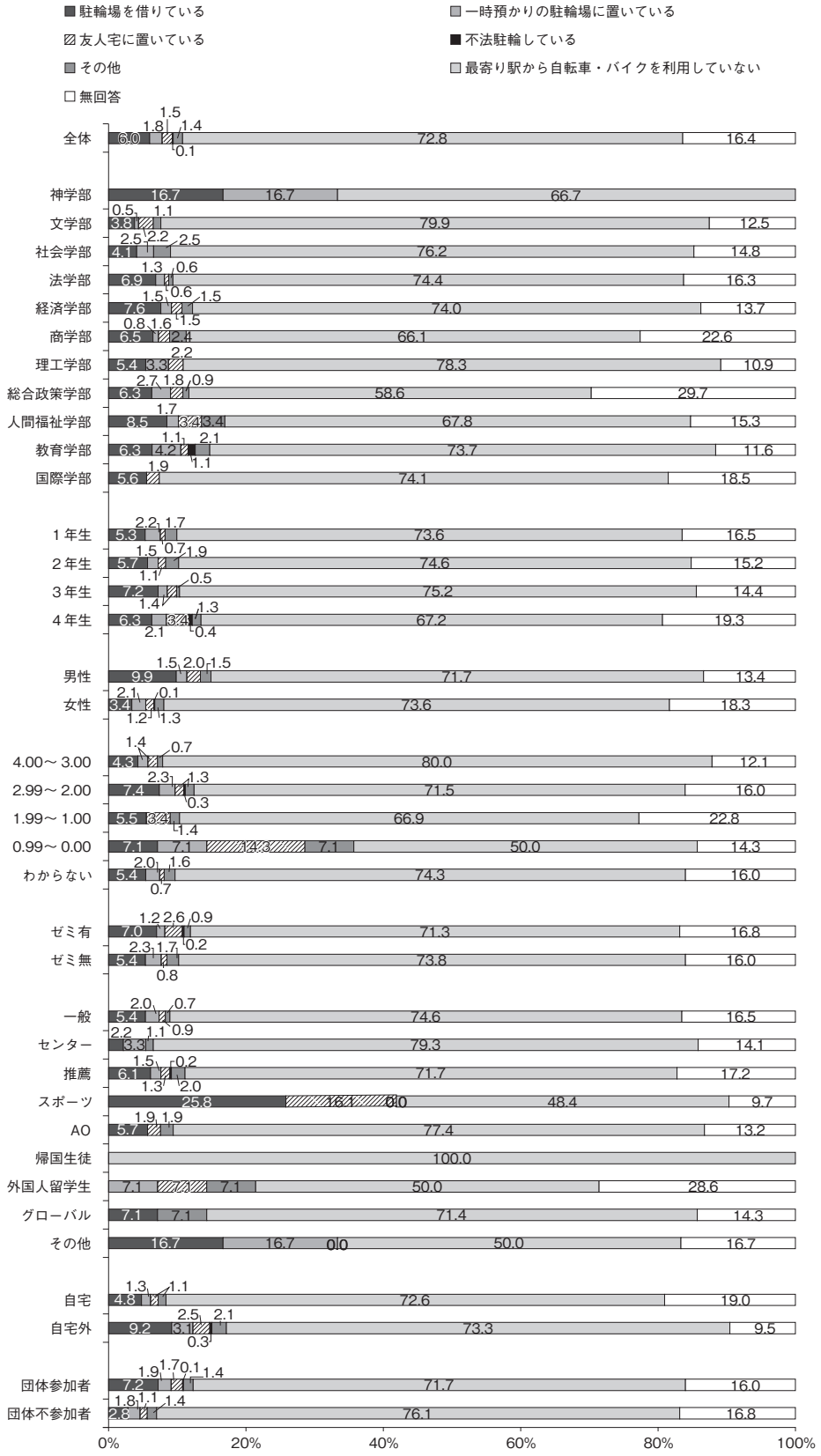
図Ⅱ-30-2　自転車・バイクの駐輪場所（自転車・バイク利用者（キャンパス別））



図Ⅱ-30-3　通学手段


徒歩
バス
自転車
50cc以下のバイク
その他
無回答
全体 52.4 25.1 12.4 7.0 1.1 1.9
神学部 66.7 16.7 16.7
文学部 70.7 15.8 9.2 2.7 1.6
社会学部 72.1 12.3 9.0 4.9 1.6
法学部 58.1 21.9 11.9 7.5 0.6
経済学部 50.4 15.3 18.3 13.0 0.8 2.3
商学部 59.7 13.7 16.9 4.8 4.8
理工学部 1.1 72.8 9.8 8.7 6.5 1.1
総合政策学部 1.8 72.1 7.2 11.7 3.6 3.6
人間福祉学部 61.0 18.6 10.2 8.5 1.7
教育学部 69.5 2.1 23.2 2.1 1.1 2.1
国際学部 68.5 16.7 7.4 7.4
1年生 55.7 24.0 13.1 4.1 2.2
2年生 54.2 24.6 12.5 6.1 0.8 1.9
3年生 46.8 25.7 13.4 11.3 1.8 1.4
4年生 50.0 27.3 10.9 8.4 1.3 2.1
男性 48.0 18.4 16.4 13.8 1.8 1.5
女性 55.4 29.6 9.8 2.2 0.7 2.2
4.00～3.00 59.3 22.1 14.3 1.4 1.4 1.4
2.99～2.00 51.9 22.9 13.0 8.4 1.5 2.3
1.99～1.00 39.3 35.2 10.3 13.8 0.7 0.7
0.99～0.00 57.1 28.6 7.1 7.1
わからない 54.7 24.8 12.6 5.0 0.9 2.0
ゼミ有 49.5 25.5 12.6 9.8 0.9 1.6
ゼミ無 54.1 24.9 12.5 5.1 1.3 2.1
一般 55.8 24.6 11.8 5.4 0.7 1.8
センター 55.4 27.2 13.0 3.3 1.1
推薦 50.8 25.1 12.2 7.8 1.5 2.6
スポーツ 25.8 9.7 22.6 38.7 3.2
AO 58.5 18.9 18.9 1.9 1.9
帰国生徒 57.1 28.6 14.3
外国人留学生 35.7 35.7 7.1 14.3 7.1
グローバル 35.7 42.9 14.3 7.1
その他 16.7 83.3
自宅 57.9 26.3 7.5 4.7 1.5 2.2
自宅外 38.7 22.4 24.5 12.9 0.3 1.2
団体参加者 51.4 23.8 14.3 7.6 1.2 1.7
団体不参加者 53.7 29.5 7.4 5.6 1.1 2.8
0%
20%
40%
60%
80%
100%

図Ⅱ-30-4　自転車・バイクの駐輪場所



31. シャトルバスの利用目的

Summary

本項目では、シャトルバスの利用実態について調査した。通学バスではなく、あくまでもキャンパス間交流を目的とする制度ではあるが、実際の利用者がこの制度をどのように認識しているか分析した結果、制度設立当初の主旨は今でも教学・学生生活に寄与しているが、周辺環境の変化等に伴い通学バスとして利用する実態もあり、制度自体の見直し時期と言えるのではないかと考える。

Q25. あなたがシャトルバス（上ケ原～三田キャンパス間直通バス）を利用するとき、どのような目的で使うことが多いですか。
1　自身の所属学部のあるキャンパスへの通学のため
2　他キャンパス開講の授業への出席のため
3　課外活動のため
4　自身の所属するキャンパスでない、他のキャンパスのイベントに参加するため
5　その他
6　シャトルバスを利用していない

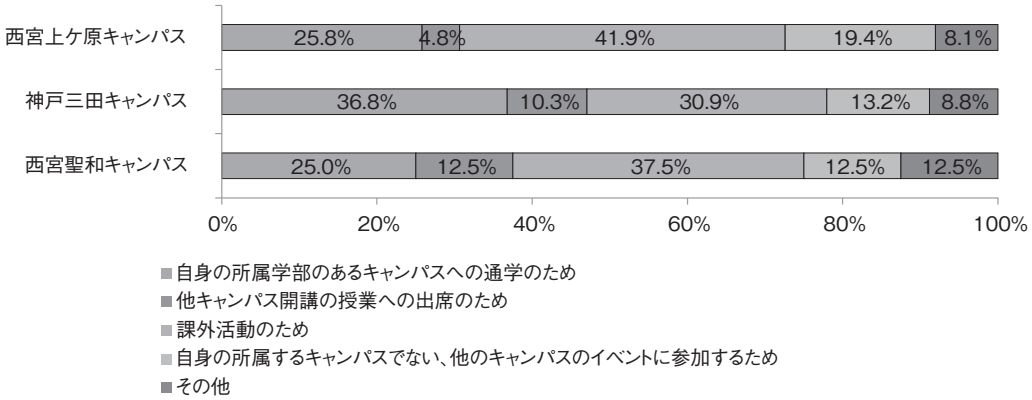
この項目については今回調査が初調査となる。

2001年夏に理工学部が神戸三田キャンパスに移転したことを受けて、教学・学生生活面に関わる検討の結果、2001年10月から、課外活動の学生、他学部履修生等を考慮に入れ、西宮上ケ原キャンパスと神戸三田キャンパスを結ぶ手段としてシャトルバスが運行され始めた。

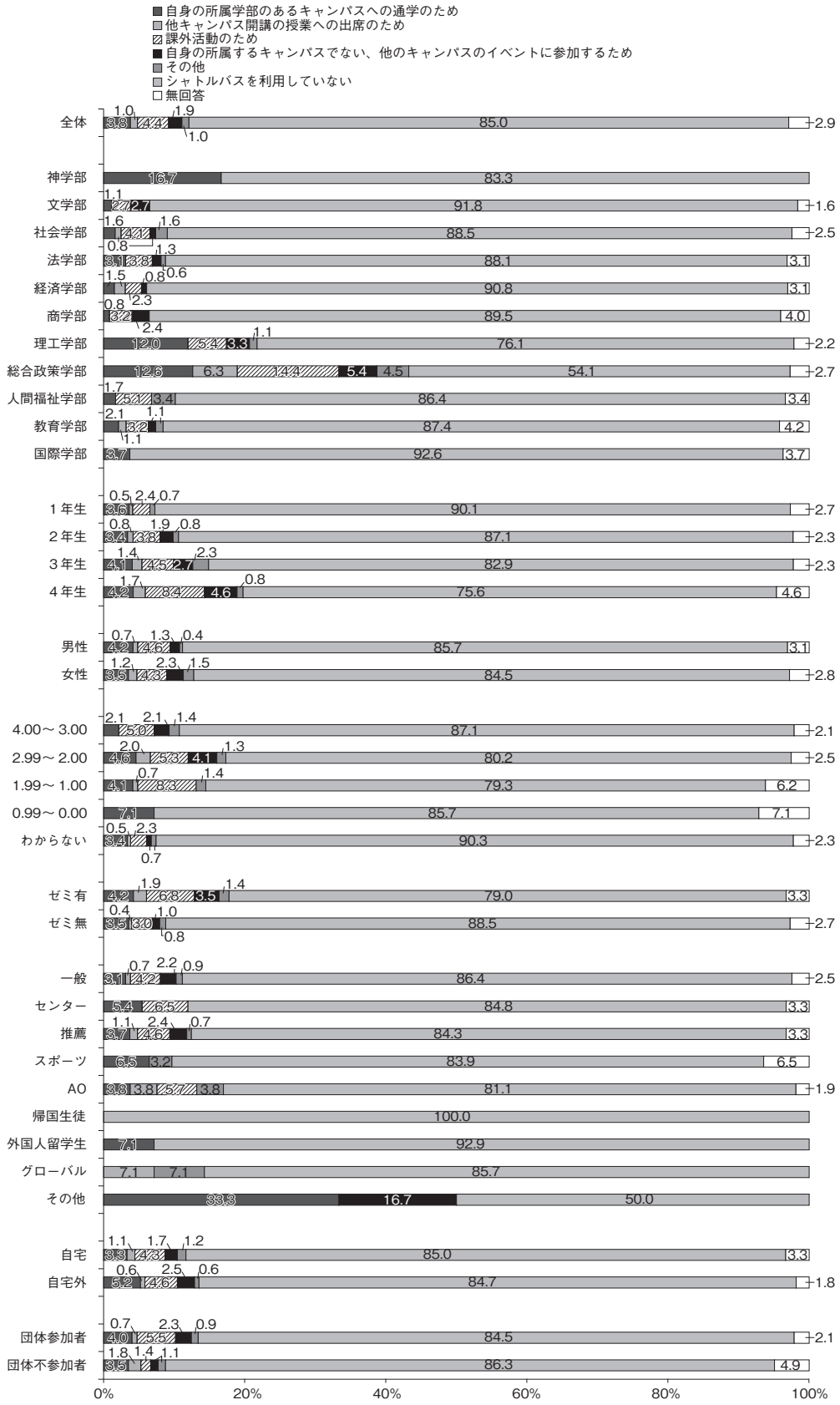
シャトルバスについては、課外活動への参加や他学部履修目的、他キャンパス開催のイベントへ参加する目的で利用する学生が、西宮上ケ原キャンパスでは66.1%、神戸三田キャンパスでは54.4%、西宮聖和キャンパスでは62.5%とシャトルバス利用学生の半数以上に上り、目的に合致した利用実態があると言うことができる。しかしながら、現時点で、各キャンパス所属の学生がそれぞれ25%～37%弱の割合で通学バスとして利用している実態もある。

理工学部の学科増設による神戸三田キャンパス学生の増加や神戸三田キャンパス周辺地域での学生マンションの不足等の周辺環境のため神戸三田キャンパス周辺外からの通学者（シャトルバス利用者）が増え、本年度はシャトルバス利用者が積み残されるケースが散見された。また、利用者の４分の１を超える学生が通学手段と認識していることからも、シャトルバスの目的に「通学手段」が加えられても良い時期に来ているのかもしれない。

図Ⅱ-31-1　シャトルバスの利用目的（キャンパス別）



図Ⅱ-31-2　シャトルバスの利用目的



32. 大学での昼食

Summary

西宮上ケ原キャンパス、神戸三田キャンパスともに前回調査と大きく変わるところはなく、現状で安定しているとみることができる。西宮聖和キャンパスでは、前回調査から弁当ではなく外食をする（自宅から弁当を持参しない）学生の割合が増加したが、理由は定かではない。また、各キャンパスとも、学生の食事スペースについては何とか供給できている。ただし、教室等を食事場所として利用している現状については議論のあるところと思われる。

Q26-1. あなたの大学での昼食の実情について、最もあてはまるものに１つだけ○をつけてください。

1　生協食堂など学内の食堂で買って食べる
2　学内で弁当や惣菜を買って、学内で食べる
3　自宅から弁当を持ってきて、学内で食べる
4　学外の飲食店で食べる
5　食べられない（理由：　　）
6　食べる必要がない
7　その他

Q26-2. 学内で昼食をとる場合、どこでとることが多いですか。
最もあてはまるものに、1 つだけ○をつけてください。

1　生協食堂など学内の食堂　　2　キャンパスの建物内（教室やラウンジなど）
3　キャンパスの屋外（ベンチや芝生など）　　4　その他

大学での昼食については、前回調査から調査項目を若干増やした。昼食をどのように食べるかという切り口では、前回調査で「食堂で食べる」「弁当や惣菜などを買って食べる」としていた項目を、「生協食堂など学内の食堂で買って食べる」「学内で弁当や惣菜を買って、学内で食べる」「学外の飲食店で食べる」に細分化し、また前回調査で「食べない」としていた項目を、「食べられない」と「食べる必要がない」に細分化した。これにより、各キャンパスにおいて、学生に十分出食できているか、昼食を抜く学生の実態が自由意思なのか不可抗力によるものなのかを分析した。

西宮上ケ原キャンパスでは、前回調査で「食堂で食べる」が24.8%、「弁当や惣菜などを買って食べる」が37.8%の合計62.6%であった。今回調査では「生協食堂など学内の食堂で買って食べる」が33.8%、「学内で弁当や惣菜を買って、学内で食べる」30.2%、「学外の飲食店で食べる」が1.9%の合計65.9%となり外食をする（自宅から弁当を持参しない）学生は3.3ポイント増加した。西宮聖和キャンパスでは、前回調査で「食堂で食べる」が22.4%、「弁当や惣菜などを買って食べる」が20.0%の合計42.4%であった。今回調査では「生協食堂など学内の食堂で買って食べる」が41.1%、「学内で弁当や惣菜を買って、学内で食べる」17.9%、「学外の飲食店で食べる」が1.1%の合計60.1%となり外食をする学生は17.7ポイントと激増したが、理由は定かではない。

近隣である西宮上ケ原キャンパス・西宮聖和キャンパスでは同じような状況になることは想像に難くないが、外食の内訳は学外の飲食店ではなく、学内の食堂もしくは近隣のコンビニエンスストア等の利用がうかがえ、キャンパス周辺環境と併せて、学生が昼食になるべくお金をかけないようにしていることが考えられる。

一方、神戸三田キャンパスでは、前回調査で「食堂で食べる」が63.9%、「弁当や惣菜などを買っ

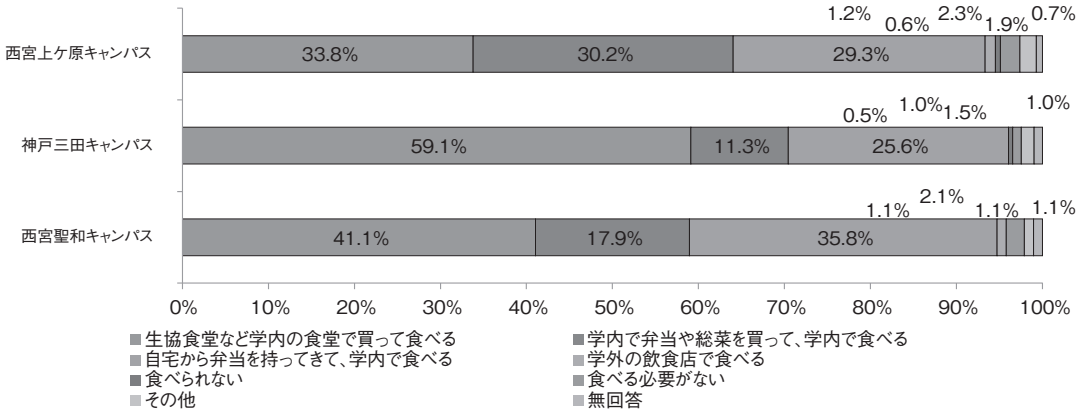
て食べる」が12.9%の合計76.8%であった。今回調査では「生協食堂など学内の食堂で買って食べる」が59.1%、「学内で弁当や惣菜を買って、学内で食べる」11.3%、「学外の飲食店で食べる」が0.0%の合計70.4%となり外食をする学生は6.4ポイント減少した。「学外の飲食店で食べる」については神戸三田キャンパスの立地条件上0.0%であることは妥当である。

次に「自宅から持ってきた弁当などを食べる」については、西宮上ケ原キャンパス・神戸三田キャンパスについては前回調査と大きくぶれてはいないが、西宮聖和キャンパスについては前回調査が54.1%、今回調査が35.8%と18.3ポイントも減少した。当然、前述の外食のポイント増に関連しているが、理由は定かではない。

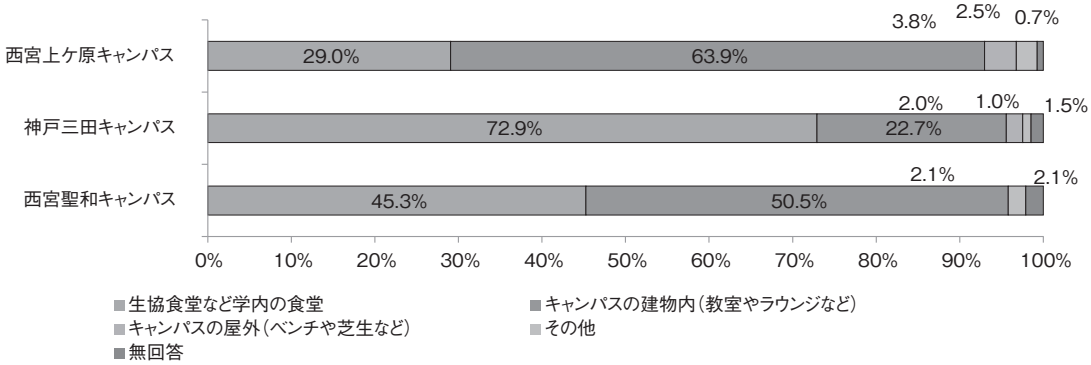
前回調査で「食べない」と回答した学生は、0.5〜1.9%の範囲であったが、今回調査で「食べられない」「食べる必要がない」と回答した学生は、1.2〜2.9%の範囲に収まった。このうち「食べられない」と回答したのは、西宮上ケ原キャンパスでは0.6%、西宮聖和キャンパスは0.0%、神戸三田キャンパスでは0.5%となり、理由は定かではないが、一部の学生にとって授業を受けるのに最適な環境となっていない可能性は捨てきれない。なお、「食事をとらない」学生は、午前中で授業が終わるもしくは午後から授業に出る学生である可能性がある。

続いて、昼食を食べる場所であるが、各キャンパスで回答が最も多いのは「生協食堂など学内の食堂」と「キャンパスの建物内（教室やラウンジなど）」であり、この２つの回答で各キャンパスとも９割を超えており、昼食をとる場所がないという状況は見受けられない。前回調査と数字的にも大差はなく、神戸三田キャンパスでは生協食堂にかなり傾斜している。

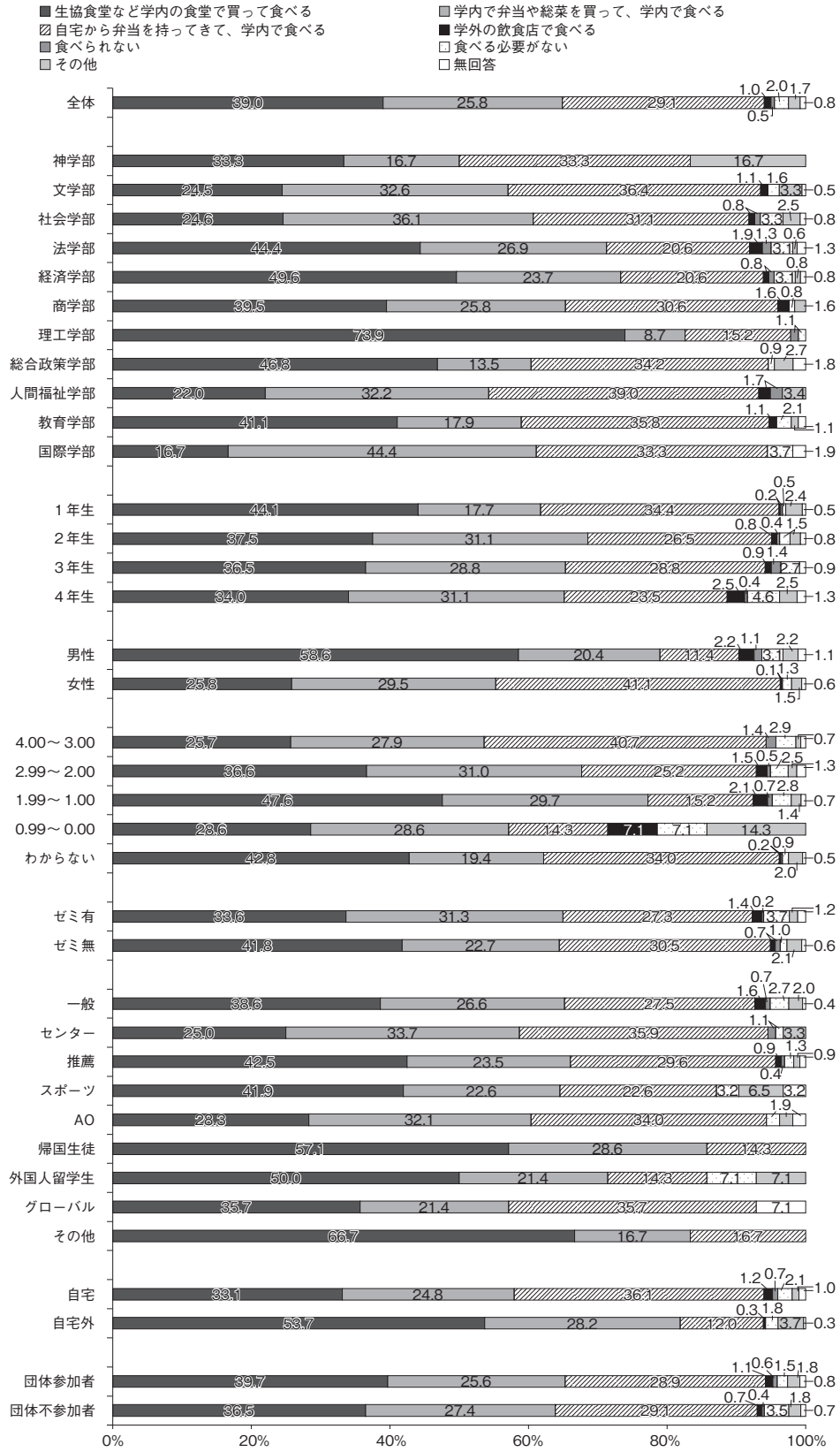
図Ⅱ-32-1　昼食をどのように食べるか（キャンパス別）



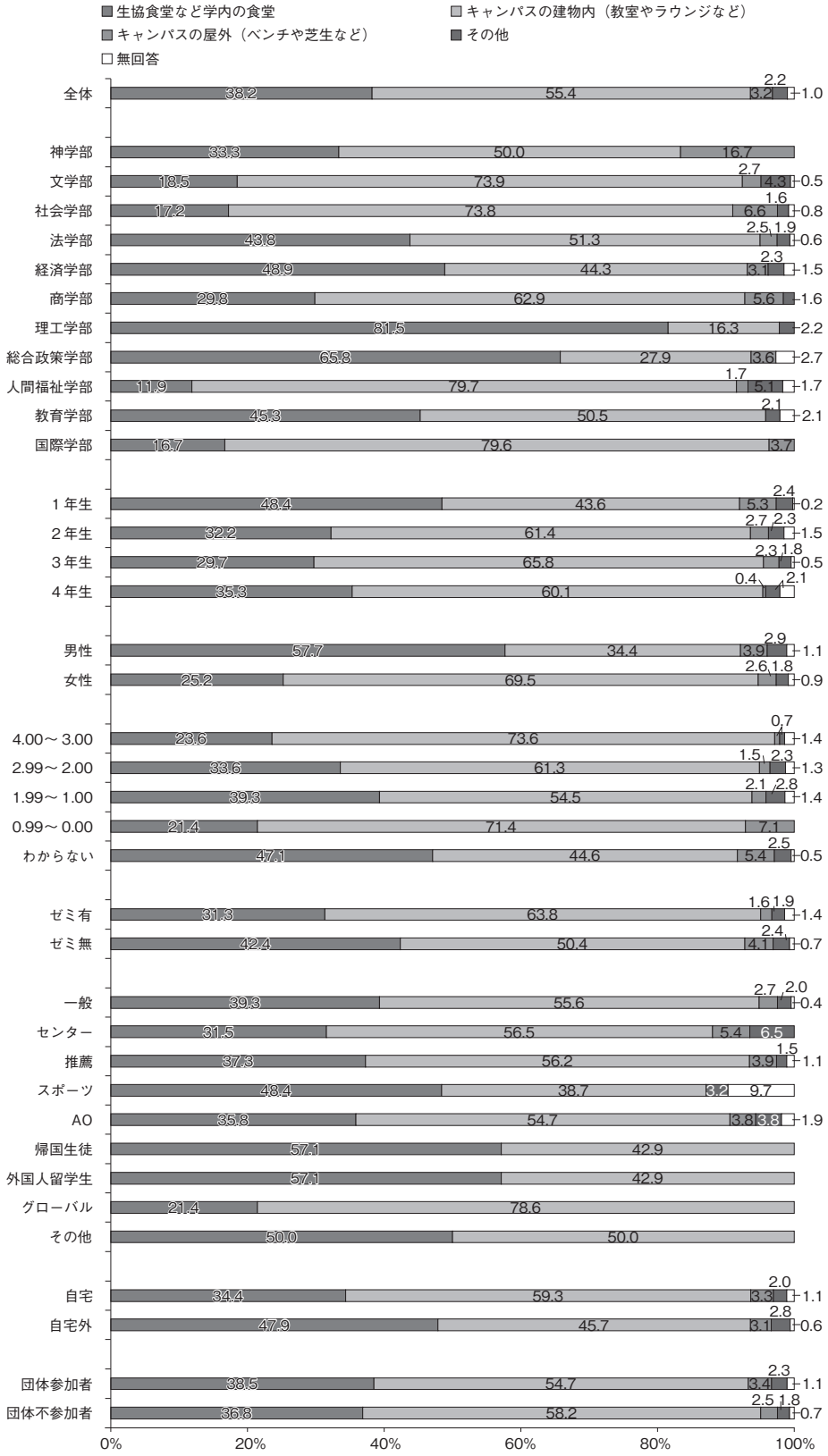
図Ⅱ-32-2　昼食を食べる場所（キャンパス別）



図Ⅱ-32-3　昼食をどのように食べるか



図Ⅱ-32-4　昼食を食べる場所



33. 学内のアメニティ（生活環境の快適さ）

Summary

教室、パソコン教室、トイレ、図書館、コモンズについては、80%以上が「快適である」（「やや快適である」含む）と回答している。一方、食堂に関しては42.6%が「快適でない」（「あまり快適でない」含む）と回答している。また、トイレに関しては、教育学部の49.5%が「快適でない」（「あまり快適でない」含む）と回答しており、キャンパス間の快適さに大きな差がある。

Q27. 本学のアメニティ（生活環境の快適さ）について総合的にどう感じますか。
A～Fについて、それぞれ1（快適でない）から4（快適である）までの数字を選んで○をつけてください。
A　教室　B　パソコン教室　C　食堂　D　トイレ　E　図書館　F　コモンズ

学内のアメニティ（生活環境の快適さ）を調査するため、教室、パソコン教室、食堂、トイレ、図書館、コモンズについて、それぞれ4段階で評価してもらった。前回の調査からは「図書館」、「コモンズ」が新たに加わっている。

A　教室

全体では「快適である」が37.6%、「やや快適である」が50.3%と回答者の87.9%が教室の環境に肯定的な回答をしている。一方で、「あまり快適でない」が10.8%、「快適でない」が1.0%と否定的な回答も1割ほどいることは注目したい。

学部別では、各学部とも「快適である」（「やや快適である」含む）が80%を超えている。ほとんどの学部は、「快適である」が30%台、「やや快適である」が40%～60%台であるが、人間福祉学部は「快適である」が54.2%、国際学部は「快適である」が70.4%と他学部と比べて高くなっており、G号館の快適さがうかがえる。一方教育学部は「快適である」が29.5%、「やや快適である」が56.8%となっており他学部とは若干異なる様相を呈している。

B　パソコン教室

全体では、「快適である」が46.3%、「やや快適である」が44.6%と合わせて90.9%が肯定的な回答となった。

学部別では、各学部とも86.5%以上が「快適である」（「やや快適である」含む）と回答している。ただし、神学部と総合政策学部は「快適である」が33.3%と35.1%と他学部より10ポイント前後低くなっている。また、人間福祉学部と国際学部は、「快適である」が62.7%と68.5%となっており、他学部よりも高い数値となっており、G号館のパソコン教室の快適さがうかがえる。

GPA では、一番低い層で「快適である」が28.6%と低くなっており（他の層では全て45%超）、「あまり快適ではない」も28.6%と高くなっている（他の層では全て13.1%以下）。

C　食堂

全体では、「快適である」が20.2%、「やや快適である」が36.7%と合わせて56.9%が肯定的な回答を、「あまり快適でない」32.3%、「快適でない」10.3%と否定的な回答が42.5%となった。前回の調査では、「あまり快適でない」30.7%、「快適でない」8.7%の合計39.4%であり、食堂の快適さに否定的な層が増加している（前々回の否定的な回答は33.0%）。

入試形態別では、外国人留学生入学試験の学生の「快適でない」が21.4%と非常に高くなっている。また、AO 入学試験でも「あまり快適でない」30.2%、「快適でない」17.0%と否定的回答が47.2%と高くなっている。

D　トイレ

全体では、「快適である」が42.6%、「やや快適である」が41.8%と合わせて84.4%が肯定的な回答を、「あまり快適でない」12.4%、「快適でない」2.6%と否定的な回答が15.0%となった。

学部別では、教育学部以外の全学部は「快適である」と「やや快適である」を合わせた肯定的な回答が80%を超えているが、教育学部だけは49.5%（「快適である」15.8%、「やや快適である」33.7%）と50%を割ってしまっている。また、法学部は「快適でない」が0.6%、「あまり快適でない」が7.5%、理工学部は「あまり快適でない」が9.8%、「快適でない」0%、国際学部は「快適でない」、「あまり快適でない」がどちらも1.9%と否定的な回答が10%を下回っており、キャンパス間で差が出る結果となった。

性別で見ると男性は「快適である」が48.7%、「やや快適である」が41.0%で、肯定的な回答が89.7%であるが、女性では「快適である」が38.4%、「やや快適である」が42.4%となり、肯定的な回答の合計が80.8%になり男女で10%近くの差が出ることになった。

入試形態別では、センター利用入学試験では「快適である」が44.6%、「やや快適である」が50.0%、合わせて94.6%が肯定的な、また外国人留学生入学試験では、「快適である」が85.7%、「やや快適である」が7.1%と92.8%が肯定的な意見となっている。

E　図書館

全体では、「快適である」が57.9%、「やや快適である」が37.1%と合わせて95.0%が肯定的な回答を、「あまり快適でない」3.9%、「快適でない」0.6%と否定的な回答が4.5%となった。

学部別でも全ての学部において肯定的な回答が90.0%を超えており、図書館を快適に利用していることが伺える。ただし、総合政策学部の「快適である」が48.9%、理工学部の「快適である」が41.4%と50%を下回っており、神戸三田キャンパスでの満足度には注意をする必要がある。

F　ラーニングコモンズ（上ケ原）・アカデミックコモンズ（三田）

全体では、「快適である」が44.4%、「やや快適である」が40.5%と合わせて84.9%が肯定的な回答を、「あまり快適でない」が6.9%、「快適でない」が3.2%と否定的な回答が10.1%、無回答が5.0%となった。

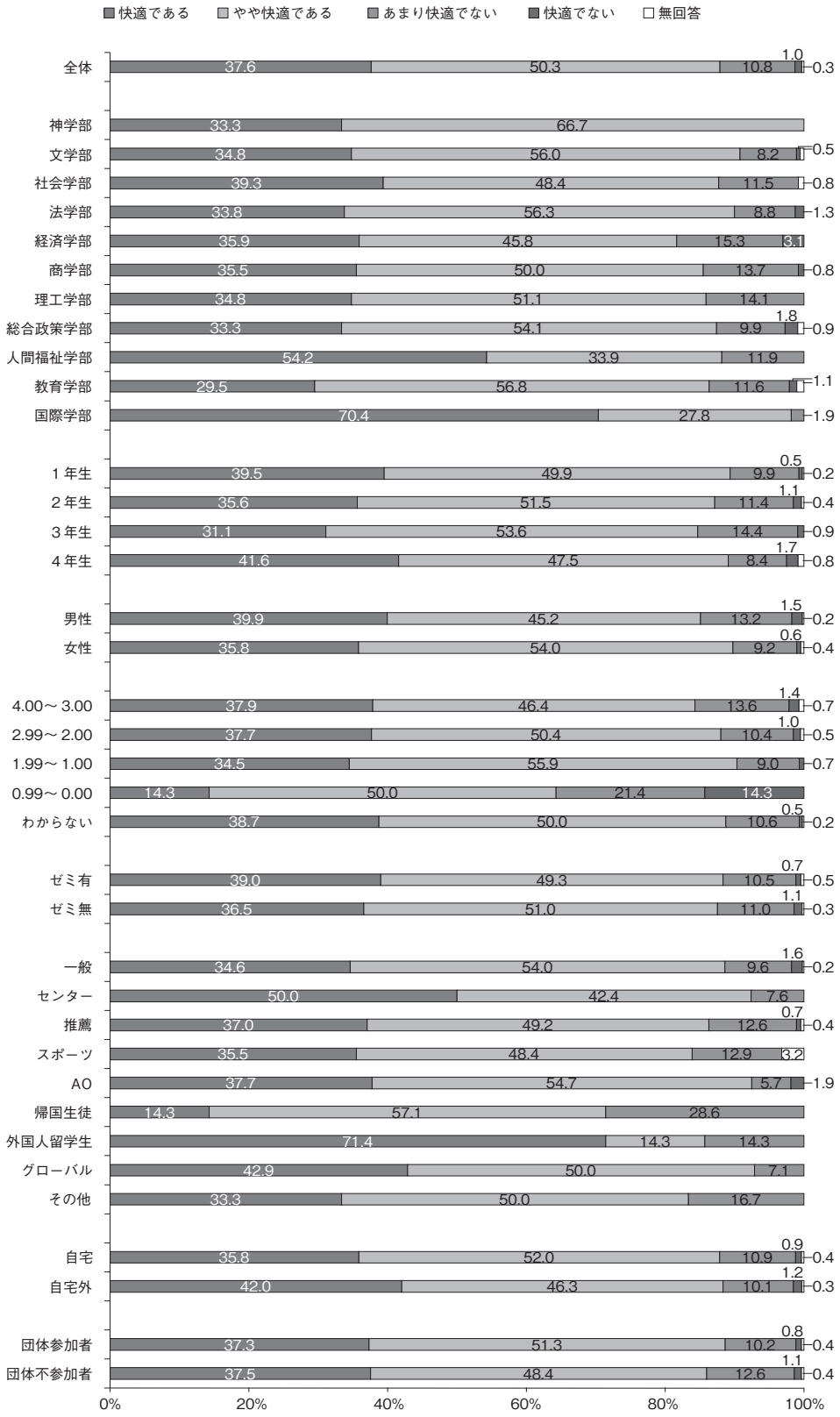
学部別では、理工学部は「快適である」が57.6%、「やや快適である」が34.8%、合わせて92.4%が肯定的な回答を、総合政策学部では「快適である」が57.7%、「やや快適である」が37.8%と95.5%が肯定的な回答をしており、神戸三田キャンパスでの満足度の高さが伺える。一方、教育学部では、「快適である」の17.9%と「やや快適である」の45.3%を合わせても肯定的な回答が63.2%にしかならない。西宮聖和キャンパスのコモンズは来春開設予定であるため、完成後に教育学部の学生がどのような感想を持つのかに注目する必要がある。その他、西宮上ケ原キャンパスにある学部は「快適である」と「やや快適である」の合計が全て80.0%台であった。

GPA 別で見ると、0.00〜0.99の層の回答に特徴がある。この層では「快適である」が14.3%。やや快適であるが28.6%と二つ合わせても42.9%となり50%を割ってしまっている。

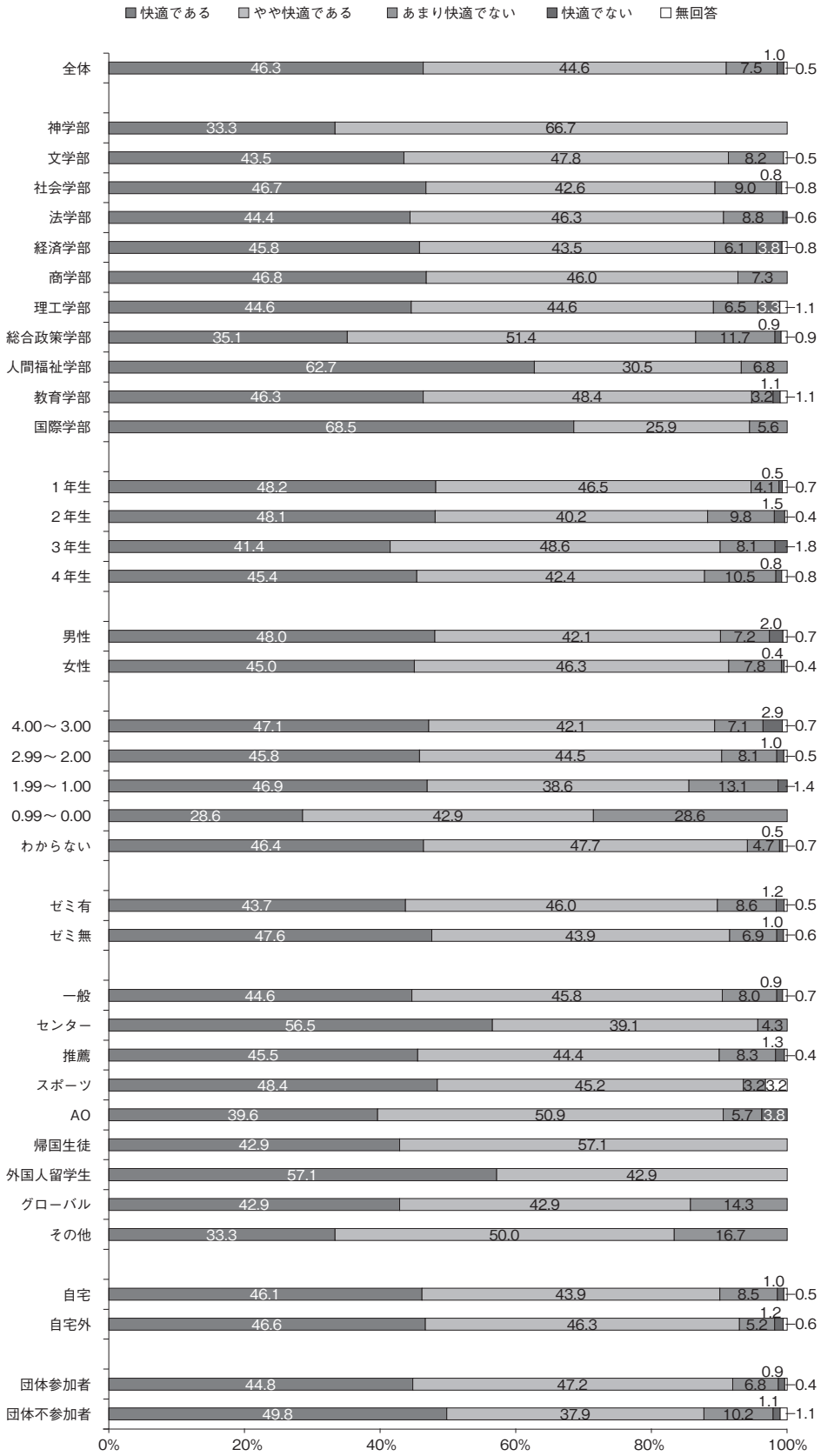
他の層では全て80%を超えているので、特に目立つ数値となっている。

入試形態別では、スポーツ選抜入学試験と帰国生徒入学試験で「快適である」が30%を下回っている。特にスポーツ選抜入学試験では、「やや快適である」を合わせても70.9%となり、他よりも評価が低くなっている。

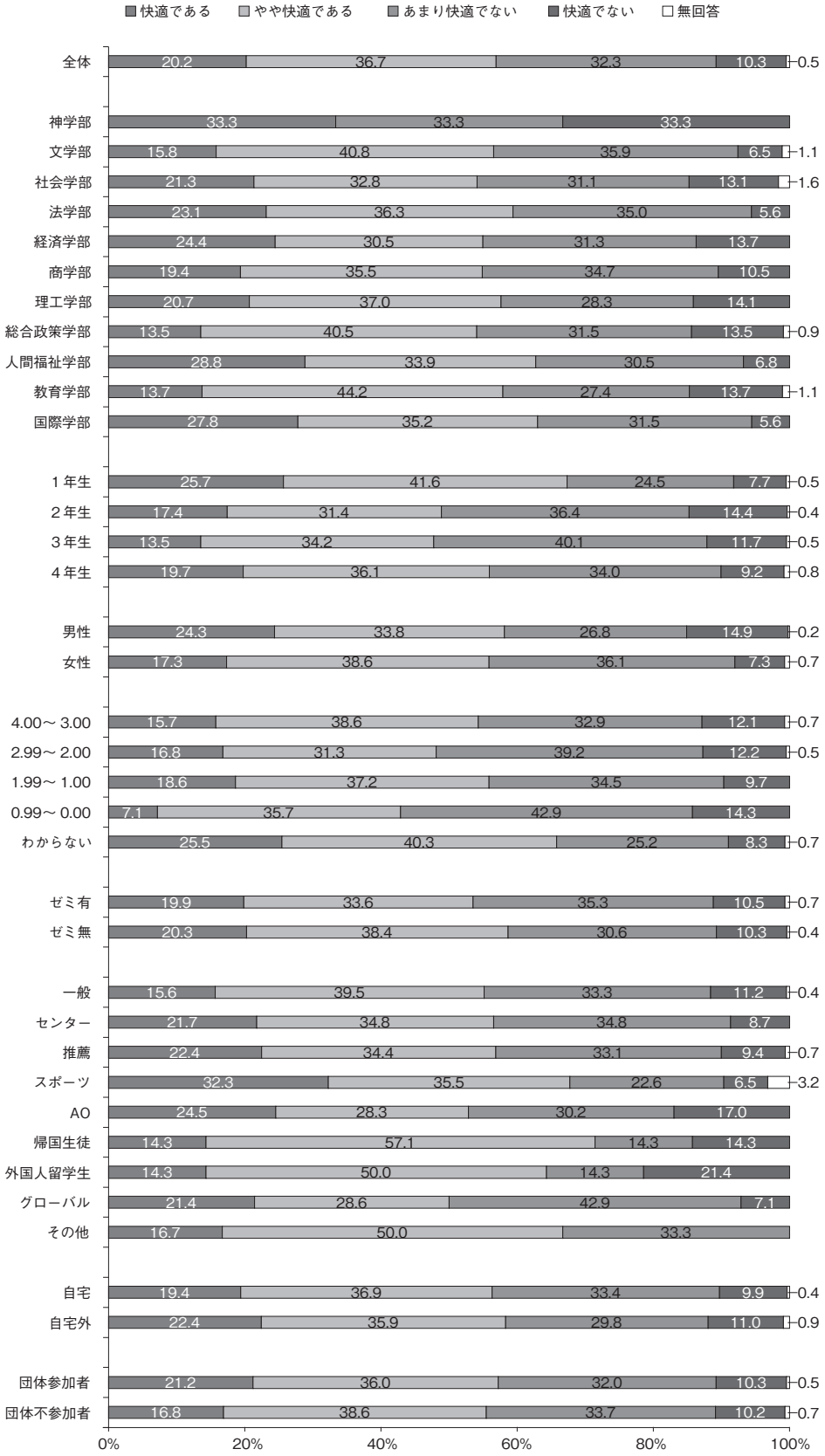
図Ⅱ-33-1　学内のアメニティ（生活環境の快適さ）　A 教室



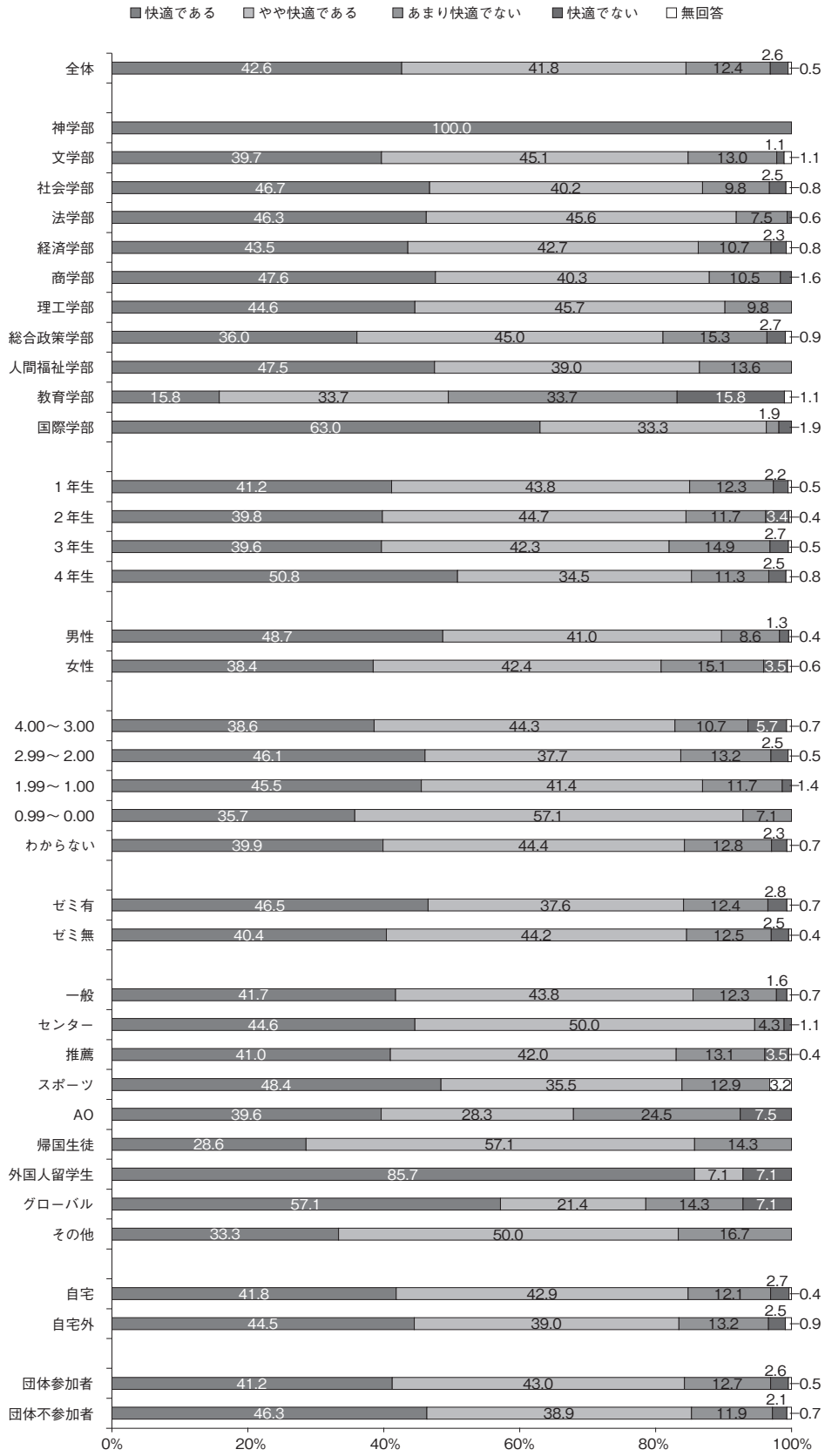
図Ⅱ-33-2　学内のアメニティ（生活環境の快適さ）　B パソコン教室



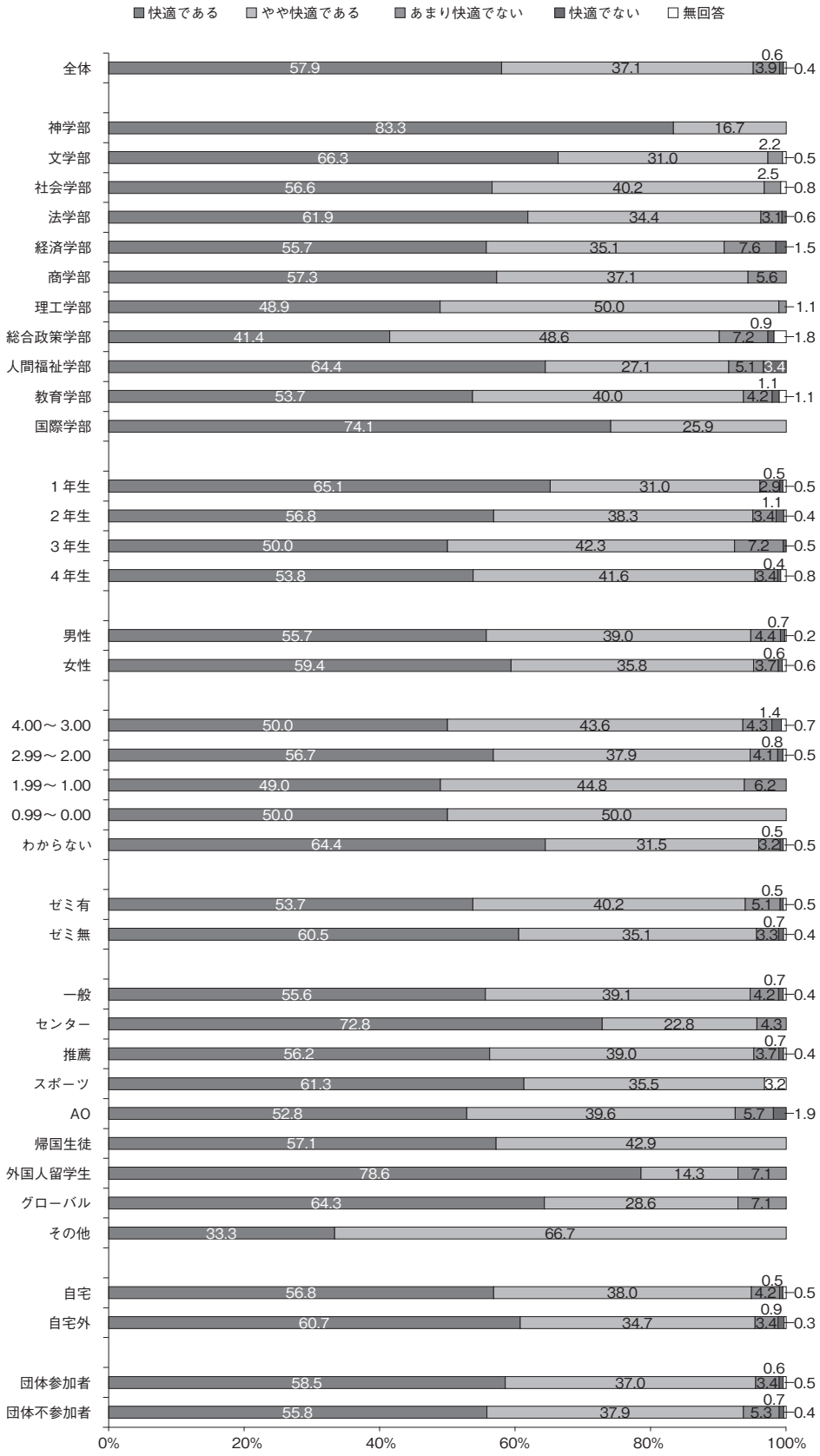
図Ⅱ-33-3　学内のアメニティ（生活環境の快適さ）　C 食堂



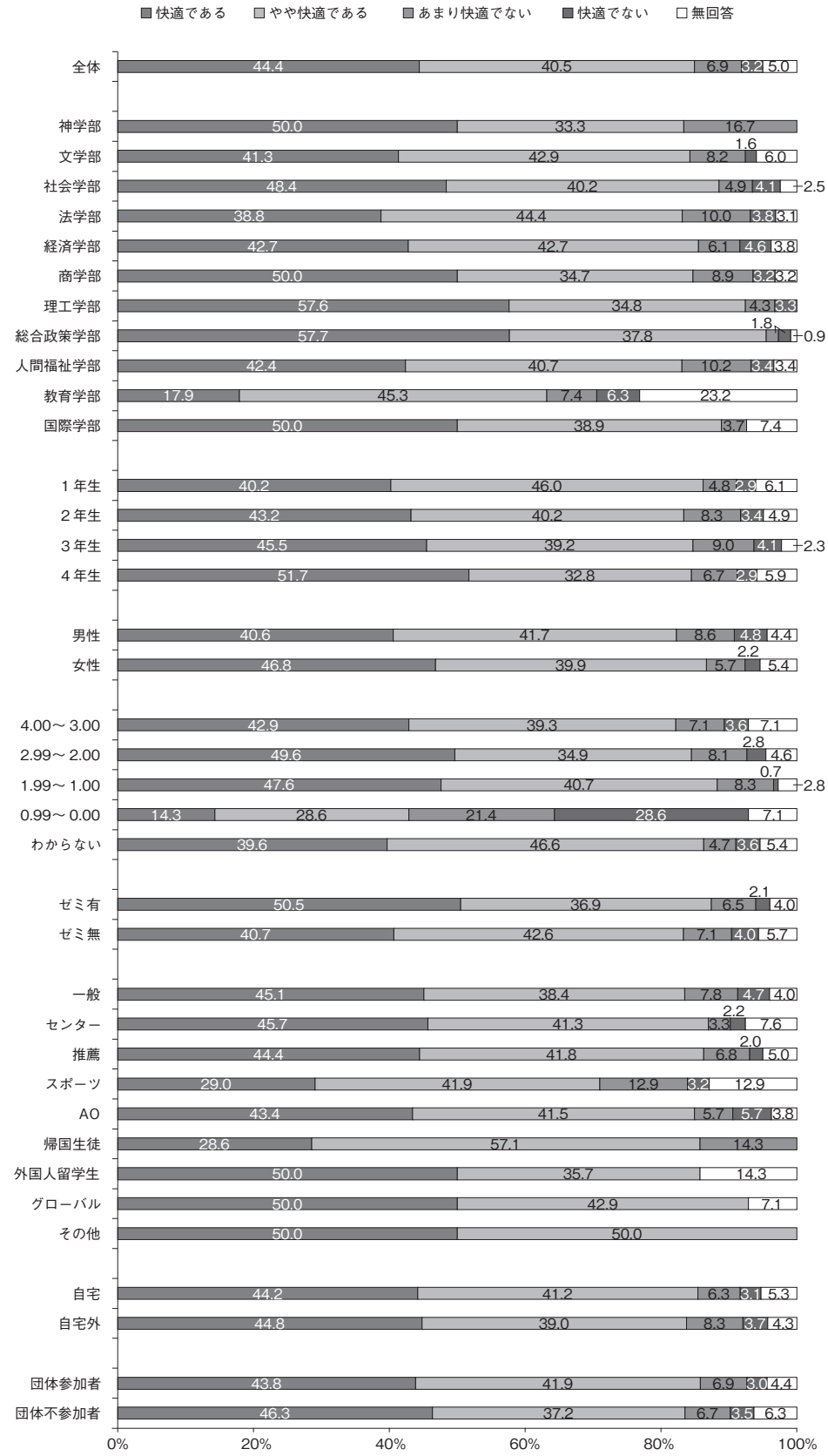
図Ⅱ-33-4　学内のアメニティ（生活環境の快適さ）　D トイレ



図Ⅱ-33-5　学内のアメニティ（生活環境の快適さ）　E 図書館



図Ⅱ-33-6　学内のアメニティ（生活環境の快適さ）　F　コモンズ



34. 喫煙状況

Summary

学生の健康状態を把握し、禁煙施策に資するために今回初めて本項目を調査した。昨今の嫌煙の風潮もあり、割合として喫煙者は少ないと言える。ただし、喫煙者自身の煙草への依存性や健康被害、副流煙による喫煙者以外への影響は無視できないため、今後は別の角度も含めて調査を継続する必要がある。

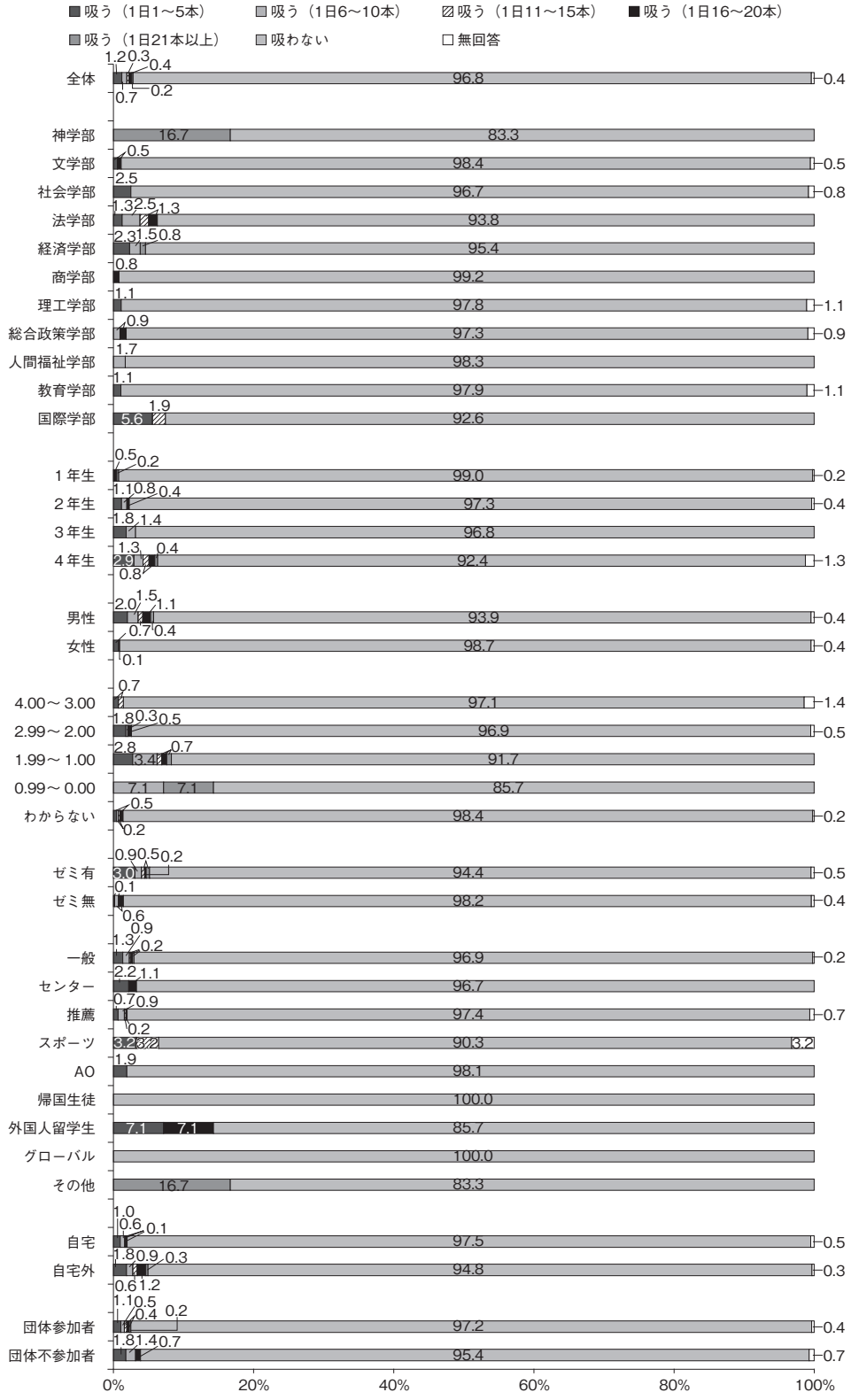
Q28. あなたは、タバコを吸いますか。

1　吸う（1日1～5本）　2　吸う（1日6～10本）
3　吸う（1日11～15本）　4　吸う（1日16～20本）
5　吸う（1日21本以上）　6　吸わない

全体として喫煙者は男子学生の5.7%、女子学生の0.9%の割合であり、昨今の嫌煙の風潮におおむね沿ったものと言える。キャンパス別、学年別に見ても喫煙者はまんべんなく分布しているように見える。

ただし、全体の0.9%の学生が1日に11本以上喫煙しており、依存性や健康への被害がないか、今後は別の角度からも調査できれば禁煙施策に役立てることができると思われる。

図Ⅱ-34　喫煙状況


吸う（1日1～5本）
吸う（1日6～10本）
吸う（1日11～15本）
吸う（1日16～20本）
吸う（1日21本以上）
吸わない
無回答
全体
神学部
文学部
社会学部
法学部
経済学部
商学部
理工学部
総合政策学部
人間福祉学部
教育学部
国際学部
1年生
2年生
3年生
4年生
男性
女性
4.00～3.00
2.99～2.00
1.99～1.00
0.99～0.00
わからない
ゼミ有
ゼミ無
一般
センター
推薦
スポーツ
AO
帰国生徒
外国人留学生
グローバル
その他
自宅
自宅外
団体参加者
団体不参加者
0%
20%
40%
60%
80%
100%

35. ハラスメント相談窓口の認知度

Summary

ハラスメントの相談窓口や相談員に対する認知度は29.1%であった。ハラスメント相談センターによる広報活動や啓発活動を通じて、今後の認知度向上やハラスメントのないキャンパスづくりが期待される。

Q29. あなたはセクシュアルハラスメントやアカデミックハラスメント等の相談を受ける窓口（相談員）が学内にあることを知っていますか。
1　知っている　　2　知らない

この設問も、自己点検・評価における評価指標となり得るデータとして、2004年度からCCA調査に連動して毎回調査しており、今回はCCA調査の設問の1つに加えられた。

本学は2000年からハラスメント防止の取組みを進めており、2016年度は「ハラスメント防止規程」を定めるとともに、ハラスメント相談センターを設置し、その防止および解決に取り組んでいる。

表Ⅱ-35は肯定的な回答（知っている）の割合の学部別の経年変化を示したものである。

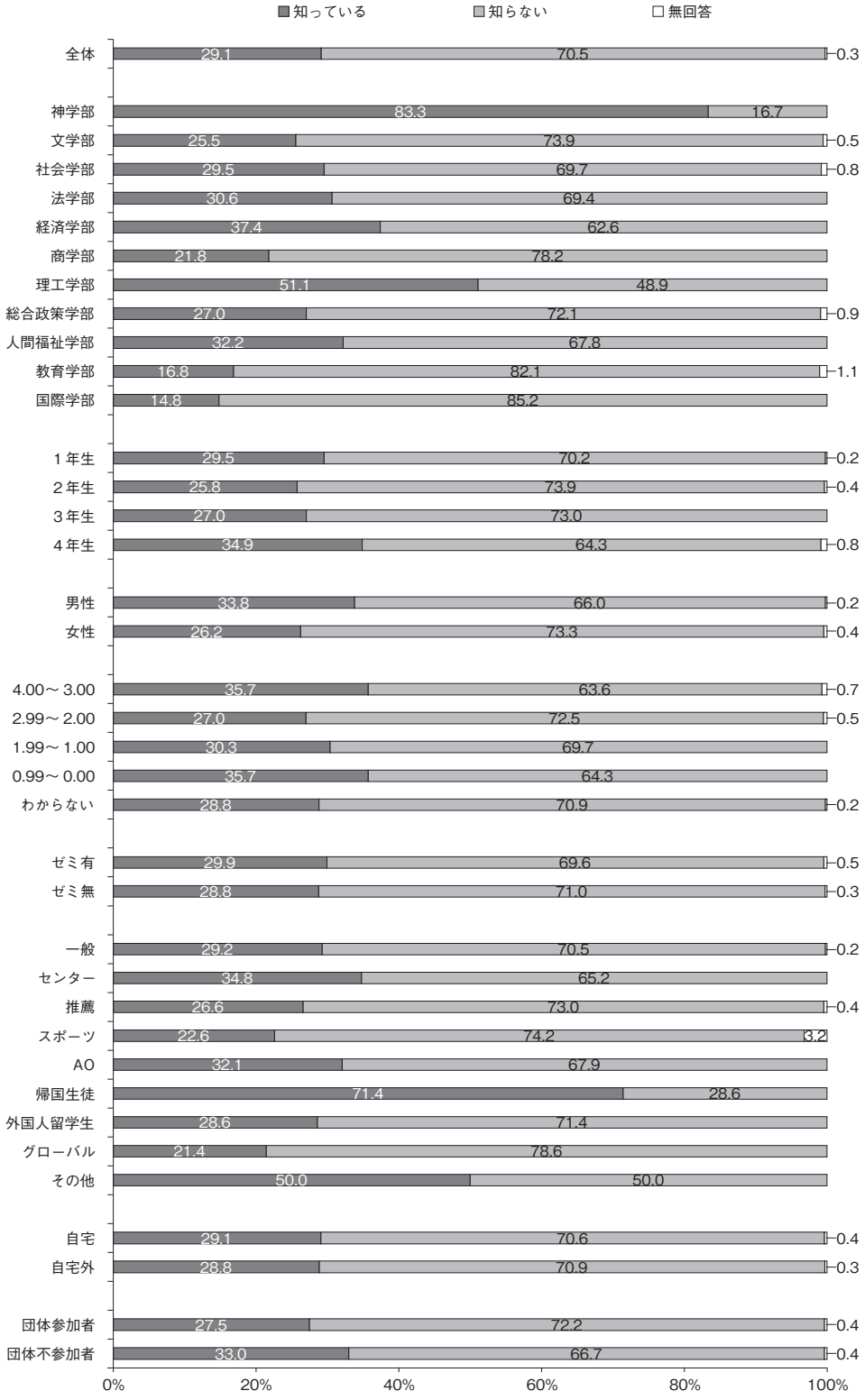
表Ⅱ-35　ハラスメント等の相談をうける窓口（相談員）があることを知っている割合

	2004年度	2006年度	2008年度	2010年度	2012年度	2014年度	2016年度
神学部	50.0	58.3	33.3	83.3	50.0	66.7	83.3
文学部	52.6	48.1	49.3	35.2	53.7	47.6	25.5
社会学部	52.9	46.4	37.7	43.7	36.2	38.2	29.5
法学部	67.1	58.1	52.1	49.6	45.7	47.6	30.6
経済学部	52.5	42.4	44.6	27.5	31.4	40.2	37.4
商学部	51.9	44.2	36.5	28.5	25.4	16.0	21.8
理工学部	25.4	32.3	22.5	28.9	32.0	28.8	51.1
総合政策学部	49.3	41.4	48.8	33.7	40.5	36.8	27.0
人間福祉学部			34.6	42.6	40.3	40.8	32.2
教育学部				25.6	31.0	24.7	16.8
国際学部				29.4	25.6	36.4	14.8
全体	52.5	46.4	43.0	36.2	38.1	37.1	29.1

今回の調査では回答した学生のうち、「知っている」と回答した割合は29.1%であり、これまでの調査でもっとも低い割合である。また学部間で比較してみると、今回は、神学部（83.3%）、商学部（21.8%）、理工学部（51.1%）以外の学部は、前回の調査より割合が下がっている。また神学部と理工学部では半数以上が「知っている」と回答したのに対して、教育学部（16.8%）、国際学部（14.8%）と認知度が2割以下となっている。

ハラスメント相談センターでは、周知のための広報活動として、リーフレットの発行やWebページの立ち上げを2016年度に行った。また啓発のための研修の開催等も計画されており、今後これらの活動を通じて、本学のハラスメント防止の取り組みが学内に周知され、認知度が上がるとともに、ハラスメントのないキャンパスづくりが期待される。

図Ⅱ-35　ハラスメント相談窓口の認知度



36. 授業時間以外に過ごす場所

Summary

学生が授業の合間などの授業以外の時間を過ごす場所として、40%を超える学生が図書館で過ごしていることがわかった。その一方、特徴的な結果として、理工学部生は40%以上の学生がアカデミックコモンズを、総合政策学部生は30%以上の学生がパソコン教室で過ごしていることがわかった。また、G 号館が主な活動場所となっている人間福祉学部・国際学部生はラウンジの利用が有意に高い結果となった。

Q30. 授業の合間など授業時間以外をどこで過ごしますか。
最もあてはまるものに、1つだけ○をつけてください。

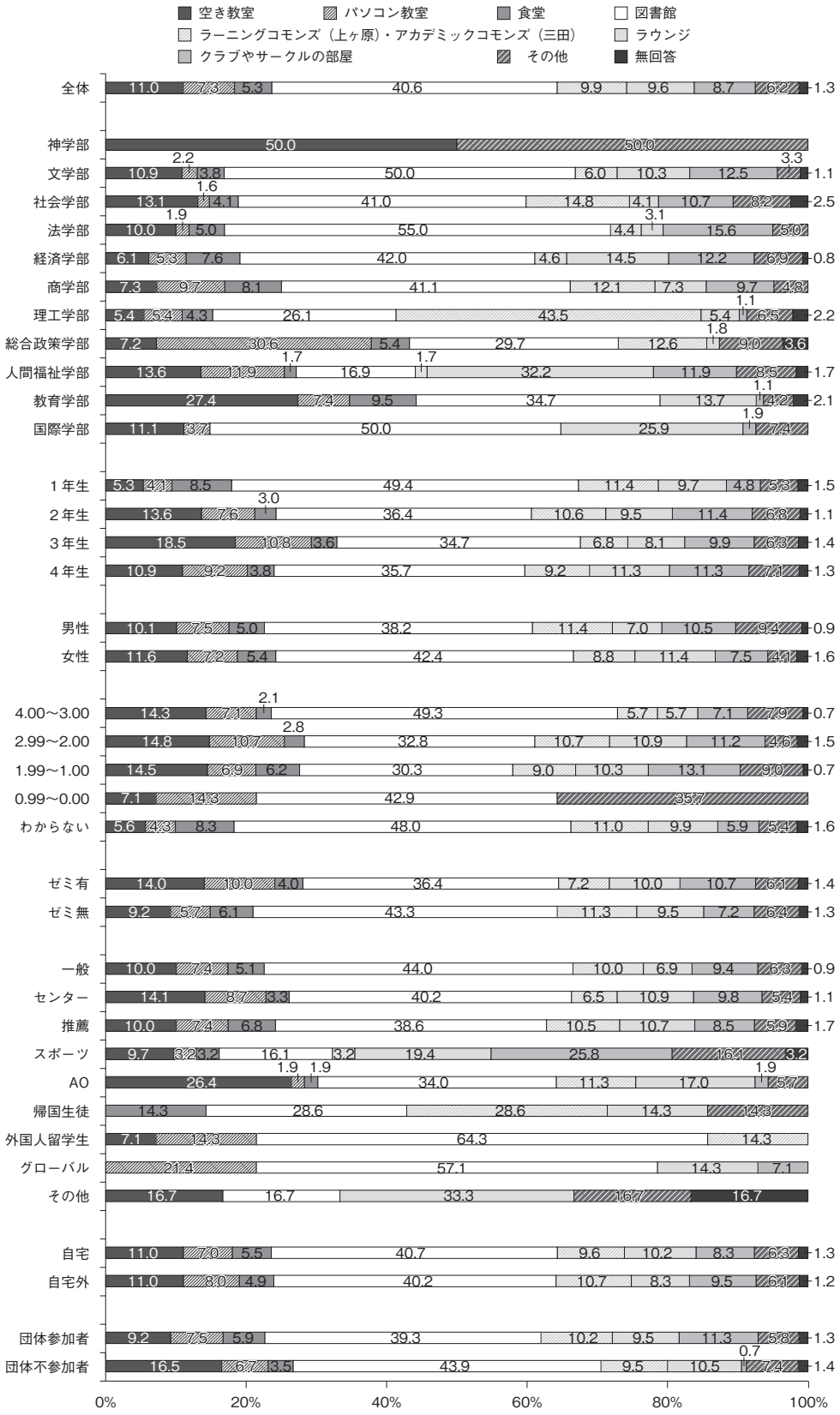
1　空き教室　2　パソコン教室　3　食堂
4　図書館　5　ラーニングコモンズ（上ケ原）・アカデミックコモンズ（三田）
6　ラウンジ　7　クラブやサークルの部室　8　その他

全体の数値としては、図書館で過ごす学生が40%を超えており、続いて空き教室が11%、ラーニングコモンズが10%と続く結果となったが、この調査結果も、Q20の結果と同様、キャンパスにより学生が授業の合間に過ごす場所が異なることがわかった。

まず特徴的なのは、神戸三田キャンパスで、理工学部生の43%がアカデミックコモンズを、総合政策学部生の31%がパソコン教室を主要な居場所としており、図書館で過ごす学生よりも多いとともに学部により全く異なることがわかった。続いて、西宮聖和キャンパスの教育学部生は空き教室が27%と他のキャンパス、学部と全く異なる結果となった。このことは、西宮聖和キャンパスにおける空き時間の居場所が不足していることに起因していると推測され、2017年4月に予定されているラーニングコモンズの開設が待たれる。

一方、西宮上ケ原キャンパスでは、G 号館に学部事務室等がある人間福祉学部・国際学部では、ラウンジの利用が25%を超え、他の学部と比べると圧倒的に高いことがわかった。なお、その他の西宮上ケ原キャンパスの学部では、社会学部生、商学部生がラーニングコモンズを居場所として活用している割合が他の学部とは異なり10%を超えているが、授業で主に使用する教室棟との近さも関係が深いと思われる。

図Ⅱ-36　授業時間以外に過ごす場所



37. 学生が大学提供の Web サービスにアクセスする情報端末

Summary

学内パソコン、個人所有パソコン、スマートフォンを比較した際に、学生は主にスマートフォンを主に大学が提供している Web サービスや検索システムを利用する際に用いていることが明らかとなった。それは、学部、学年、入試形態別に比較しても同様であった。タブレット端末に関しては、ほとんど利用している者がおらず、本学における ICT 機器として全く根付いていないことが明らかになった。

Q31. 大学が提供しているさまざまな Web サービスや検索システム（LUNA、シラバス、図書館の OPAC など）にアクセスするときに主に利用する情報端末は何ですか。最もあてはまるものに、1 つだけ◯をつけてください。

1　パソコン（学内）　2　パソコン（個人所有）　3　スマートフォン
4　タブレット端末　5　その他

ここでは、本学が提供している Web サービスや検索システム（LUNA、シラバス、図書館の OPAC など）にアクセスする際に主に利用する情報端末を（1）学部、（2）学年、（3）入試形態の観点から分析する。

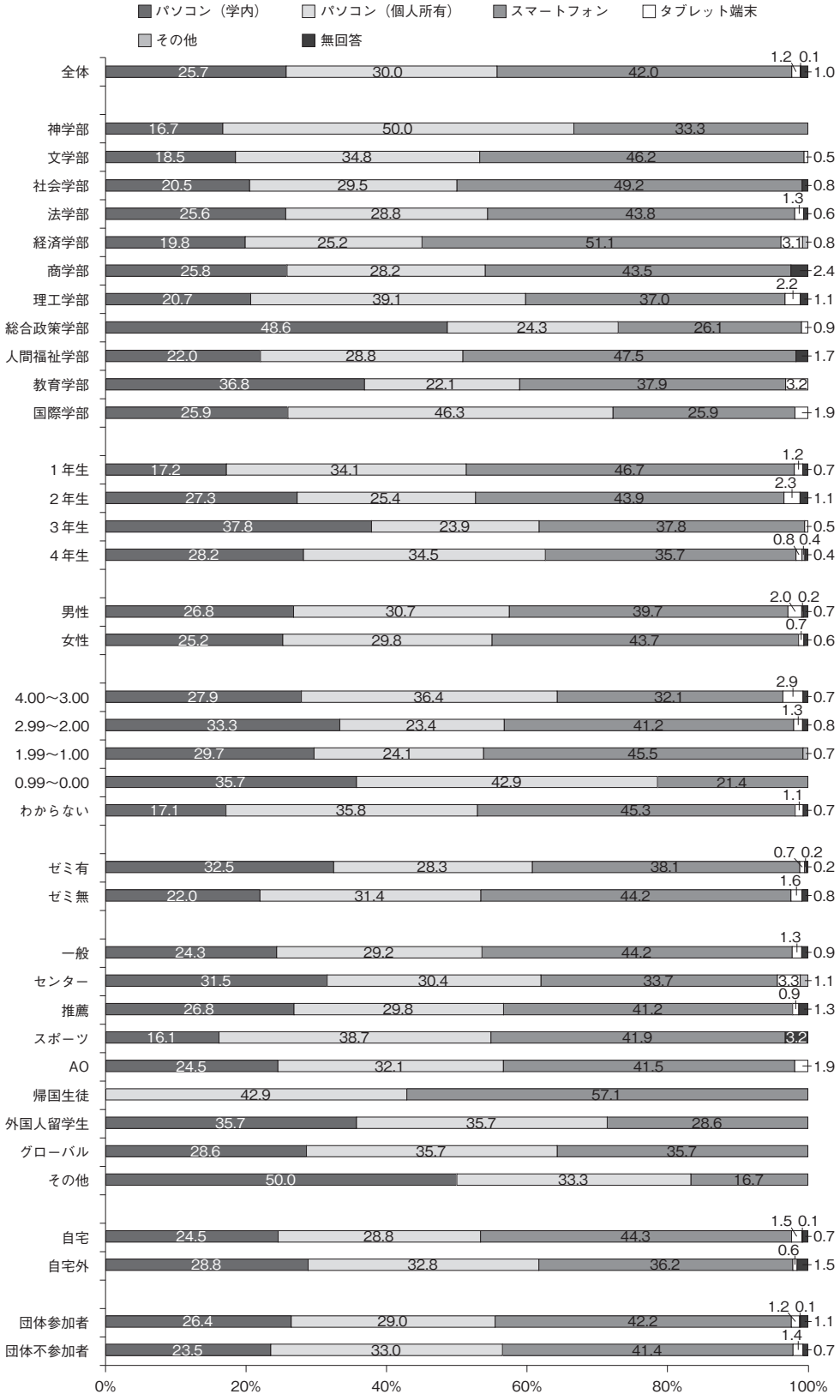
最も学内のパソコンを主に用いて Web サービスや検索システムを利用しているのは、総合政策学部である（48.6%）。次に高いのが教育学部（36.8%）で、最も低いのが神学部（16.7%）となっている。個人のパソコンを最も用いているのは、神学部（50.0%）で、二番目が国際学部（46.3%）となっており、最も低いのは教育学部（22.1%）となっている。

持ち運びが便利なスマートフォンの利用率に関しては、経済学部（51.1%）と社会学部（49.2%）、文学部（46.2%）が主に高く、総合政策学部（26.1%）と国際学部（25.9%）が低い。タブレット端末は大きく数値が下がり、最も高い割合が教育学部の3.2%で、0 %の学部も複数ある（神学部、社会学部、商学部、人間福祉学部）。このことから、本学の学生は主に持参のスマートフォンや個人所有のパソコンを用いて Web サービスや検索システムを利用しており、特定の学部については頻繁に学内のパソコンを用いていると考えられる。

学年ごとで、主に利用する情報端末に違いは見られない。どの学年においてもスマートフォンを主に用いる学生が35%～45%の割合でおり、個人所有のパソコンを用いる学生が23%～34%の割合でいる。また、学内のパソコンに関しては17%～37%となっており、ゼミや研究活動が増える 3 年生時が最も多く37.8%となっている。入試形態別においても、スマートフォンを使った Web サービスや検索システムの利用割合が最も高く、次いで個人所有のパソコン、学内のパソコンが用いられる傾向にあると言える。

Web サービスや検索システムの利用は、用途によって媒体が異なると考えられる。シラバスの閲覧や図書の検索等であれば、パソコン（学内・個人所有）とスマートフォンで大きな違いは無いと考えられる。しかしながら、受講生同士のコミュニケーションや課題レポートの作成等が目的となる場合、パソコンとスマートフォンでは出来ることが大きく異なってくる。ディジタルネイティブ世代はスマートフォンでも速いスピードで文字が打てるフリック入力をすることのできる学生が多い傾向にあるが、ドキュメンテーションをする上で細かい作業をスマートフォンだけでやるのは、困難である。今後はスマートフォンだけでなく学内・個人所有のパソコン利用やタブレット端末の利用が増加すると考えられる。また、本学においても将来的には、パソコンには無いポータビリティやスマートフォンには無い操作性の高さがもつ利便性から、タブレット端末の普及が予想される。それに対応して、提供する Web サービスや検索システムの充実に加えて積極的な教育活動での利用が求められてくると考えられる。

図Ⅱ-37　学生が大学提供の Web サービスにアクセスする情報端末



38. インターンシップについて

Summary

インターンシップに参加したことがある学生は前回調査と比べても大幅に増加しており、今回調査では４年生のみのデータでは50.4%に達している。ただし実習の日数で見ると、現状では経団連の指針で「インターンシップは最低５日」と定められているにもかかわらず、参加者の過半数が４日以下のプログラムに参加しており、実態が必ずしも合致していない状況が浮き彫りになっている。

Q32-1. あなたは大学入学後にインターンシップに参加したことがありますか。
1　ある　　2　ない

Q32-2. Q32-1のように回答した理由について、最もあてはまるものに１つだけ○をつけてください。
1　職業体験　2　業界研究　3　マナーなどの社会勉強　4　就職活動に有利
5　みんなが参加していたから　6　インターンシップの選考に落ちた
7　公務員・資格試験勉強のため　8　大学の勉強を優先した
9　他の活動（部活動や実習）を優先した　10　興味がなかった
11　就職を希望していない　12　インターンシップが何かわからない　13　その他

Q32-3. インターンシップに参加した日数（実際に企業に出向いた日数）を教えてください。
複数回参加したことがある場合は、最も長い期間に○をつけてください。
1　１日　2　２～４日　3　５～10日　4　11～15日
5　16～20日　6　21日以上　7　インターンシップに参加したことがない

Q32-4. 今後、インターンシップに参加したいと思いますか。
1　参加したい　2　参加したいと思わない
3　参加したいが、参加することが難しい

Q32-5. Q32-4のように回答した理由について、最もあてはまるものに１つだけ○をつけてください。
1　職業体験　2　業界研究　3　マナーなどの社会勉強
4　就職活動に有利　5　みんなが参加するから　6　進路がすでに決定している
7　インターンシップの選考に落ちた　8　公務員・資格試験勉強のため
9　大学の勉強を優先した　10　他の活動（部活動や実習）を優先した
11　興味がなかった　12　就職を希望していない
13　インターンシップが何かわからない　14　その他

Q32-1では、インターンシップに参加したことが「ある」は12.7%、「ない」は86.9%であり大半の学生はインターンシップ未経験である。

所属学部別では、総合政策学部20.7%、神学部および国際学部16.7%、社会学部14.8%、商学部14.5%の順でインターンシップに参加したことがある。

学年別では、インターンシップに参加したことが「ある」は４年生50.4%であり、前回の2014年調

査の32.5％と比べて増加が目立つ。ただし現在の企業等が実施するインターンシップ実施スケジュールを考慮すると、実質は３年生で参加している学生が最も多いと考えられる。

男女別では、インターンシップ参加経験が「ある」女子学生は14.4％と男子10.3％を上回っている。

GPA 別では、４段階上位よりインターンシップ経験が「ある」学生は22.1％、20.9％、19.3％、7.1％と、成績が下位に行くほどインターンシップ経験が少なくなる。学業成績とインターンシップ参加有無の相関関係がみてとれる。

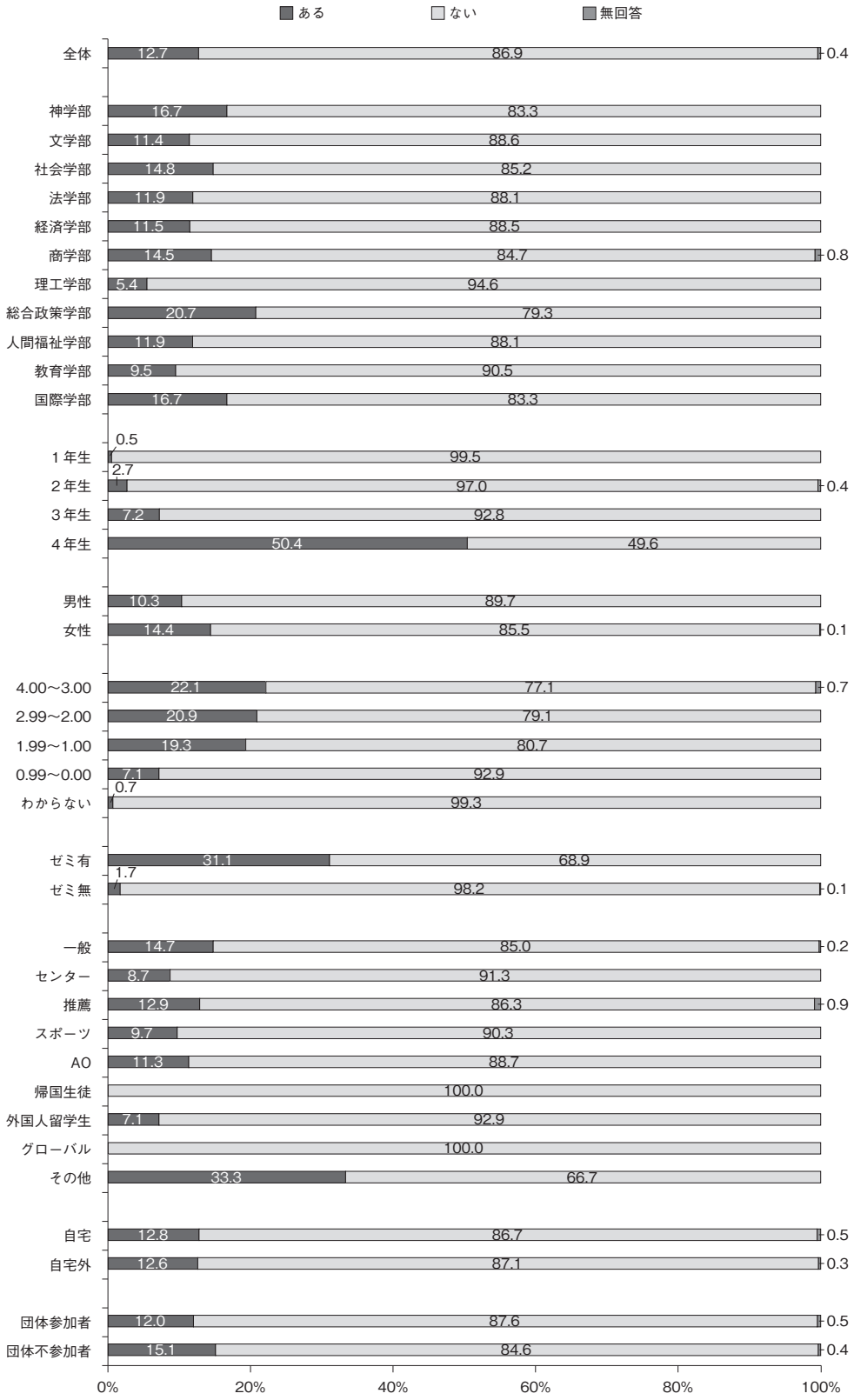
Q32-2 では、インターンシップに参加した、あるいはしていない理由を聞いた。参加したことがあると答えた学生の理由として多かったのは１番目が「業界研究」34.5％、２番目に「職業体験」26.9％、３番目に「就職活動に有利」24.1％であった。一方、「参加したことがない」という学生の理由として多かったのは１番目が「興味がなかった」17.9％、次いで「インターンシップが何かわからない」13.8％、「大学の勉強を優先した」10.7％であった。インターンシップに参加していない学生については、参加できない理由があるというよりは、興味関心や理解が不足しているために参加していない学生のほうが多いという傾向が見られる。このため、今後はインターンシップに参加する意義や、そもそもインターンシップとは何かといったことについて、学生への情報提供の機会を積極的に設け、インターンシップへの関心、理解を深めていく必要があると思われる。

Q32-3 では、インターンシップの参加日数を聞いている。参加した学生のうち全体で最も多いのが「２～４日」であり、次いで「１日」、「５日～10日」と続く。インターンシップ参加者の過半数が、４日以下のプログラムに参加していることになる。

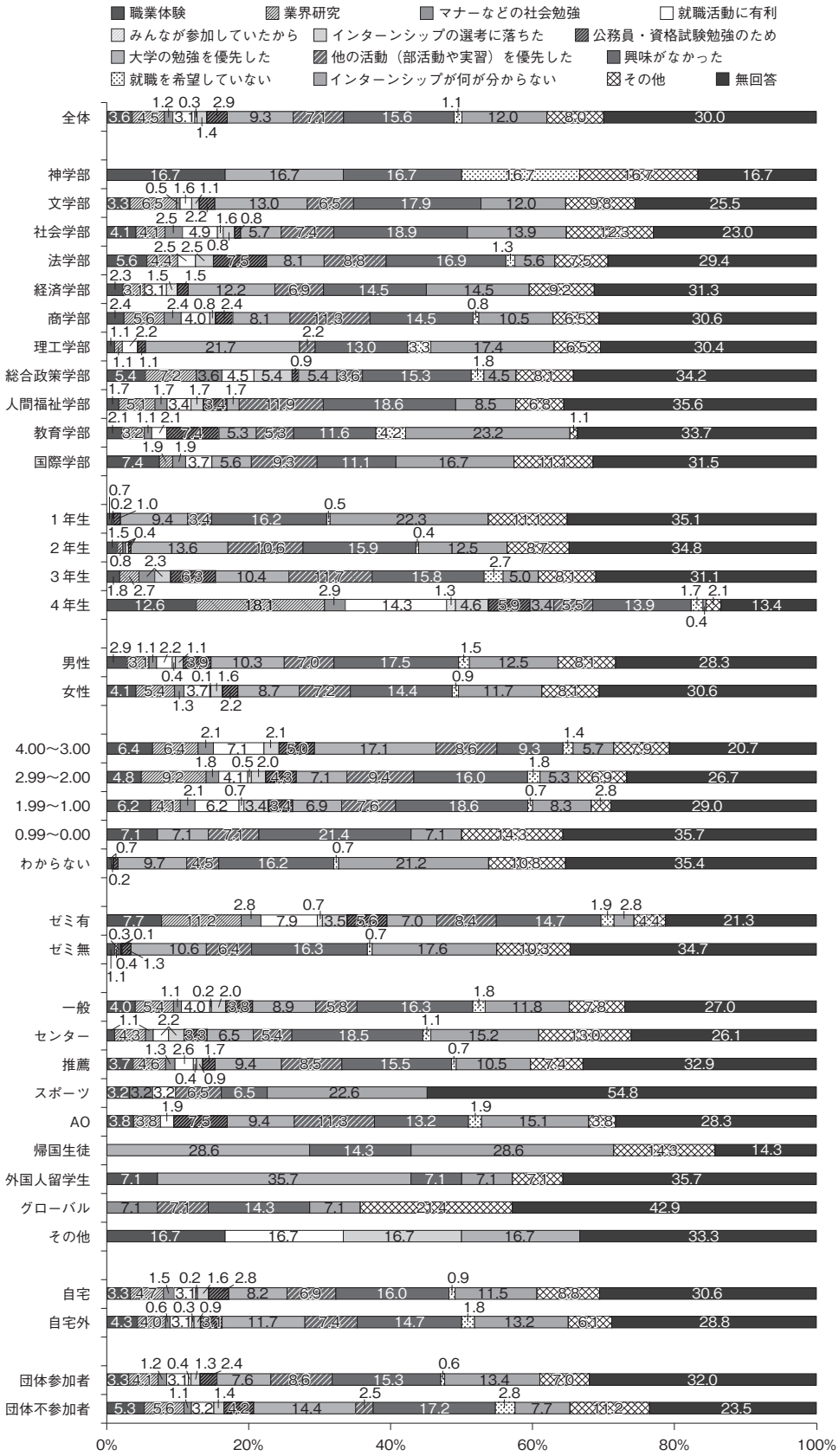
Q32-4 の「今後インターンシップに参加したいか」という問いでは、過半数の56.3％が「参加したい」と答えており、「参加したいと思わない」と答えている学生（21.9％）を大きく上回っている。インターンシップに参加したいと考えている学生が潜在的に多いことがわかる。また何らかの制約で「参加したいが参加するのが難しい」と答えている学生は18.4％であった。

Q32-5 では、Q32-4 の回答理由を聞いている。この中で「参加したいが参加するのが難しい」と答えている学生の理由は、１位が「他の活動（部活動や実習）を優先した」で31.9％、２位が「大学の勉強を優先した」で13.3％、３位が「公務員・資格試験勉強のため」で12.9％となっている。

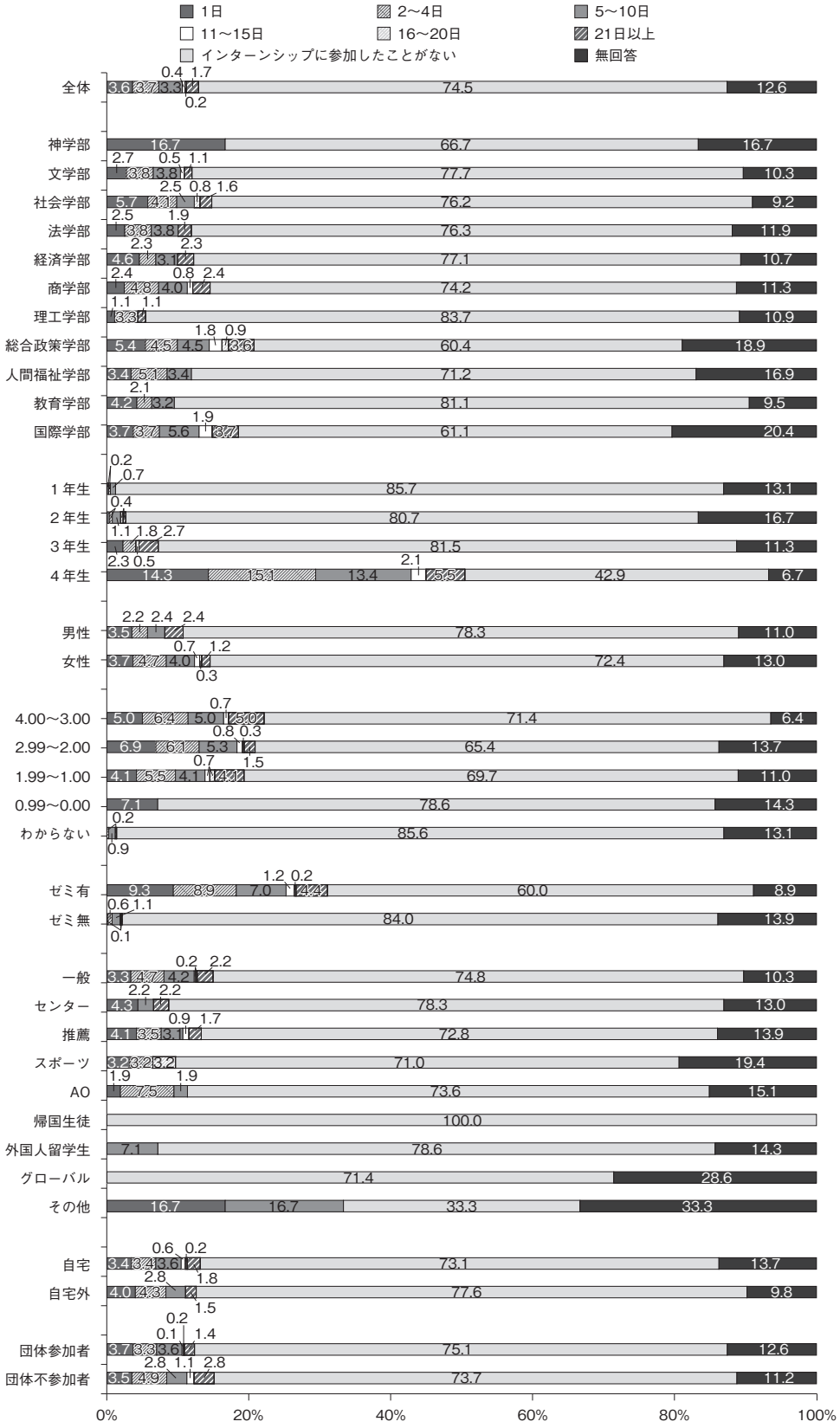
図Ⅱ-38-1　インターンシップの参加経験



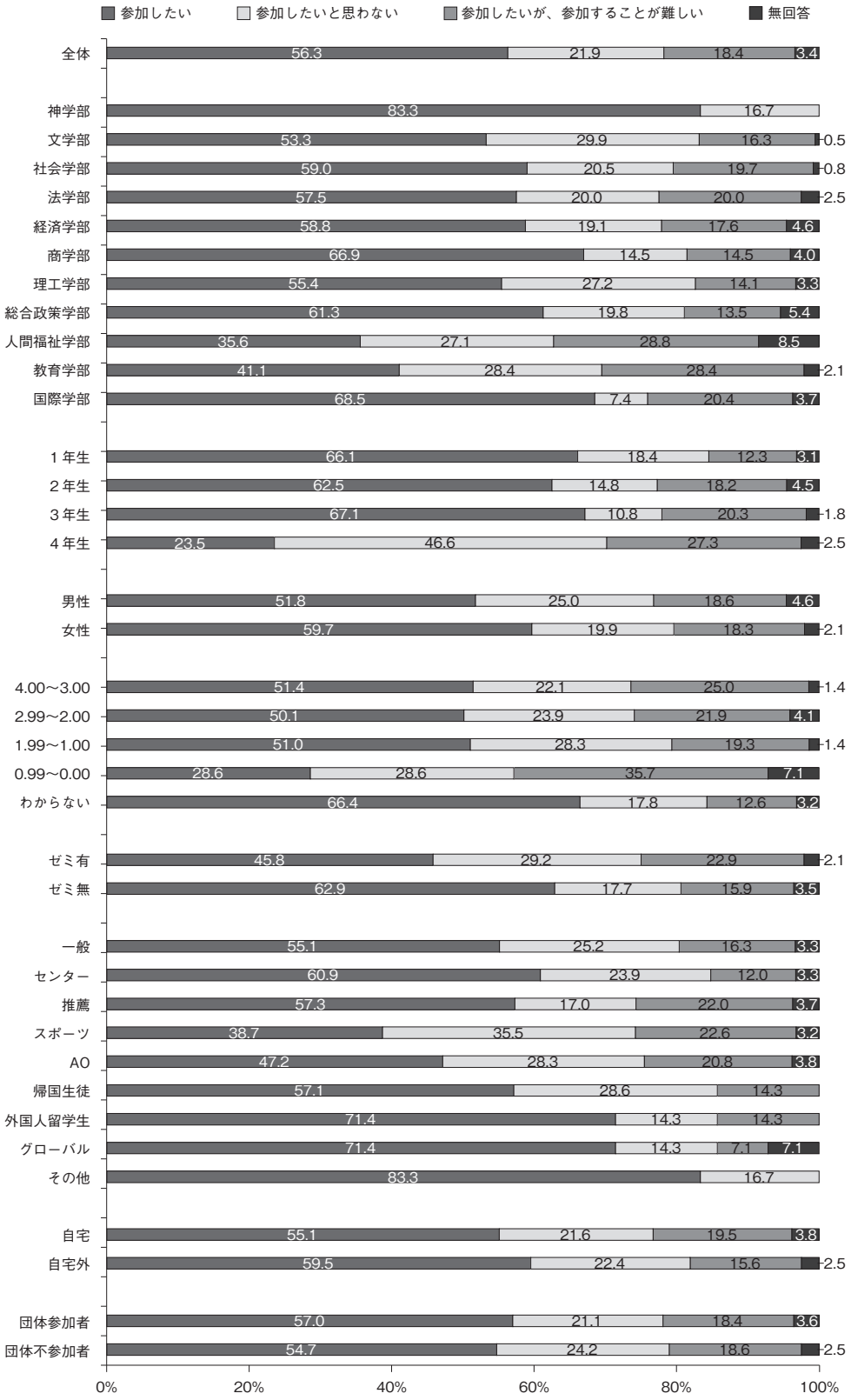
図Ⅱ-38-2　インターンシップに参加した理由



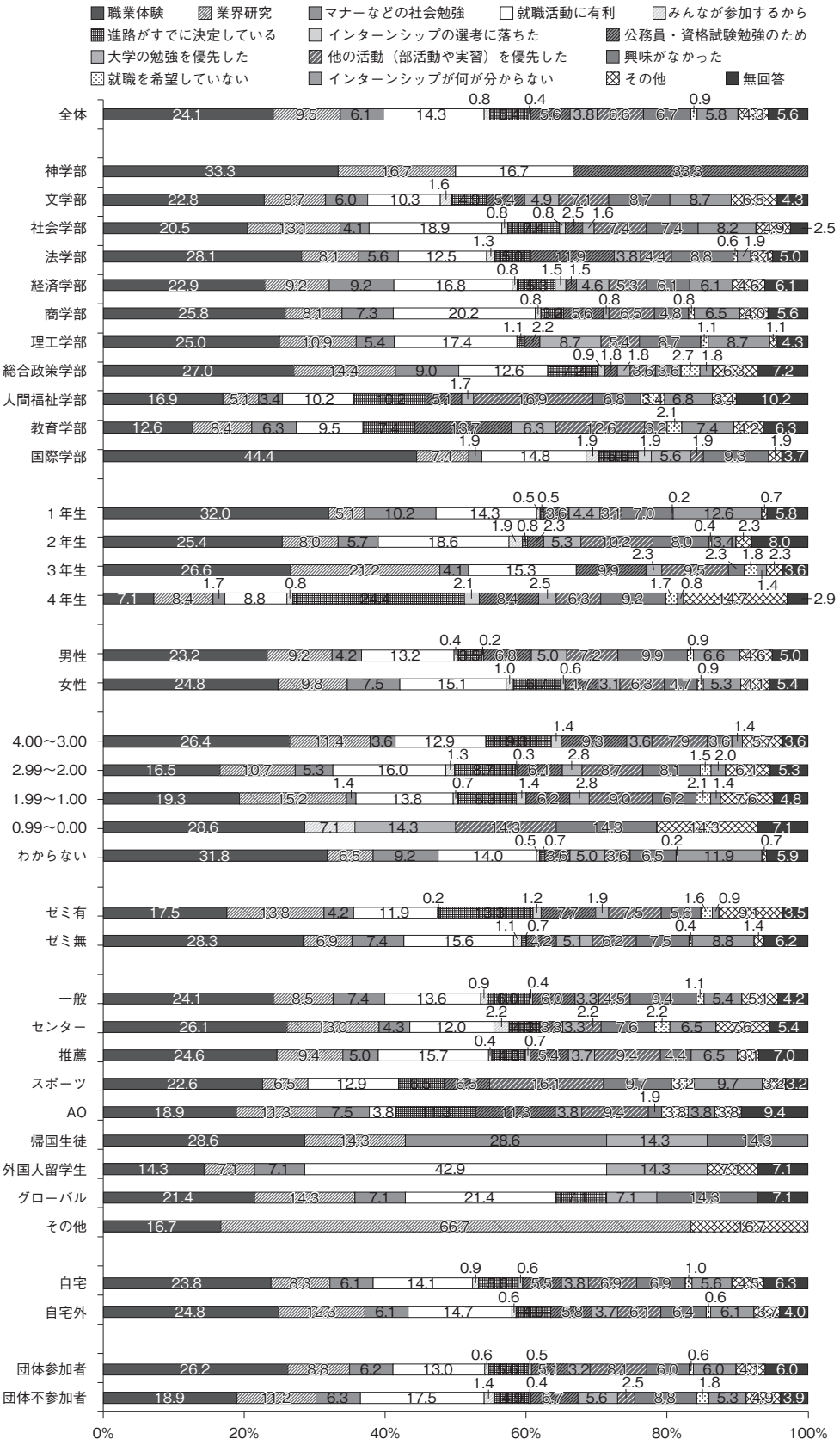
図Ⅱ-38-3　インターンシップに参加した日数



図Ⅱ-38-4　インターンシップへの参加意思



図Ⅱ-38-5　インターンシップへの参加意思理由



39. ボランティアについて

Summary

ボランティア活動へ参加意向のある学生は67.7%だった。大学として、多くの学生のこの思いを実現するための積極的な支援が求められているのではないだろうか。

Q33-1. あなたは、なんらかのボランティア活動をしたことがありますか。
1　はい　　2　いいえ

Q33-2. あなたは、今後、ボランティア活動をしたいと思いますか。
1　強くそう思う　　2　そう思う
3　あまりそう思わない　　4　まったくそう思わない

この設問もQ11、Q12、Q29と同様に、自己点検・評価における評価指標となり得るデータとして、2004年度からCCA調査に連動して毎回調査し、今回CCA調査の設問の1つに加えられたものである。

ボランティア活動の活性化を進め、地域との開かれた関係を築くことによって、スクールモットー“Mastery for Service”を体現する世界市民の育成を図るため、2016年4月に「関西学院ボランティア活動支援センター」が発足し、ボランティア活動の支援に関する基本方針が策定された。

表Ⅱ-39-1はQ33-1において「はい」と回答した割合の経年変化を示しており、表Ⅱ-39-2はQ33-2において「強くそう思う＋そう思う」と回答した割合の学部別の経年変化を示している。

表Ⅱ-39 - 1　ボランティア活動経験の有無の経年比較（Q33-1）

	2004年度	2006年度	2008年度	2010年度	2012年度	2014年度	2016年度
全体	49.4	52.8	50.4	47.0	45.5	42.8	43.0

表Ⅱ-39-2 「強くそう思う＋そう思う」と回答した割合の学部別経年変化（Q33-2）

	2004年度	2006年度	2008年度	2010年度	2012年度	2014年度	2016年度
神学部	87.5	66.7	66.7	66.7	50.0	66.7	83.4
文学部	71.8	65.3	66.5	66.8	76.1	74.6	71.2
社会学部	75.9	70.9	69.1	63.4	66.0	66.7	64.7
法学部	71.7	61.9	59.8	60.3	58.9	65.8	61.3
経済学部	65.0	64.4	54.7	56.9	70.7	71.8	53.4
商学部	65.9	67.4	62.6	63.4	70.0	73.1	67.8
理工学部	60.6	50.8	53.9	51.1	58.7	60.1	58.7
総合政策学部	82.1	78.1	72.7	61.1	81.1	68.5	71.1
人間福祉学部			88.5	75.9	83.6	76.1	78.0
教育学部				82.1	85.9	87.1	92.7
国際学部				88.2	69.8	74.6	72.2
全体	71.7	66.6	64.1	63.5	71.5	71.5	67.7

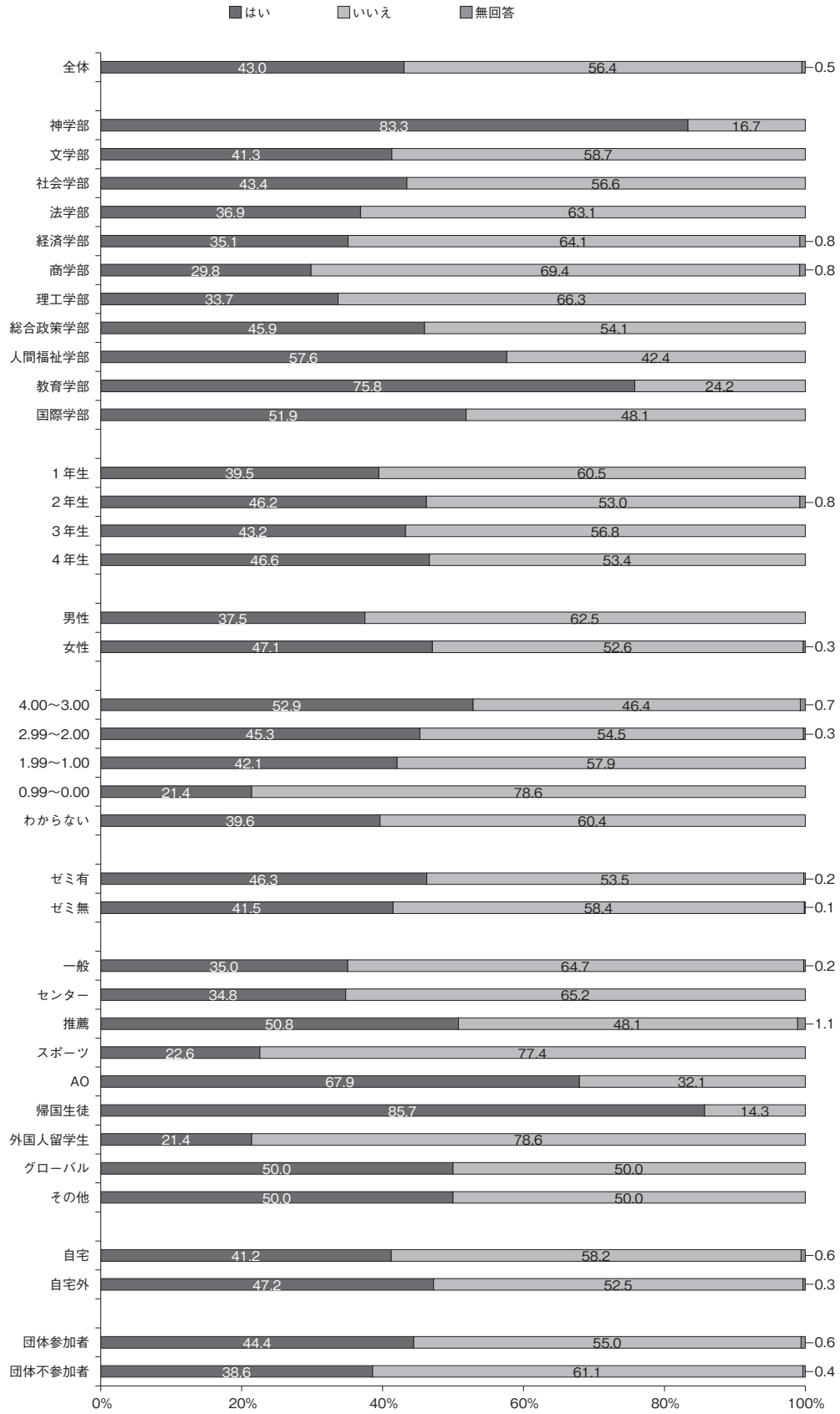
Q33-1の結果より、43%の学生がすでにこれまでに何らかのボランティア活動を経験していることわかった。この結果は、前回の調査とほぼ同じ割合である。

またQ33-2については、調査の結果、全体では「強くそう思う＋そう思う」という肯定的な回答の割合が、67.7%を占めた。過去6回の調査とその割合に大きな差は見られなかったが、“Mastery for Service”を体現する世界市民の育成を目指す本学にとって、このような思いを抱いた学生が多く在籍していることは注目すべき点である。

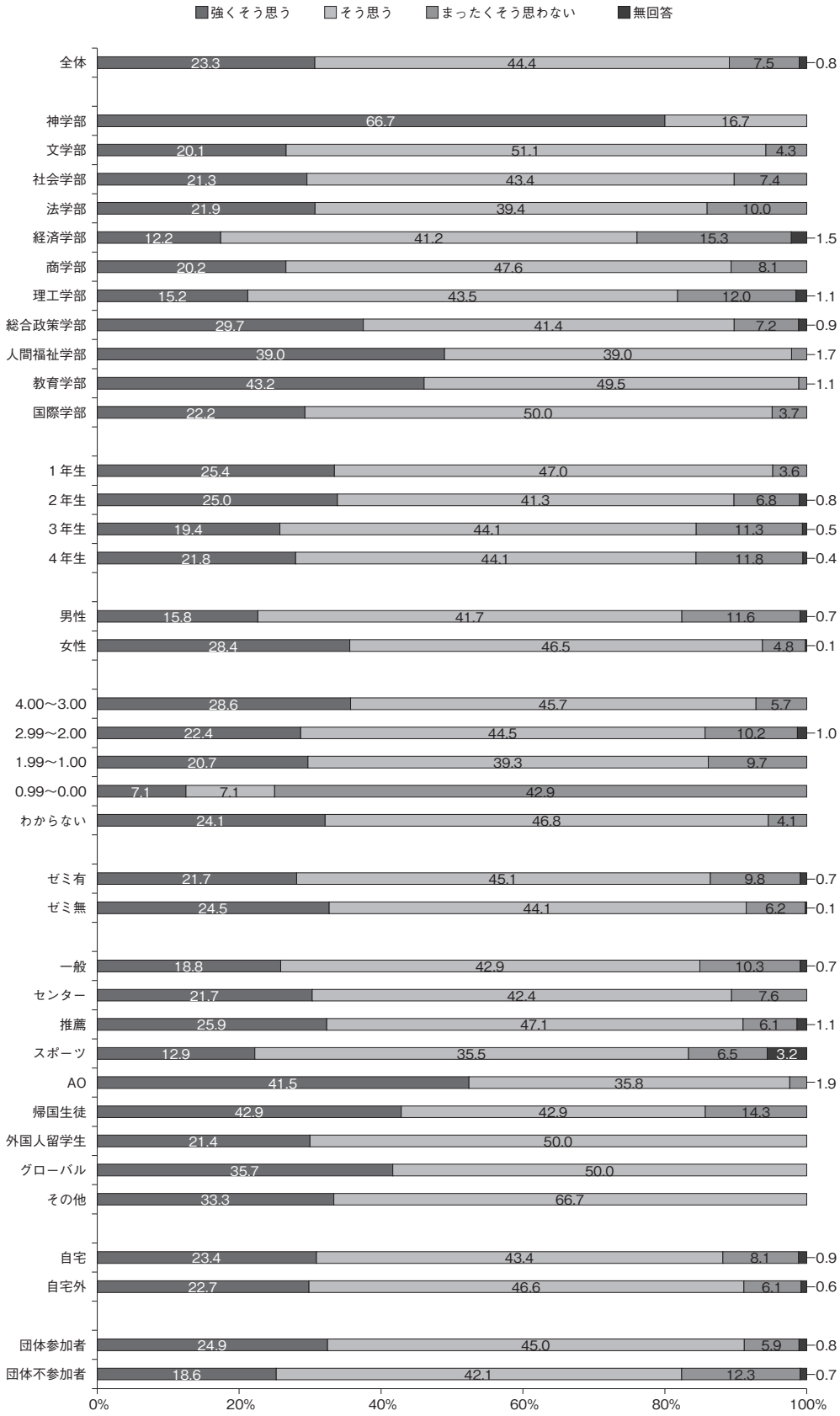
所属学部間で比較した場合も過去の調査結果と大きな違いは見られず、肯定的な回答の割合がいずれの学部においても半数を超えていた。特に教育学部では92.7%、神学部で83.4%、人間福祉学部で78.0%と極めて高い。またこれら3学部では、そのうち「強くそう思う」という回答の割合がそれぞれ教育学部で43.2%、神学部で66.7%、人間福祉学部で39.0%となっており、その思いの強さがうかがわれる。これらの学部はそれぞれの学部の性格上、ボランティア活動への関心の高い学生が多く集まっており、それが回答結果にも反映されたと推測される。

以上の結果より、今後はボランティア活動支援センターを中心に、多くの学生の「ボランティア活動をしたい」という思いを実現させるための支援を大学として積極的に行っていくことが求められていると言えるだろう。

図Ⅱ-39-1　ボランティア活動をしたことがあるか



図Ⅱ-39-2　今後、ボランティア活動をしたいと思うか



40. エクステンションプログラムの認知度・活用度

Summary

学内実施のエクステンションプログラムはその存在を学生の約３分の２が認知している一方、活用したことがある学生は8.5%に留まった。受講料、講座内容への関心や開催時間についても新たに設問を設定したが、「わからない」と答える学生が多く、存在は認知しているが、内容等を確認する等の次の行動へ移っていない現状が明らかになった。

Q34. エクステンションプログラム（学内で実施されている正課外の資格取得、就職支援の講座）についてお尋ねします。ＡからＥのそれぞれについて、あてはまる番号を１つ選んで○をつけてください。

A	エクステンションプログラムを	→	1	知っている	2	知らない	
B	エクステンションプログラムを	→	1	活用したことがある			
			2	活用したことがない			
C	受講料が	→	1	高い	2	安い	3 わからない
D	講義内容に関心が	→	1	ある	2	ない	3 わからない
E	開催時間が	→	1	合う	2	合わない	3 わからない

１．単純集計結果

今回の調査では、設問においてエクステンションプログラムを「学内で実施されている正課外の資格取得、就職支援の講座」であることを明確にして質問した結果、約65％、３人の内２人の学生が当該プログラムを認知していることがわかった。

一方、前回の質問では、エクステンションプログラムを「学内で実施されている正課外の資格取得、就職支援の講座」とは明示しなかったため、学外のものも含めて回答された可能性があったが、今回は対象を明確にしたことで、活用経験等の割合が前回約20％から8.5％に下がったと考えられる。

興味深いのは、エクステンションプログラムの認知度が高まっていることである。法学部、経済学部、商学部については、演習や授業での告知に協力してもらっているが、引き続き認知度を高める効力が高いということを表している結果と言えよう。特に１年生の認知度が前回29.3％から53.5％と有意に高まっているが、新入生に対する広報の手法は過去からあまり変えていないことを勘案すると、入学前から自分の将来について考えたり、資格取得を検討したりすることが高等学校段階や入学前段階から増えてきていること、４年後の就職活動への漠然とした不安があることなどが考えられる。

Q34-B で活用経験の割合が10％を上回った学部は、法学部、経済学部、人間福祉学部、国際学部となったが、Q34-D で講座内容への関心が高かった学部とほぼ同じ結果となった。学内でのエクステンションプログラムの実施内容（講座ラインナップ）が活用経験に影響を与えていると推測される。

２．クロス集計結果

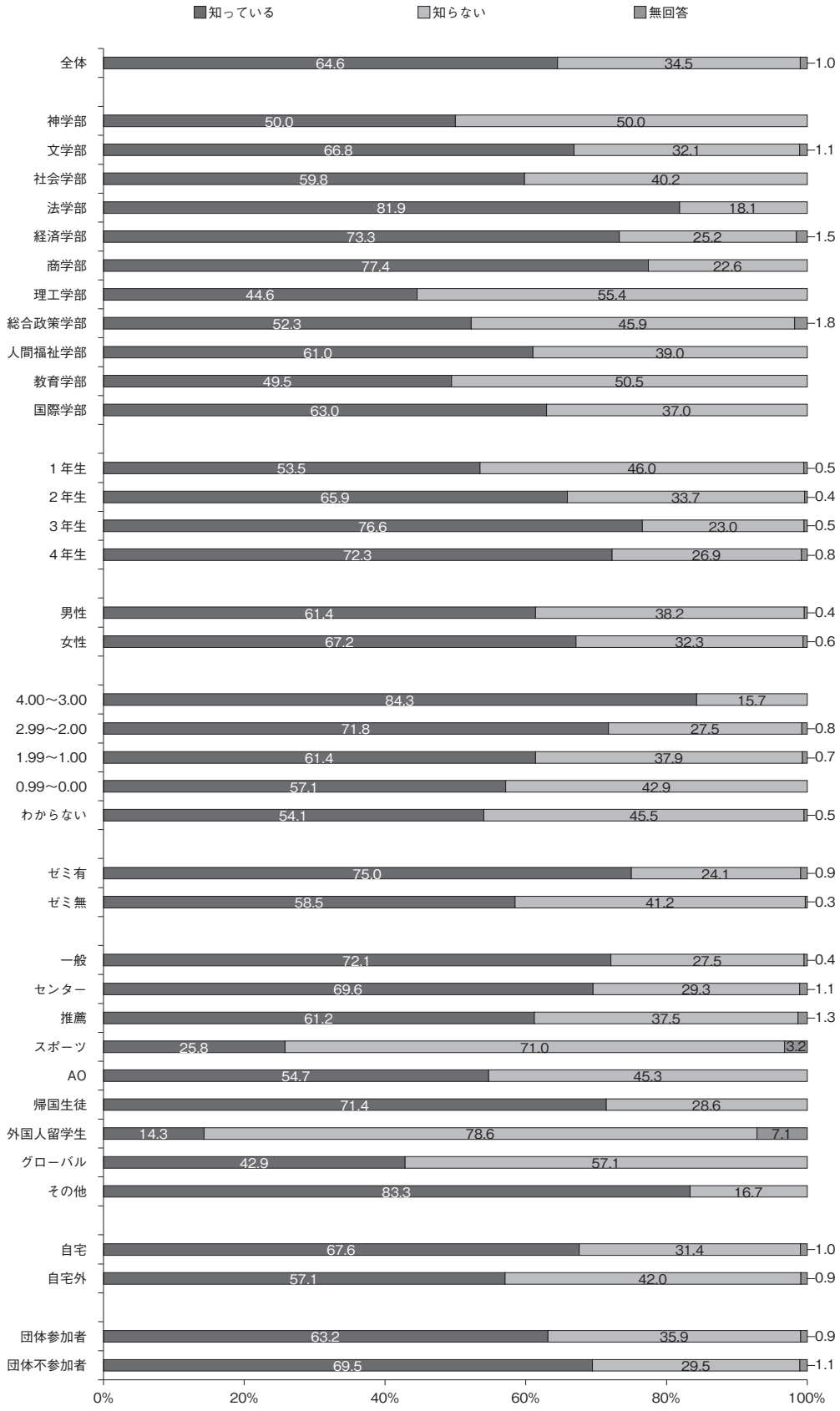
Q34-A とQ3-3（授業以外の学習：専門学校・資格取得に向けた学習）とのクロス集計結果では、「知っている」学生の学習時間が長い傾向があることがわかった。また、Q５（在学中に取り組みたいこと）とのクロス集計結果では、「専門的知識の修得」、「資格取得」を在学中に取り組みたいと考えている学生ほど、本プログラムの存在を認知しており、Q7-2（将来の夢や目標の実現に向けた取組）とのクロス集計結果においても、将来の夢や目標の実現に向けて実行している割合が高いことにも表れている。

一方、Q34-B（活用経験）とQ3-3（授業以外の学習：専門学校・資格取得に向けた学習）とのク

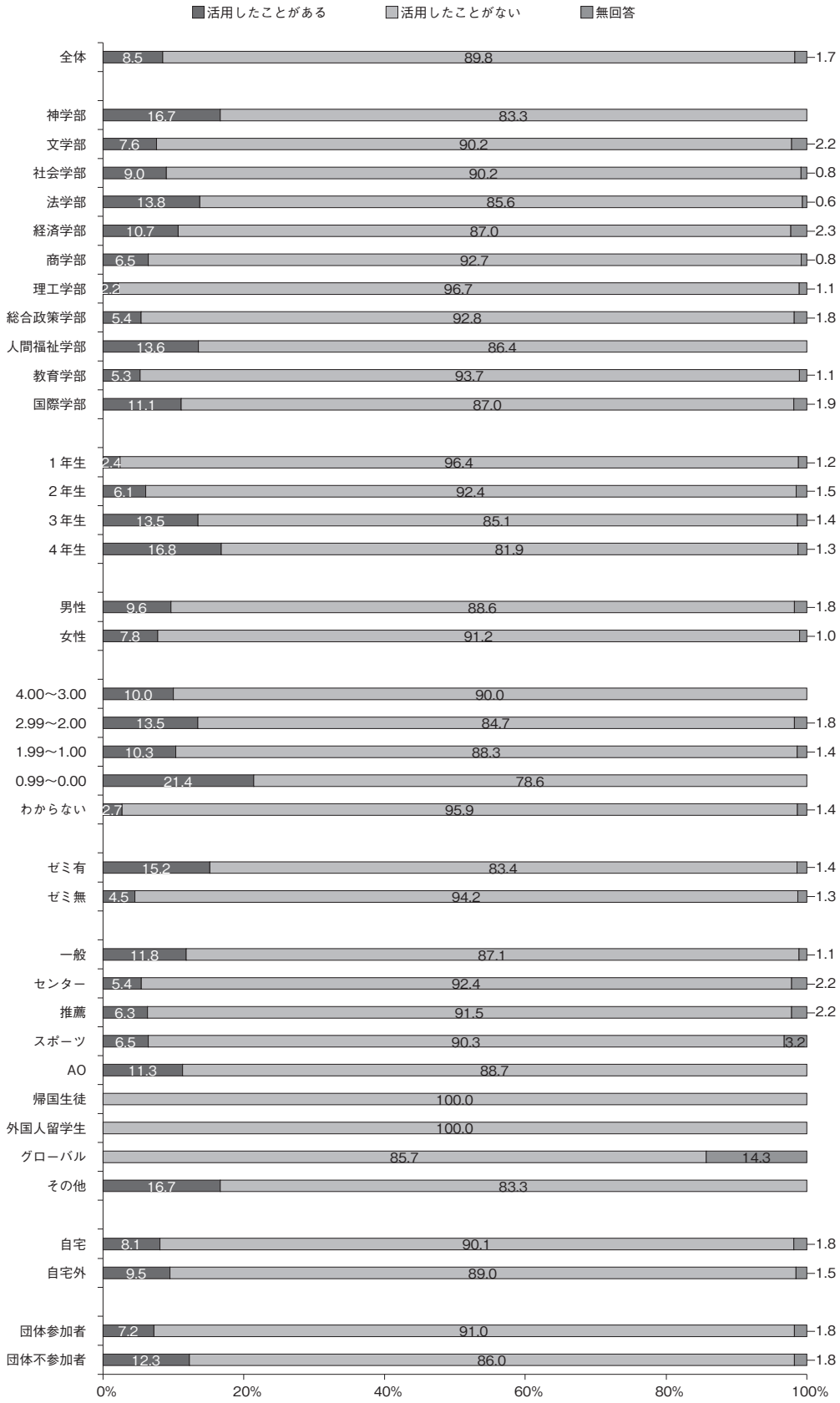
ロス集計結果では、「活用したことがある」学生は「活用したことがない」学生に比べて週あたり６～10時間学習している学生が多く、学習時間が長い傾向がある。また、当然ではあるが、Ｑ６-Ｇ（資格関連科目への取組）は「活用したことがある」学生の方が圧倒的に熱心度が高い結果となったが、そのことはＱ７-2（将来の夢や目標の実現に向けた取組）とのクロス集計において、「何をすべきかがわかっており、実行している」学生の割合が圧倒的に高いことにも表れている。

なお、Ｑ34-Ｃ（受講料）と他の質問項目とのクロス集計結果では、受講料が高いか低いかが他の因子に強い影響を与えていると言い切れるものはないが、Ｑ34-Ｄ（講義内容への関心）はＱ６-Ｇ（資格関連科目への取組の熱心度）と相関があった。また、Ｑ34-Ｂ（活用経験）はＱ34-Ｄ（講義内容への関心）及びＱ34-Ｅ（開催時間）と密接な関係にあり、関心があり、開催時間が合えば多少費用はかかっても活用している学生が大多数であることがわかった。

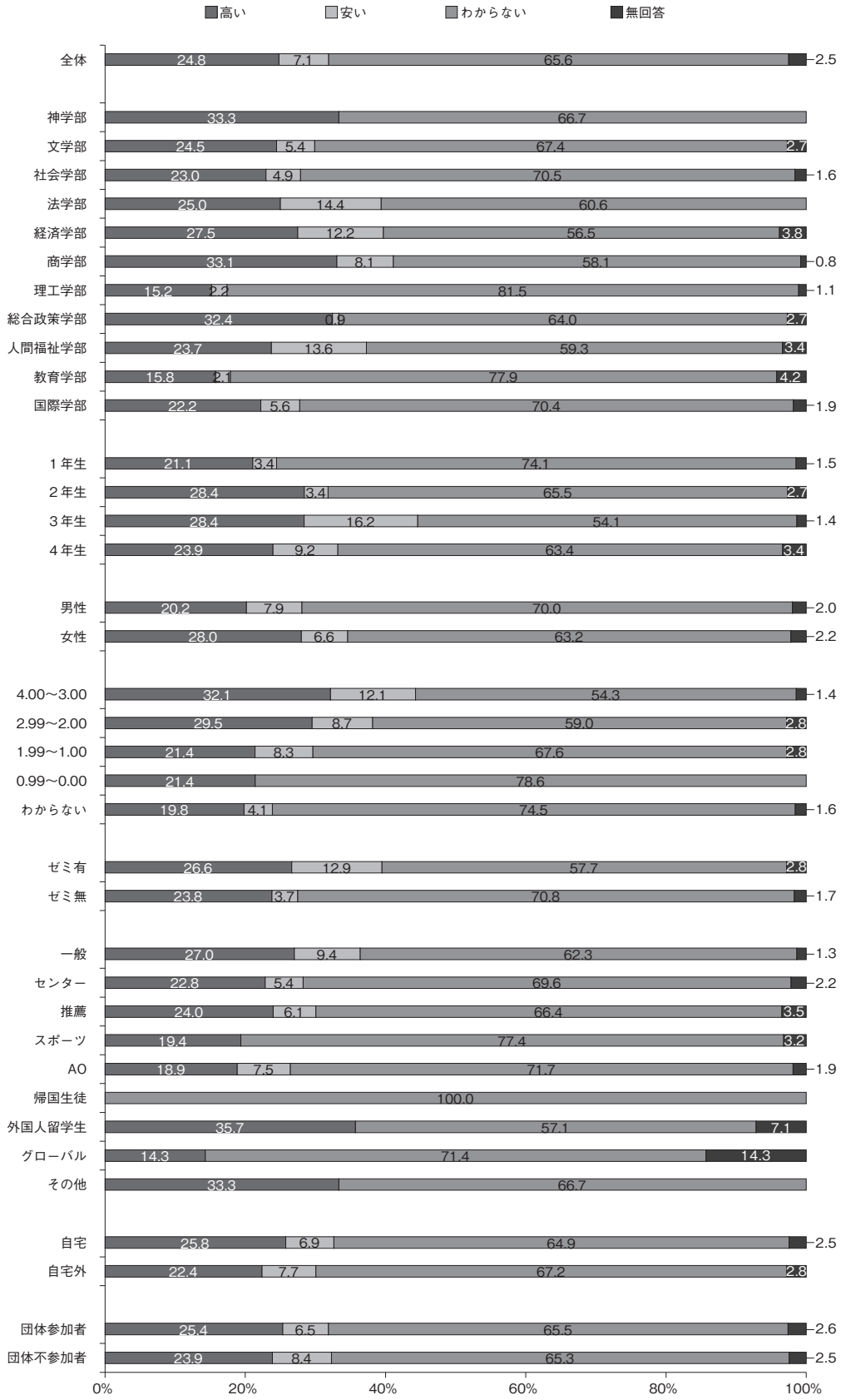
図Ⅱ-40-1　エクステンションプログラムの認知度



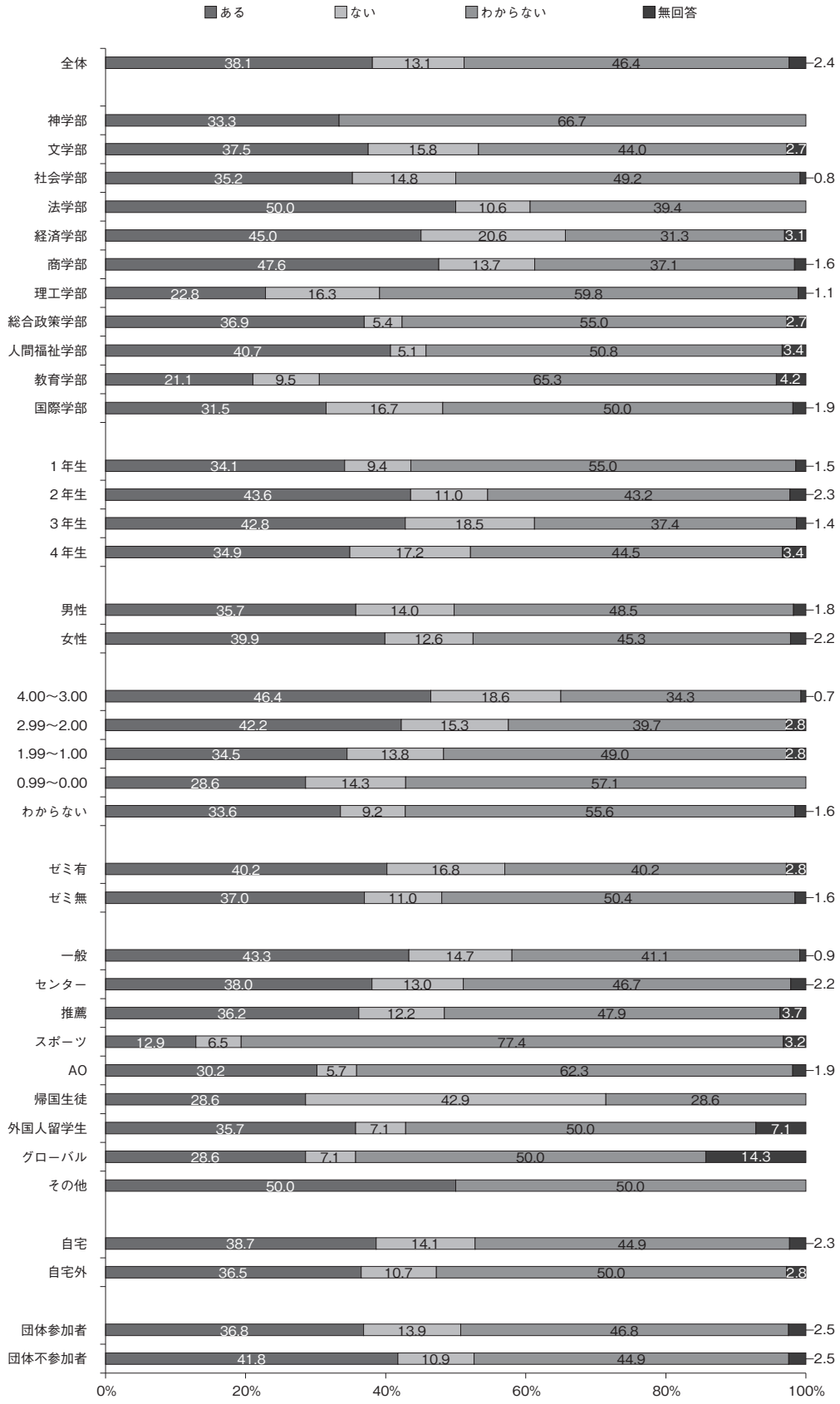
図Ⅱ-40-2　エクステンションプログラムの活用度



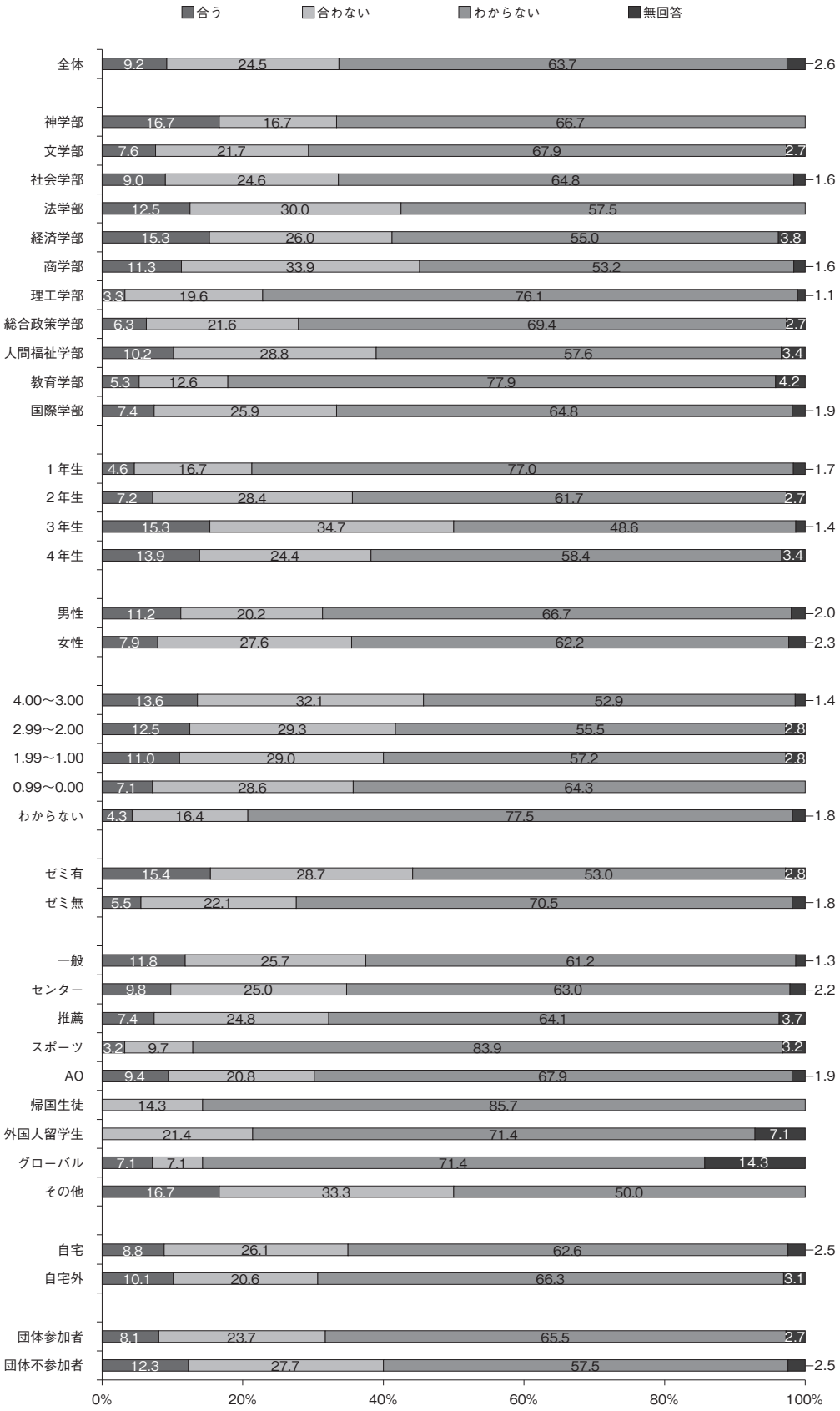
図Ⅱ-40-3　エクステンションプログラムの受講料



図Ⅱ-40-4　エクステンションプログラムの講義内容



図Ⅱ-40-5　エクステンションプログラムの開催時間



41. 卒業後の生涯学習プログラムの活用希望について

Summary

全体では前回調査より下がり、６割を超える学生が活用を希望しないという結果となったが、３年生、４年生といった上位学年の学生ほど活用を希望する傾向が見られた。

Q35. 卒業（修了）後も学びたい講座、プログラムがあれば、有料でも大学で学びたいと思いますか。

1　思う　　2　思わない

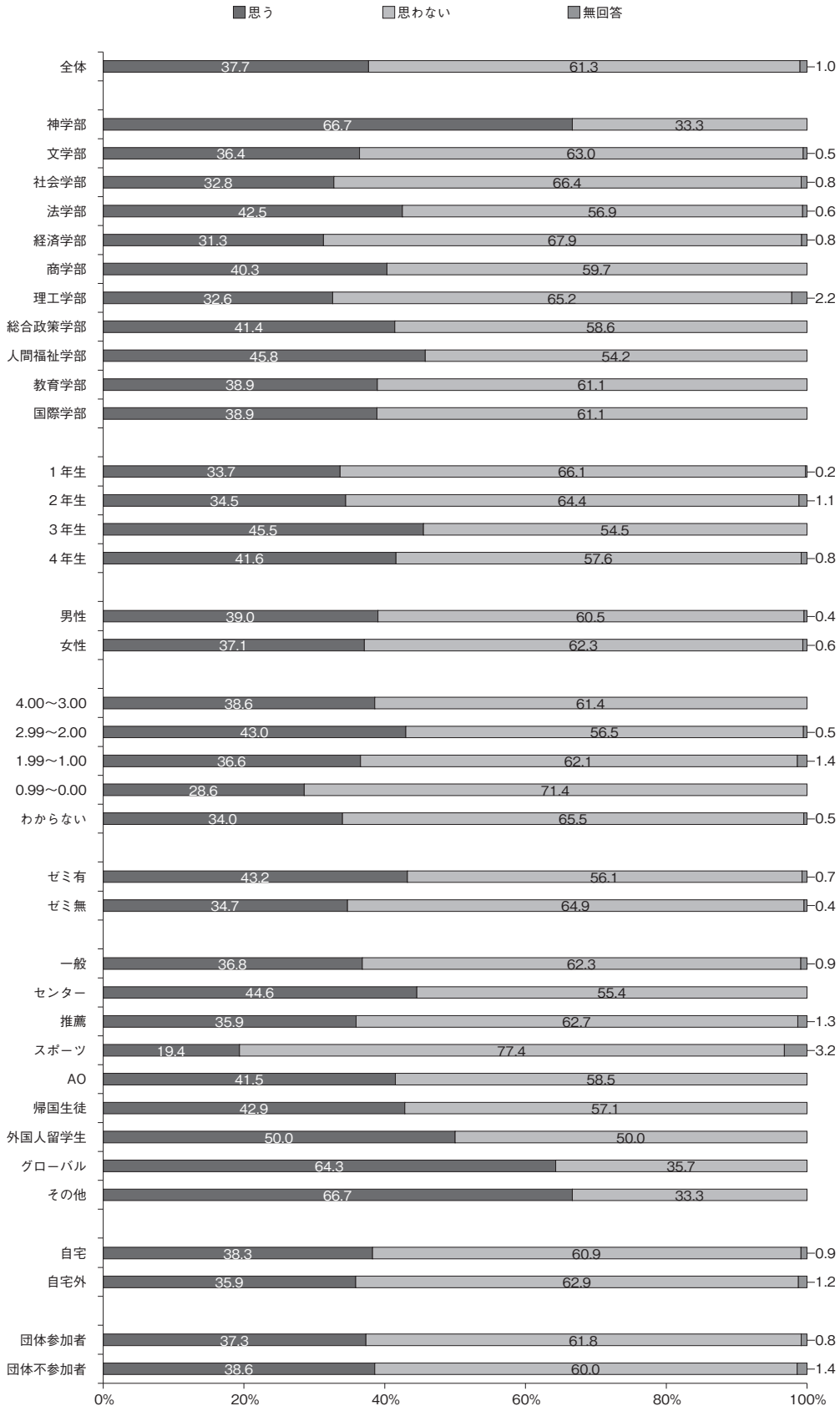
前回に引き続き、本学が提供する生涯学習プログラム、講座に関する卒業後の活用希望について、有料でも大学で学びたいと思うかという問いについて、二者択一で質問した。

前回調査に比べると、全体の「思う」の割合が37.7％と、活用希望の割合が７％下がったが、学年別では３年生が45.5％、４年生が41.6％と「思う」の割合が１年生、２年生より高い傾向は前回と同様となった。

この傾向は学生が自己のキャリアビジョンが固まっていくこととの関係も深いとは思われるが、Q34-A のプログラムに関する認知度と近く、プログラム内容等の充実とともに、その認知度をさらに高めていくことが、卒業後の活用を促進させることにもつながると考えられるため、本学として卒業生に活用してもらえるようなプログラムをより充実させていかなくてはならない。

なお、本調査項目は、他の調査項目とのクロス集計結果において有意な内容として指摘できることは特段なかった。

図Ⅱ-41　卒業後の生涯学習プログラムの活用希望



Ⅲ　自由記述のまとめ